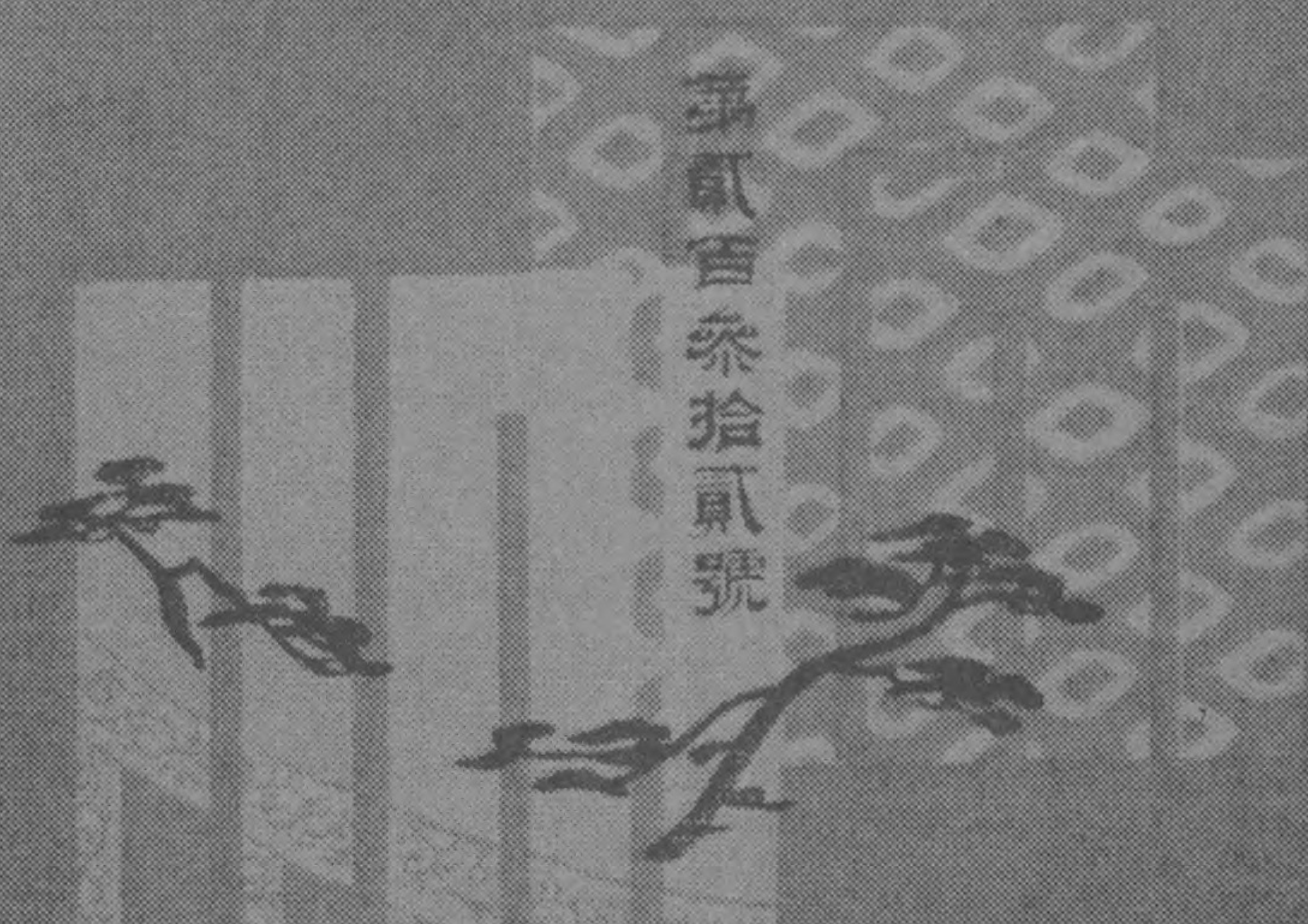
女鑑

明治三十四年七月五日發兌



女鑑第貳百參拾貳號

目錄

定價

一冊 金拾錢

六冊(三ヶ月分) 金五拾五錢

十二冊(半年分) 金壹圓

全國無遞送料

明治三十四年七月四日印刷

明治三十四年七月五日發行

編輯兼發行人 川崎直衛

印刷人 並木其雄

東京市京橋區築地二丁目十一番地

發行所 國光社

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地

發賣元 [illegible]思館

(電話本局一千三百七番)

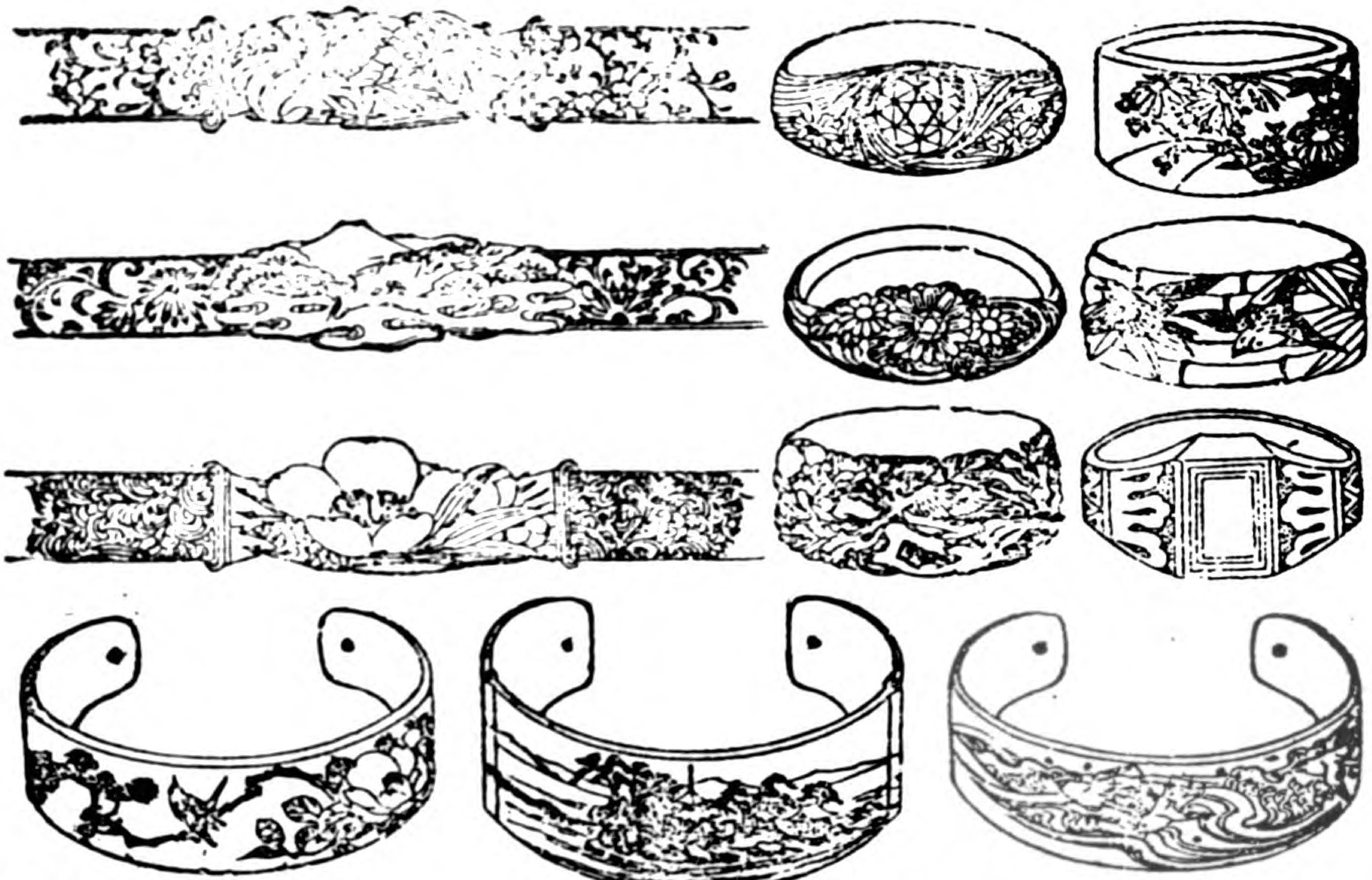
謹告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊雜誌及圖書等單に國•光•社•とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に切角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚御手數ながら以後必らず國光社**女。鑑。編。輯。部。**へ宛て御寄贈被下度此段謹告仕候也

東京京橋區築地二丁目廿一番地國光社

女鑑編輯部

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價　十六圓
乙價　十四圓
●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價　廿二圓
乙價　十九圓
◎廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價　廿六圓
乙價　廿三圓
●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價　卅四圓
乙價　廿九圓
●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價　卅六圓
乙價　卅一圓
●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價　卅八圓
乙價　卅三圓
●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價　二百五十圓
乙價　百八十圓
丙價　百三十圓
丁價　九十圓
戊價　六十五圓
已價　五十圓
●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢
◎廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢
◎純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢
外ニ段付模樣付形狀ノ雛形ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫繡珍綾緞付
甲價　卅五圓
乙價　三十一圓
丙價　廿七圓
丁價　廿三圓
戊價　十九圓
已價　十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價　十一圓
乙價　九圓三十錢
●廿金二匁付片切彫刻
甲價　十四圓五十錢
乙價　十二圓五十錢
●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價　十九圓
乙價　十七圓
●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價　廿圓
乙價　十七圓五十錢
●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片ゝ彫刻付
甲價　廿三圓
乙價　廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗によりて代價に高低の品種々あり

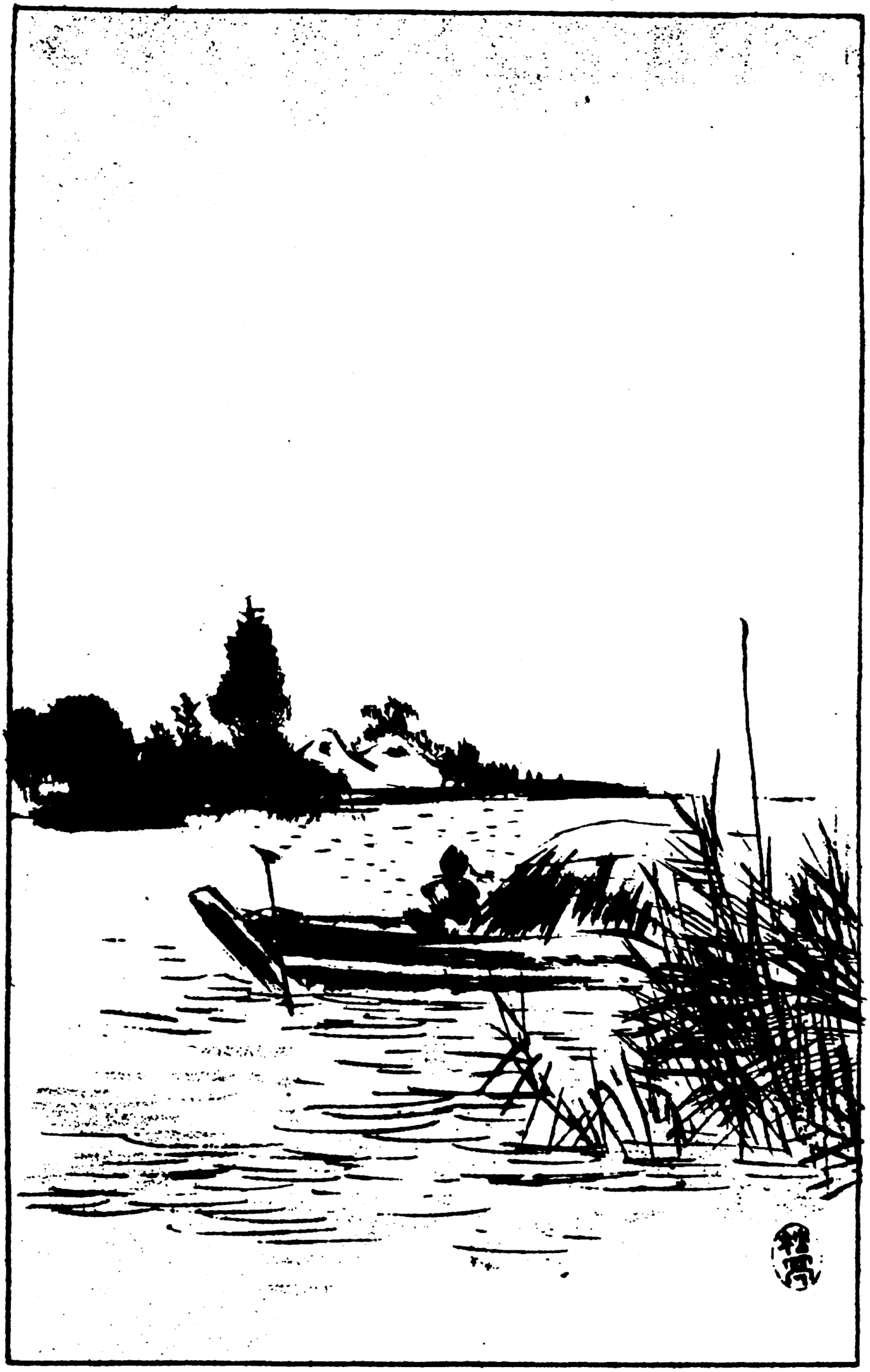
時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目

吉沼又右衛門

電話本局三十三番
長距離電話接續

浮曉



[illegible]

和

[illegible]

偶感一則

公道の秩序　多忙なる査公を勞して、やうやくに、公道の秩序を維持せむとする、既に、甚だ、國民の不名譽ならずや。然るに、猶、これを恥づることを知らず、誤りたる敵愾心を起し、わざと、左を空しうして右を往き、感謝せざるべからざる査公を苦しめて、以つて、小快を貪らむとす。其の陋其の愚、今、はた、これを何とか言はむ。

這般の小事　に於いてだに、やうやく、第二の國民に對ひて、望を屬することとを得るのみなり。然れば、吾人は、其の媬養者たり、教育者たる婦人、即ち、世の母に對しては、更に、深く、望を繫くる所以なり。

若し夫れ　斯くの如く、其の責任の重大なることを顧慮せば、婦人は、常に、其の品性を高尚にすること、其の行動を忽にすべからざることに、注意を怠る能はざるべし。

或は曰く我が國の女權は、枉屈せしめられたり。大に權利を伸張せざるべからずと。吾人は、いたく、世の人の、所謂三百代言的根性に墮落したるを惡む。**そも〳〵**權利義務といふやうなる言葉に司配せられて、其の身を進退せむとするものゝ如きは、法律以外に制裁あることを知らざる徒輩、否、警察司法の官吏によつて、其の所謂罪惡を摘發せられざるかぎりは、世に、罪といふものゝあることを知らざるものなり。

貞淑温良の德を發揮せられたる、日本婦人を驅つて、斯の不賴者たらしめむとす。言ふ者、猶、まことに、彼の婦人のために、これを言ふことを得べきか。**勿論**眞誠に、愛惜するがために、斯く言ふにあらず。要は、たゞ、輕薄なる二三の婦人を煽動し得て、以つて、自己の小功名を攫取せむとするに外ならず。宜なるかな。彼の輩の、日に、ます〳〵、世人のために指彈せらるゝに至れるや。

由來わが國民は、強をおそれず、また、弱を侮るを恥づ。光輝ある三千有餘年の歴史は、正に、この義俠によつて、其の一部を莊嚴にせり。然るを、何ぞや。婦人の柔順なるに乘じて、之を屈辱し、これを威壓するの陋を爲さむや。何んぞ

況んや。所謂其の權利を稱ひて、卑屈面從の悲境に投ずるの慘を敢へてせむや。

柔順貞淑は、婦人の美徳なり。最も、よく、婦人の本性に適合せる徳なり。この徳を全からしめむがために、さかんに、之をすゝむるなり。突飛なる運動を、社會に試みむとするものを制止するは、畢竟、彼等をして、圓滿に、其の天性を成長發展せしめむとするの、老婆心に外あらざるなり。是を以つて、猶、彼等を辱むといはゞ、須臾く、其の愚者の口に委せむのみ。

あまぐもの　たえずたなびく　みねにだに　すめばすみぬる　よにこそありけれ

惟喬親王



婦人の早衰（九）

三輪田眞佐子

精神の修養だに怠らざれば、時到りて、頭は鶴髪となり、身は老木の如くならんも、心は、いつも、賢明にして、魂の緒の絶ゆる瞬間までも、斷判の亂るゝことなかるべし。亦、病苦のごときも、精神撓まず屈せざるものならば、勢ひ身體にも元氣添ひて、おのづから、活動の早衰をも抑ゆる効あらんか。おのれは、國民たるものが、大器晩成の態度に習はで、早熟早衰するを以て、一の不幸とはなしぬ。讀者、以て、如何とし給ふか。

この外、婦人の早衰を防ぐ方法として、實地の見聞を廣くすると、適切なる交際をするとを數へざるべからず。牝雞の晨するは家の禍なりとはひし如きも、必竟、見聞少く、從ひて、判斷適當ならざる婦人の、主となり事を行ふは、其の結果、幸にあらざるを戒めけん。なほ、男子とて、見聞狹くして、喋々喃々するは、失敗の基なり。況んや、婦人の任は閨門に限り、其の職分は、内助に止まるものなるを以て、その外事に關係するは、全く、餘力を以てするもの、若しくは、特別の事情の存するものなれば、概して、女子の見聞の廣からざるは、境遇の然らしむる所なるべし。これを以て、おのれは、世の婦人連が、是非とも、婦人に相應たる區域内に於て、見聞を廣く且つ確にして、以て、その言ふところ規に當り、その行ふところ矩に從ふに至るを望むなり。その曉に於てこそ、女

子と小人とは養ひ難しとせられける戒も、無用に歸するなれかし。

然るに、婦人の多くは、年と共に見聞の機會少くなるのみならず、唯、迷信を以て心を支配し、世の訛傳僻説に雷同し、あるは、徒らに意地を張り、我慢を遂ぐるを以て、自得する觀あり。甚しきは、學識ありといはるゝ限の婦人社會にても、歌を詠むものは、歌の外に學あるを知らず、漢籍に通ずるものは、漢籍の外に學を知らず。亦、外國語を能する婦人は、外國語の外に、學あるを知らざる如き固陋の見識あるを免るゝもの少きがごとし。蓋し、我が好むところに厚きは、止むを得ざることゝいへども、畢竟するに、見聞の挾き弊なれば、戒めざるべからず。

古書に、嘉肴ありといへども食はざればその甘を知らず、至道ありといへども學ばざればその善を知らずと。故に、學校に於て、年少を敎ふるものは更なり、家庭に於て、子孫を育つるものは、能く學びて、人を養育する方針を誤りそ。凡そ、賢明ならざる母の膝下に生ひ立ちし子孫の俊傑なるは、望むべくもあらず。薄志弱行なる人より育せられし少年の前途思ふべきなり。

交際は、故ら、好みて廣ぐるは害あらんも、自然に、必要なる範圍内に於て、良知人を得てこれに近づき、良友人に逢ひてこれに親み、以て、知識を交換するのみならず、互に相戒め、互に相助くるときは、精神の早衰するを防ぐに足らん。わきて、婦人の精神修養に必要なるは、女德美にして仰ぐべく、言動秀でゝ敬すべき先輩を得て、これを模範と仰ぎ、その感化を受くるに若くものなし。

されど、恨らくは、世に、一藝一能に長ずる人は

多からんも、これを知人となし、將た友人となし、或は、師と仰ぐに足るもの少きを。蓋し、その藝その能を受くる師友はなきにあらざれども、精神の早衰を防ぎ、女德の模範となるに足るものは、得易からざるべし。凡そ、女子敎育の難きは、この一點にあり。良妻賢母の出でざるは、かゝる模範なきためなり。あゝ。

要するに、婦人達は、能く身體の保養と、精神の修養とに注意して、兩者の早衰を免るべし。これ、一個人のため、及び、國家のため、最大なる幸福なり。

（完）

女子の學問（二）

岸田松二郎

既に述ぶるが如く、學問の弊を除去して、眞正の價値あらしめんと欲せば、能く、其の學問の眞味を咀嚼し、能く之を消化して、自己の所有物となし、以て、之を實事に應用して、寸毫の支障なきことを期せざるべからず。之を詳言すれば、嘗て、收得したる知識を以て、寶の持ち腐れたらしめず、時々刻々、之を活用し、事々物々に遭逢して、其の足らざるを補ひ、己が學びたる所に加ふるに經驗を以てし、又、前人の敎を對照して、成敗得失を考覈せざるべからず。然らば、則ち、人世は、皆、是、學問の道途にして、終局の時なく、人は、皆是、終生の生徒にして、卒業の期なし。然るに、學校の敎授を受くることのみを以て、學問と思惟し、文章を讀むを以て、敎育を受けたるが如く思考するが故に、學問の區域を狹くし、又、其の時期を短くして、世人に誇揚するの裝具と誤認するの弊をも生ずにより其の結果として、學

間ある女子は、舅姑良夫に擯斥せらるゝの不幸をも招くに至るなり。人は云ふ、某の孃は、某高等女學校を卒業せり。某の孃は某小學校を卒業せしのみ。故に、甲孃の敎育の程度は、乙孃の敎育程度より高し。然らば、甲乙兩孃の優劣は問はずもがなし。之を以て、啻に、兩者の人格を上下するが如きは、蓋、近來の常事に似たりと雖ども、余は、俄かに、是を賛すること能はざるなり。余は信ず。學校なるものは、社會の小模型にして、其の敎育の方針は、過去により將來を推想したる、假定的のものなりと。果して、然らば、將來、實際の事に臨みて、學校敎育の程度如何を詮するは、寧ろ、受敎育者の追究如何にありと謂はざるべからず。換言すれば、高等敎育を受けたる女子も、事々物々、研究的の思想を以て、事を處せざるときは、初等敎育に了りたる女子にして、時々刻々、實事に就きて、研究參案するものに劣るの結果を觀るに至ること、益、必然の勢なり。更に、一歩を進めて之を云はゞ、學校敎育を受けたる女子も、悄乎として思ふことなくんば、學校敎育を受けざる女子にして、擧手投足長者に從ひ、事々物々、研究思慮するものに劣るの結果をも觀るに至るべし。時適さに初夏に向ひ、諸孃は、單衣の料中、久留米飛白なるものなり。是、亦、日常諸孃の衣料となるべし。之を着けたる諸孃は、如何なる觀想をか浮ぶる。蓋、井上でん女の發明に係ることを聯想するなるべし。女や、如何なる人ぞ。其の齡正さに小學年齡にあり。而かも、今日の敎育を受けたるものにあらず。公益の德敎を聞かず、理科の講筵に列せず。而るも、猶、此の一大發明の事あり。其の他、ウメ女の家政を整理して建學の資を献じたる、ギン女の父母に事ふる兩道を全

うしたるが如きの類例、少からず。皆、是、今日の教育を受けたるものにあらざるも、猶、且、今日女德の模範として屈指せらるゝもの、枚擧に遑あらざること、甚だ明なり。校門に出入して、智識を收得したるもの、未、曾て、發明の事あるを聞かず、修身の道を學び、倫理の學を了りたりと稱するもの、往々にして、不德の醜を漏らし、家政の道を修めたりと稱するもの、時々、舅姑の機嫌を損すると聞く。豈に、前者に鑑みて忸怩たらざらんや。畢竟するに、卒業證書授與の式に於て、孃等が述ぶる所の答辭は、一種の形式的誓約にして、證書を懷にするの明日、既に、萬事了せりとなし、昨日述べたる趣旨を反古と化し去ること多きが故に、卒業の年を經ること、益、久しければ、則、彌、自己の腦裡より消散して、實事に處するの參考となること少量となるのみならず、又、全く、活用せざる部分の多きに居るが如し。是、豈に、一大恨事と謂はざるべけんや。余が、屢、耳にする所によれば、左の如し。即ち、學校にありて、修得したる諸學科の中にありて、日常、生活に不必要なるも甚だ多し。今、之を屈指せば、裁縫、讀書、作文、算術、習字の他は、殆ど、通常の婦人として使用の時期なし。而して、家計の豐なる家にありては、裁縫は、之を其の道の人に托し、算術を用ふべき場合は、他に其の人あり。書信の往復、文章の筆寫、皆、夫々の人あり。敢て、自から、手勞するに及ばず。若夫、商賈の家にありては、單に、加減、乘除の簡單なるものに止まりて、其の他を用ゐず。子女を擧ぐるに當りては、其の媬育のために心を奪はれて、他を省みるの遑なし。此等、實際の狀況なるが故に、嘗て、學び得たる諸科の中にも、其の用ふべ

き部分あるも、甚だ多し。地理を諳じて如何ある利益あるか。歷史を記憶して如何ある必要あるか。況や理科をや。況や圖畫をや。又、況や唱歌をや。苟くも、女教師たらざる以上は、己が子女の通學する時期に及びて、復習の補助をなすに過ぎず。斯る時期に到達するには、己が卒業の時を去ると既に遠きが故に、自己の腦裏を去ること、亦、甚だ遠しと。此の言をして、果して、眞ならしめば、余は、大に、女子敎育のため、今日の隆運を悲しまざるを得ず。何となれば、目今女子をして、高等女學校程度の教育を修了せしめんには、幾許の年月を要し、幾何の費用を要し、又、父母をして、幾何の不自由をなさしむるか。殊に、近來、女學生服裝の改良論あり。今、猶、試驗中に屬するを以て、學校服裝なるもの、一種の容體をなし、家庭生活の服裝と調和せざるがため、女學生を止めて、純然たる良家の婦人となるに至るまで、特に要すべきもの少からず。之に、多年の學資を加算する時は、決して、少數の額にあらざるなり。女學生の腦裏は、多種なる學科の去來頻繁にして、之を把捉するに忙はしく、隨て、身體發達の障害となるより、之を療するの方法として、體育奬勵の法あり。夫、斯の如くにして、他日の成効、前段の如くならしめば、一は、國家經濟の上より、一は、身體衞生の上より、大に、之が改正を疾呼せざるべからざるなり。然れども、余は、斷じて、前上事實の、未だ、全く、盡さゞるあることを信ずるものなり。他なし。既得の智識技能を高閣に束ねて、之を適宜に使用せざるに座せずんばあらず。

試みに看よ。文字を讀み得る女子が、新聞を讀むの狀況を。余の聞く所によれば、新聞紙には、自

から、其の觀るべき心得ありと。誠に、其の掲載する所のものは、社會の全豹に渉りて其の眼を注ぎ、文學、技術、政治、軍事、教育、農工商の狀況より、有ゆる、現實社會の實現を示し、又、將來の風潮を推究し、我が國家の狀態より、世界各國の大勢を錄し、駸々として、文化の變遷するの形勢を描出すること、殆ど、現世の活動寫眞を觀るの思ひあり。之を以て、各方面に散じて、各其の業務に從ふものは、瞬時も、等閑に看過すべからざるものあり。又、我が現下の國勢を知りて、之に處するの措置を案じ、將來を慮りて、子女の事を思はゞ、其の參考となるべきこと、多々益之あり。然るに、女子は、世事に關せずして、一家の中にあれば可なりとなし、我が一家の盛衰を以て、國家興敗の範圍外に置かんと思惟せば、是大なる謬見と謂はざるを得ず。固より、新紙の欄面を讀下して、之に通曉せんとするは難しと雖ども、現實社會の實況に通ずることは、極めて、緊要の事に屬す。斯る場合に遭遇して、仔細に、之を悟了せんと欲せば、即ち、地理に關する智識なかるべからず。歷史的思想なかるべからず。一新紙にして、猶且、斯の如し。然るに、之を之慮らずして、只、其の一部なる小說にのみ眼を注ぎ、之を讀むを以て無上の樂となし、之を語るを以て唯一の談柄となすもの多しと聞く。是、甚だ、恨事と云はざるを得ず。我が女鑑愛讀者は、果して如何。紙上載する所種々の欄あり。若夫、所謂小說談の欄を讀みて、眼を他に轉せざる時は、自餘の欄中にあるもの、只、悉く、無聊に苦しむのみならず、記者が貢献せんと努めたる婆心も、水泡に歸せんこと疑ひなし。果して、能く、各欄に渉りて囑目せば、諸嬢が、曾て、收得したる智識と

相映發して、其の光りの幾分を、實際上に現じ來るべし。凡そ、何れの雜誌も、敎育的なるものあらば、取りて以て之を讀下せんこと、極めて、其の利益あるを知る。況や、他の著書を繙き、純雅高潔なる精神を修養せば、他日、母たるべき好良の資格を備ふるものといふべし。抑、嬰兒の健全に成長せんことを欲せば、先、其の乳質を選ばざるべからず。乳質を精良ならしめんと欲せば、先づ、母體に供する滋養分を選ばざるべからず。子女が、精神界の健全ならんことを欲せば、亦、其の食物たるべき精良の智德の供給を要す。抑、此の智德なるもの、亦、母たる人の腦漿より迸出し來るなり。然るに、之が母たるものは、婦人の常として交際狹く、其の思想界も狹小にして、陳腐に流れ易し。故に、常に、文字の媒介に資り、其の胸量を恢弘し、其の智識を斬新にし、其の思想を高雅にせんことを務めざるべからず。若夫、新紙を讀むで國情を知らず、又、其の國體の現狀を察せず、只だ、我が一家を固守することをのみ務むる時は、其の子女たるもの、亦、自から、利己の偏僻を生じ、國家國君を忘れ、社會共同生活なる觀念を滅却して、國家の良民たる務を怠るの弊習を馴致せんこと、未だ、之なしとすべからず。是、國家の患なり。之を要するに、女子の學ぶべきもの甚だ多くして、敢て、文字を以て學問とのみ思ふべからざるは、勿論なれども、目今、學生となりて學窓にあるもの、若くは、既に、其の業を卒りたるものも、學科の上に於ける眞正の目的を外にして、之を埋藏し、或は、之を蘊蓄せんと務る時は、即ち、前段述る所の、敎育なしとする婦人に對して、遜色を呈せんことを恐る。然らば、之より、各科に就きて卑見を吐露し、敢て、

大方の高教を仰がんとするも、亦、無用の業にあらざるべし。



家政學につきて

細川潤次郎

こは、氏が、昨年七月夏季休業中の心得にもとて、華族女學校に於いて、訓示せられたるものの筆記にして、これ、實に、婦女子の、一日も忽にすべからざる教訓なり。（記者）

抑、家政と曰へることは、一家の政にして、國の政事と相並びたる語なり。固より、漢語にして、六朝の痩信と曰へる人の文章に見えたり。我が國にては、近來用ひなれて、家政とし曰へば、誰にも能く分る語となれり。一體、家を治むとか、家を齊ふとか曰へば、唯に、男子の職分と解すべきを、家政と曰へば、女子の職分と解せざる者なかるべし。一家の雑事を家政と稱すること、家政を女子の職分とすること當然たるべし。國政の、國に取りて大切なることは明白にして、國政の當不當に由りて、其の家の盛衰貧富幸不幸の分かる丶ことなれば、一家に取りては、頗る、大切の事なりとす。余は、嘗て、家政の栞と曰へる書の序文に、此の事を論じて、一家の主婦は、一國の大藏大臣なり。更に、之を、總理大臣に比擬するも不當に非ずと曰へり。此の如く、重大の責任を有する者なれば、其の責任を全くするには、緻密なる注意と精細なる研究とを要する者なり。古の婦人は、父母舅姑に事へ、良人に事へ子女を育する外

は、女工を事とし、飯食を辦ずる位にて事足りたれども、近來に至りては、男子の事務頻繁になりたると共に、女子の事務も、是に伴ひて、益々複雜となり。家政の範圍展開して、男子のすべき事迄立入るべき樣になりたれば、從前の婦人と違ひ、簡單なる者に非ず。此れ、家政の緻密なる注意と、精細なる研究を要する所以なり。又、本校に、家政學のある所以なり。然れども、生徒も家庭も、此の家政學に重きを置かざるに似たり。其の故を考ふるに、家政には、大抵、瑣末の事多く、金錢出納の事にても、大凡、定まりたる者にて、若し、建築をなすとか、大勢の客をするとか曰ふが如きことは、一家の人相談して後施行する者にて、定まりたる金額の支拂は、矢張、瑣末の事の如く思はるべし。しかし、瑣末の事とは曰へ、日々の事あれば、塵積りて山を成す譬の如く、決して、瑣末の事にはあらざるべし。且又、日常の事は、誰にても、習慣となりて、不都合の事ありとも、餘り怪む者もなし。此れ、所謂、習而不レ察と曰へる者なるべし。此等の事情に由りて、家政學を輕々看過するの憂なきにあらず。謂なき事共なりとす。

家政學は、躬行實踐すべき者なり。學科の內にも、地理歷史等の如きは、智識を啓發する爲の者にて、躬行實踐すべき樣なかるべしと雖も、家政に至りては、智識にのみ關することもあれども、其の多分は、躬行實踐すべき者なり。且又、衣服の裁縫、飯食の調理など、始として、一二度之れを試みて足れる者にあらず。幾回となく反覆して後、始めて、熟達する者なり。家政學の講義を聞き、之を記臆したりとて、一旦、實踐に臨み、應用せんとするときは、蹉跌して成功せざるべし。是故に、諸氏は、平日家庭に在りて、父母の爲る所を見習

ひ、之れを補助して、自己の家政に於ける練習をなすべし。庶幾は、他日他家に嫁し、其の家政を執るに於て、一家の大臣たる職分を全くせんことを。

湯地丈右衛門の母（承前）

田山とり子

一大豆飯
一どんぐり飯
一葛根團子
一米粉一杯、小麦かす一杯、糠一杯を合せ、團子としてくふ
一床唐芋、いつもは捨り候へども、腐り入らぬところをとりてたべる
一唐人飯とて、米をいり、水に一夜ばかりひやかし、飯にたく
一わらめ飯
一くさぎの葉、おふばこの葉をゆで、飯に入るゝ
一麥飯などは上々の品に候
右の品々に、米を、少し、處々につき候位に見へ申候事
右の仕合に、御母様の御働き一つにて、世を渡り候。前々よりの家具も、漸く持届候も、御母様あらずして、外人にては、容易に、出來がたき事と相考へ候事

是はこれ、丈右衛門が、母の恩を忘れぬためにとて、記しおきけるものなりといふ。天保七年の饑饉に、かねては、富家豪家と羨まれし人々にてさへ、朝夕の煙も、いと心細げに見えしを、まして、永年の浪々に加へて、夫君の豪放。もし、他の妻あらましかば、如何にかすごしけむ。

都尾子は、即ち、丈右衛門が書しとゞめし如く、木の根、草の葉をむしりあどして、ともかくも、夫君をして飢ゑしめず、愛兒をして、衣食などのことにて、其の友に、則をとるが如きことなからしめ、また、其の師に對して禮を缺がしむるがごときことなかりき。

ひたすらに奢侈にあがれゆく、今の世の人の心にも、米を少し處々に見へ候位といふを聞きては、猶、うらはづかしさを禁ずる能はざるべし。

然ばかり、わが子の教育に心を碎きし人の、夫に仕へて、家政を理めて、いさゝかだにも、心ゆかぬふしあるべしとは思はざれど、斯の心づくしを聞きて、今更に、懲さおもはるゝよ。

其の家庭の、いかに美しかりしかば、その頃、雇ひおかれし下女についての談、ひとつにても知られぬべし。下女その名を、とねといへりとぞ。

いつしかに、この賢母の徳に化せられ、日夜、忠實しく働き仕へけり。

都尾子は、これを、いみじう嬉しとは思ひたれど、さすがに、わが家に居らずば、食事にさへ事かくばかりの憂目も見までをと、いとほしく、はやく、いづこへありとも奉公替してはと、度々、いひさとされしが、聞入れざりき。あまり屢にありければ、とねは、斯かることは、言はでものことゝ、今までは申さゞりしが、然ほどあはれがらせたまふに、つゝまむも、をこあるべし。斯のうれしき御方に仕へずして、よしや、甘きもの食ひたりとて、何の味か候ふべき。とねは、食物の味は、ともかくも、心におき候はず、たゞ、この御心に、憂き事も覺え候はず。されば、いつまでも、斯くてこそと涙ながらにいひて、永く仕はれきといふ。

この住ひし佐敷の地は、きはめて邊僻にして、質朴の風はありけめど、怠惰疎暴に流るゝもの多かりしが、いつしか、温順柔和に、而かも、業に精勵するもの多くなりしより、こも、この人の徳にてと、今にいたりても、猶、都尾子の高風を仰がぬはなしといふ。

かゝる善行の、遂に世に埋れはつべき。おのづから、藩主の聰に達し、天保八年七月廿四日、殿中に召出され、扶持米を賜はることゝなり、かつ、熊本にかへり上るべき由をさへゆるされぬ。年ごろのねがいかなひて、いかばかりうれしかりけむ。その夫君につくされしくさ〴〵、その愛孫をはごくまれしいろ〳〵、後日、その詳細を記さむ。今は、たゞ、まごゝろを盡し、徳を高うして、おのづから、年頃の希望を成就せられしことを記して、しばらく、筆を擱かむ。

（をはり）



仕付方

赤堀又次郎寄贈

廿三

御衣など、かまへて〳〵、さりぬべき人がらにて、わたらせおはしまし候はむにつけて、いろあひはなやかに、めづらしきさまにおもはしてきようにめされ候へ。見ぐるしくわかふかうなどは、あるまじく候。人などにかたさるにつけ、または、わたなる晝のおましの折ふしなどにも、ふと〳〵、人の見まゐらせ候ふわざにて候。いかにも〳〵、はつれことに御心をそへられ候ふにや。しぜんに

見苦しからぬなどは、あなかま、人に見せじと、御憚り候ふべし。又、人に給び候はんを、こゝろことに、御したて候うて給び候へ。御にはひふかう、たきしめられ候ふべし。あやまりても、ふるき御衣など、人にたび、ゆきゝのみちのたより、おひかせなど返し、はづかしきものにて候。御心得候ふべし。又、いやみくるしう、いへゐなどにて、物せさせ給ふとも、見苦しきものなど、さいさいにときけり、いかに／＼、うたてあるものなれども、あかふかゝらず、そゝきてはりたてゝ、をとこのいで入にも、見苦しからず着せられ候ふべし。をとこのいでたちにて、女房のこゝろばせを沙汰するものにて候。うちあはすことたらぬにつけて、さはやかに、いさぎよき。むしろたゝみやふれのきのひわたくづれおちかとも、女房の心ひとつにて、ちりをもすゑずはきのごひ、かたはしより、とりつくろひてぞ、さて、まづしきをとこをも、かつははぢしめ候ふべきか。

婚禮色直し式（承前）

有住常子

三ッ目の皆子餅の樣は、右にて調へなせばよろし。夫につきて、少し、其の仕立方の内にて、簡易にして、通常覺えおくべき物を、爰に掲げて、此の式のとぢめを結びおかんとす。

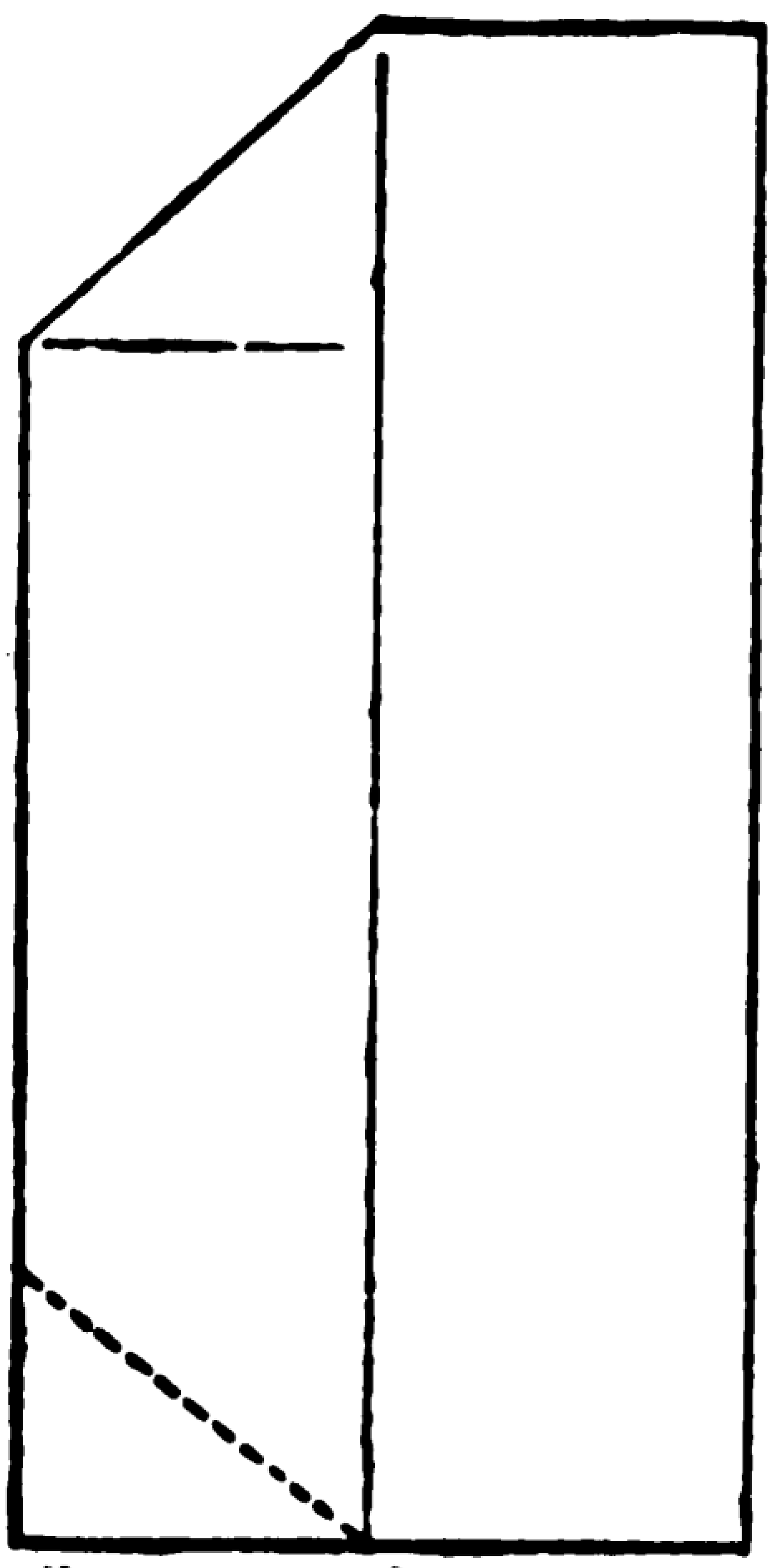
皆子餅に添ふる大豆粉包拵へやう

大豆粉は、まめのこ包といふ。又、女詞にきなこ包ともいへり。世俗には、きなこ包を以て通用したれば、それにてもよし。正しくは、豆の粉包といふべし。

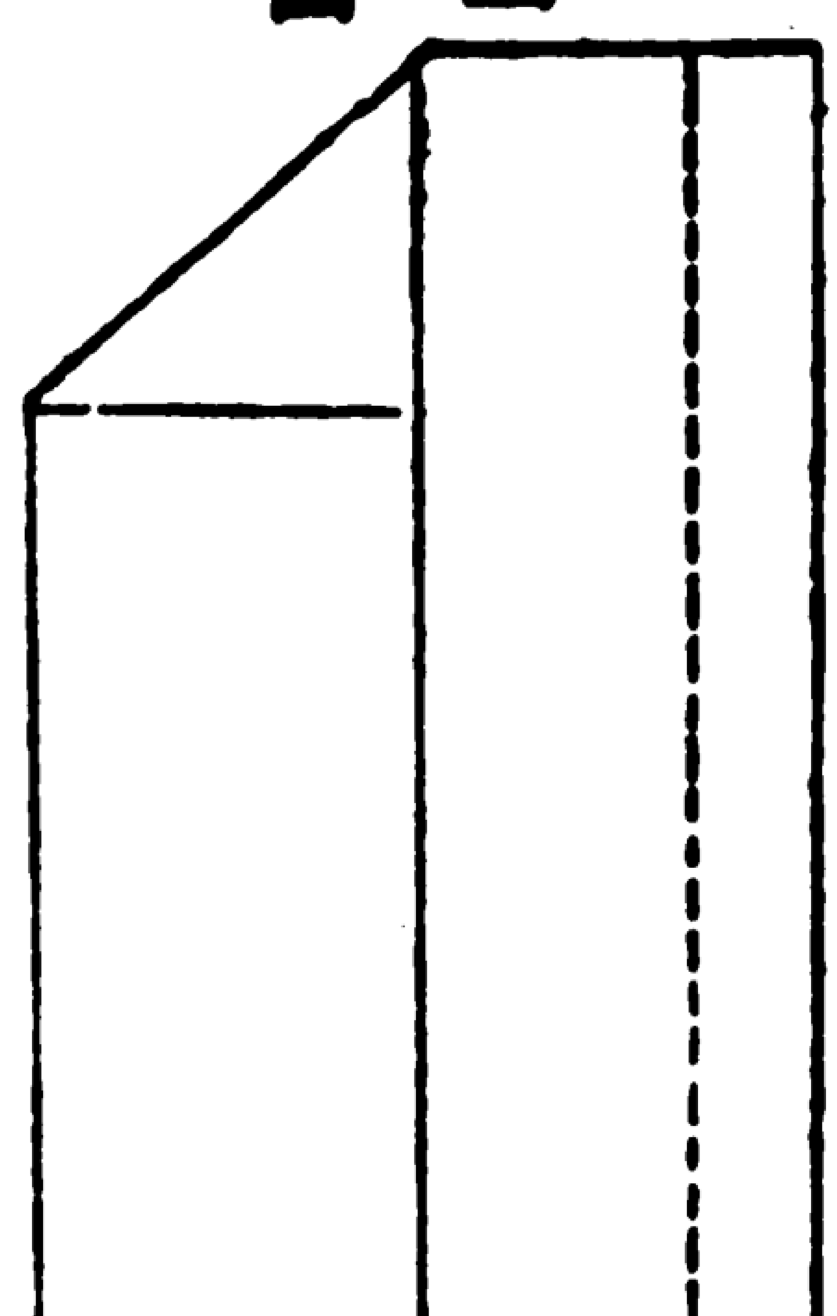
紙を、折方の紙取方に取りて、竪に、三分の一

に折りて、其の一分を、左より右の方へと折重ね、又、其の折重ねたる端の上下を、三角に折りて、圖の如くなし、次に、右の方なるを、左へと折りて、三分の一を三ッの割にて、第二圖の如くあし、又、其の折たるを、右の方へと折る事、何れも圖の如くすべし。

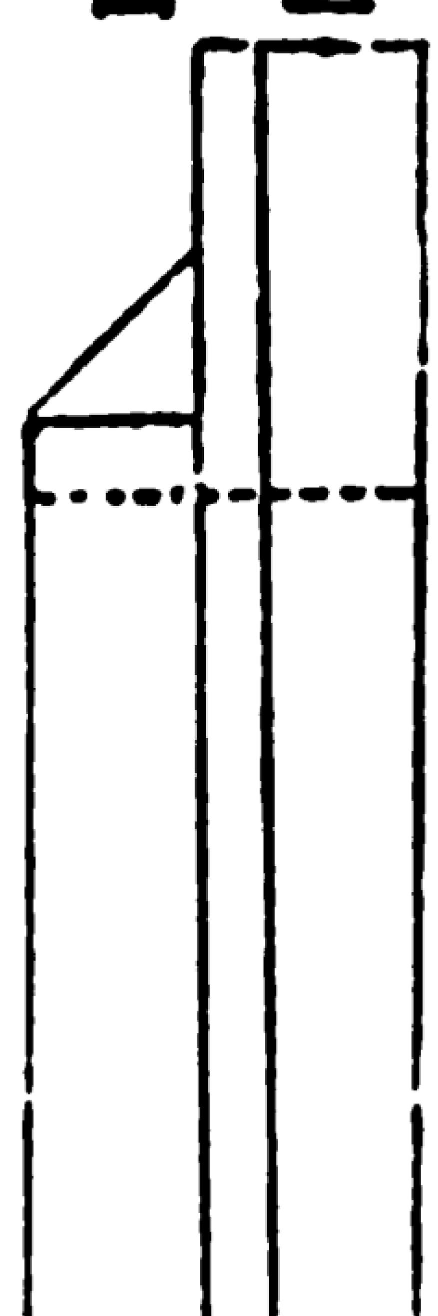
圖一



圖二



圖三



右の如くして、水引をかくるあり。紙は、何れも、二重あり。水引は、結切にして、老の波をあげおくべし。

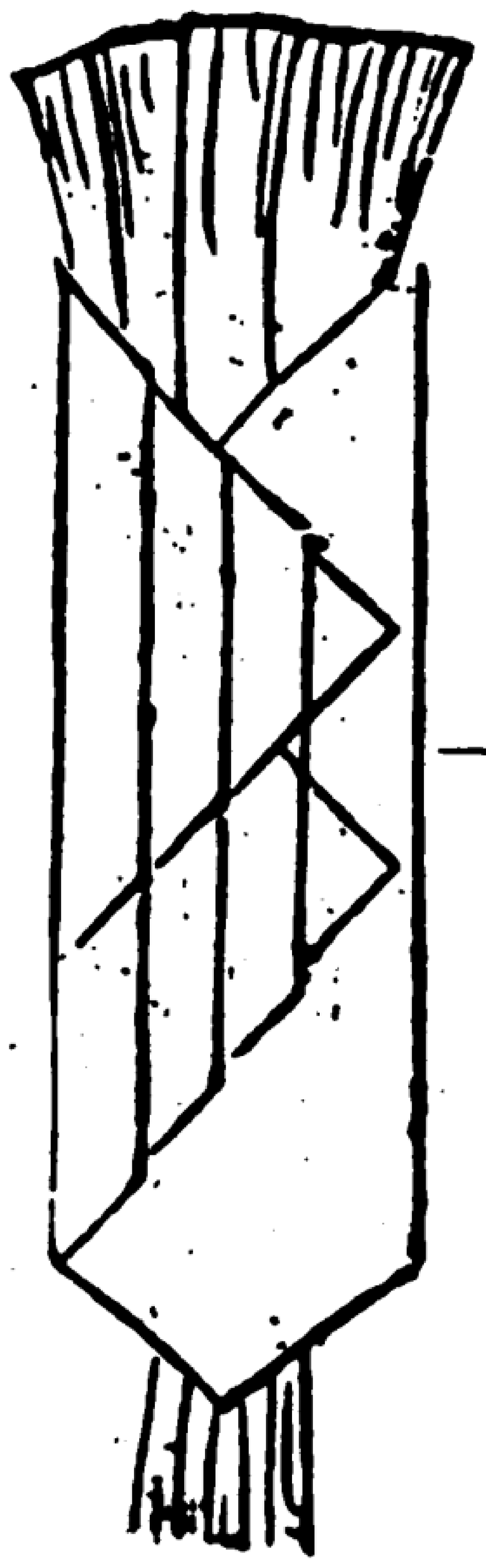


老の波あげたる圖

但、豆の粉は、下包をなして包むべし。

熨斗蚫包のこしらへやう

これは、別に、折形の部にもいひたれば、こゝに畧して、其の一圖を示しおきつ。



此所へ水引かくる事きなこ包に同じ

上巻結び

石井泰次郎

(五) 鏡の裏の緒

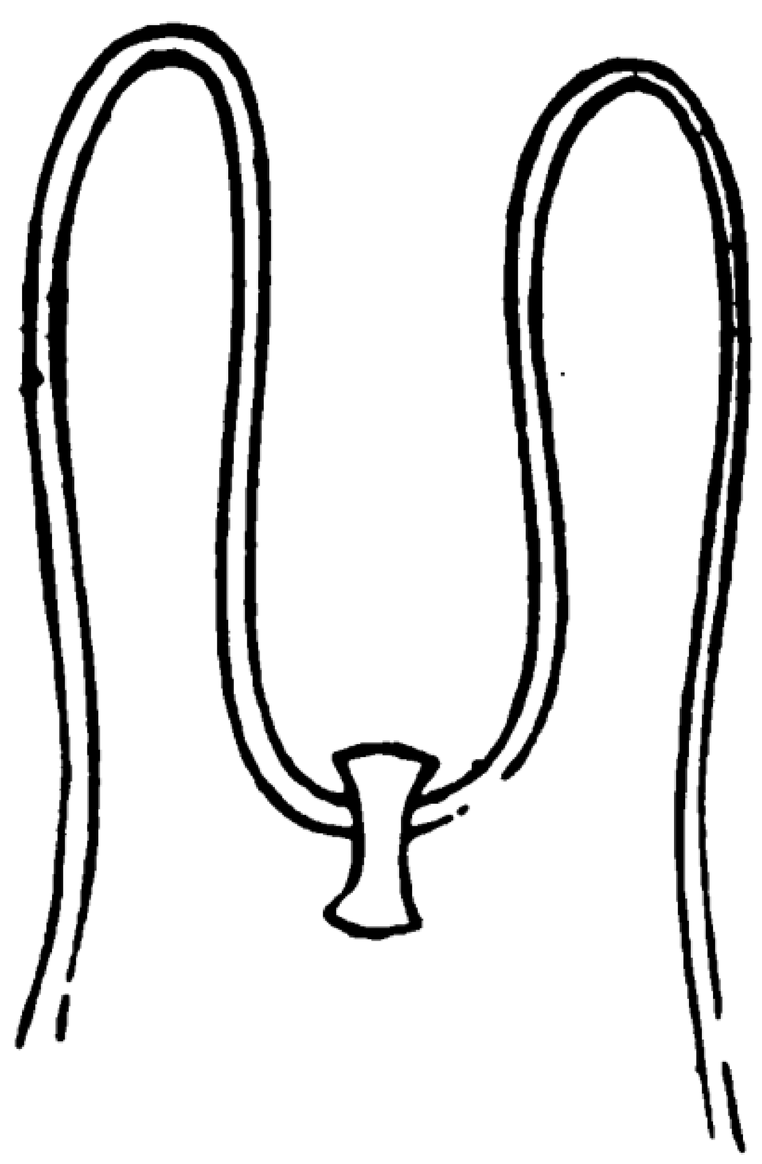
是は、類聚雑要鈔、庇の具の内なる鏡臺に用ゐる鏡の体に見えたる圖なり。此に、是を取出たるは、懸物圖鏡の内、又、雑要鈔の一本等に、上の緒の二重あるを、一ッに書なしたる誤を正さんが爲なり。

結様は、鏡の裏の金物に、緒を通して、左右同位にして、上の方へ輪形をつくりて、紐先を下にのばし、左の方の紐先を、金物に通したる紐を二本すくひて、右紐の上に出し、又、左にかへして、左の端の紐に上よりかけて、一ッくゝらせ、紐先を下へのばすべし。次に、右の紐先を、今くゝらせて、輪になれる中へと入れて、

三本ある紐の下へと右に出して、同じ紐の元の方へ、一ッ上より掛てくゝらせ、紐先を前の方へとのばし、其の掛たる所を持て、右の方へと打返して、扨、左右の紐の間々へ、左右の手の一二の指を共に入れて、眞中の輪形の端々を引てしむるなり。

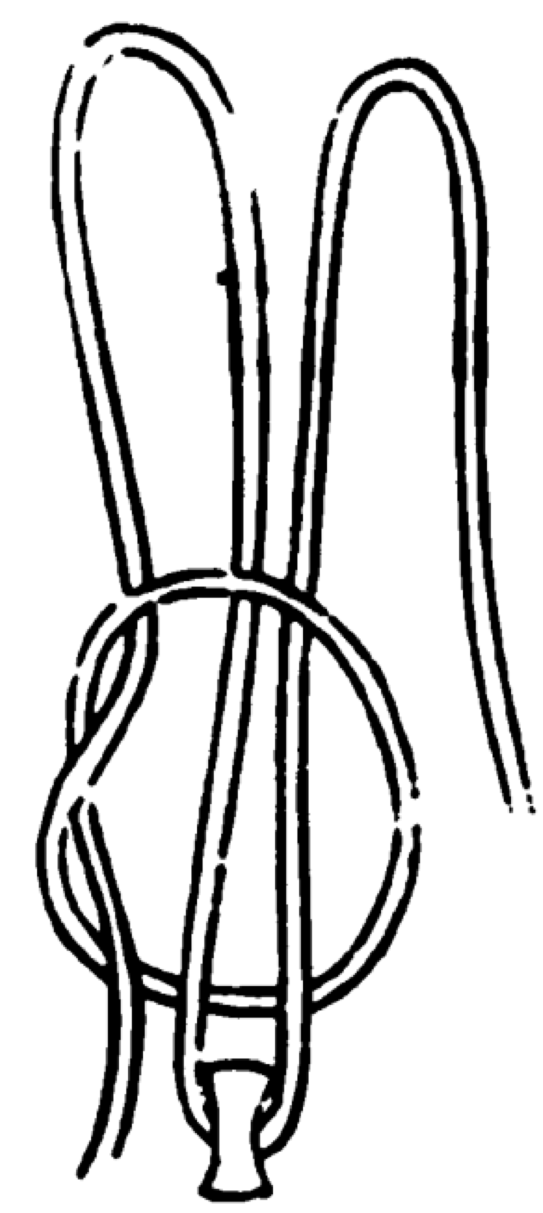
鏡の裏の緒

第一圖

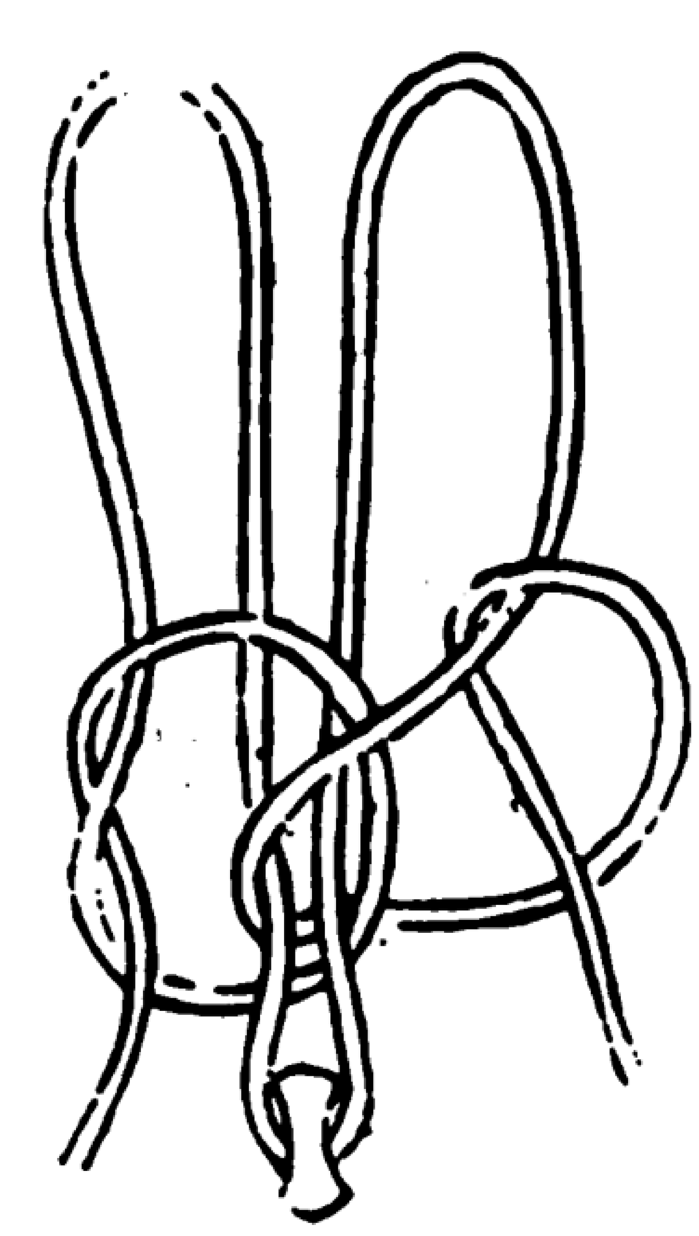


カヾミノウラノカナモノ

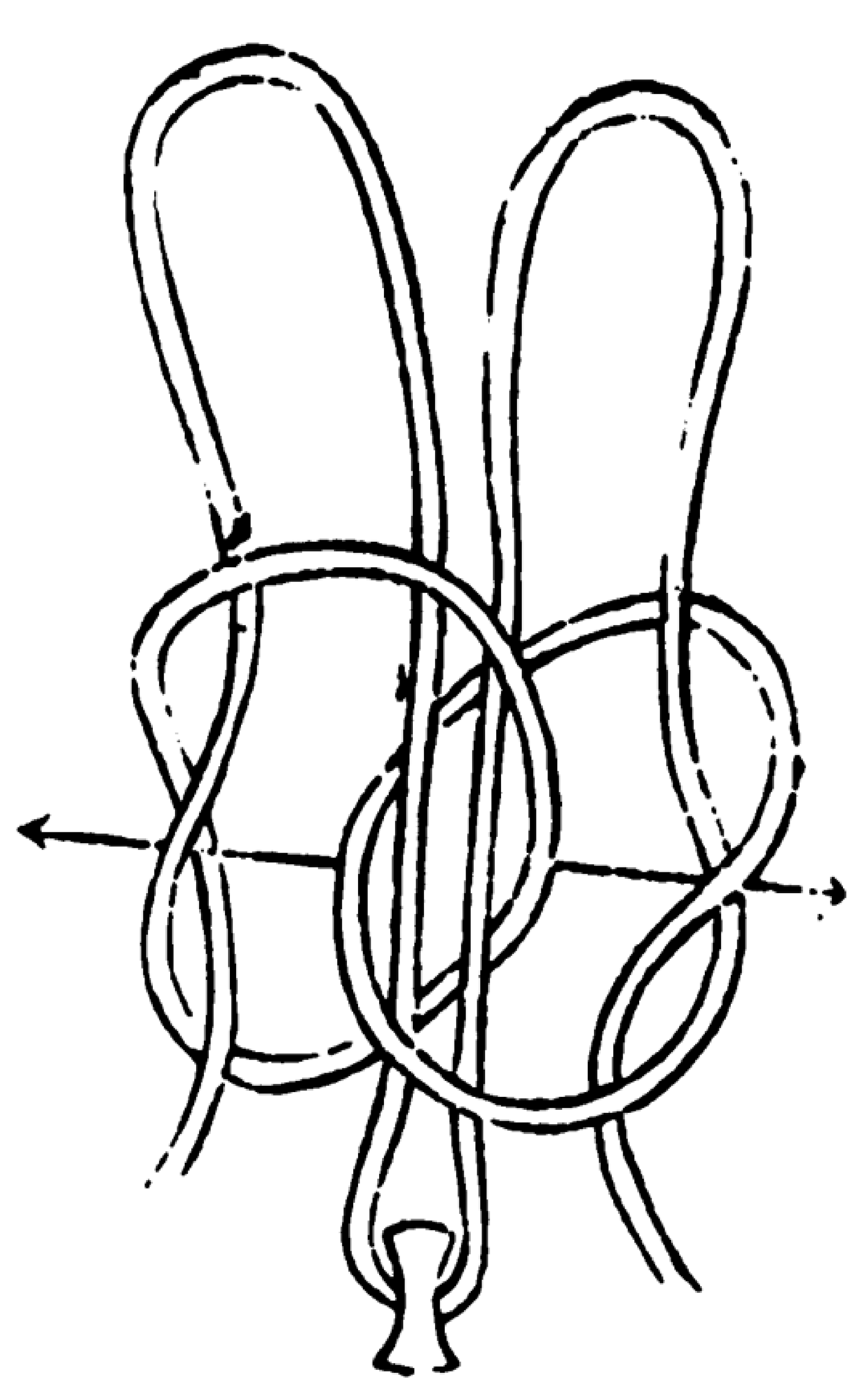
第二圖



第三圖



第四圖



だいどころ

絲瓜料理

絲瓜の、二三寸より四五寸位の、ものを、能く洗ひ、輪切になし、青串にさし、胡麻の油を塗り、烈火にて焼き、山椒味噌、又、唐がらし味噌抔つけ、ざつと炙りて、用ゐるべし。

又、絲瓜を、四五分程にきり、鍋に胡麻油をいれ、絲瓜をいりつけ、味噌、砂糖をいれ、能程に煮て、用ゐるも宜し。

又、絲瓜を、湯煮し、薄葛をかけ、上に、山葵、生姜抔のすりたるものをおくもよし。

又絲瓜をわぎりにして胡麻油にてあげ、大根おろし、醤油にて、食するもよきものなり。

又絲瓜を、輪ぎりになし、串にさし、胡麻油を塗り、白焼にして、椀に盛り、上より、胡麻味噌、山椒味噌などかくるもよし。

薄板午房

ふとき、午房の、皮をこそげ、五六寸にきり、ざつとゆで、竹のへらを、皮と肉との間にとほし、湯につけ、暫く置て、下の方より、しんをおせば、逆さまに、真はぬけるなり。此皮を、醤油、味淋にて煮込、何魚にても、摺身になし、其の中につめ、胡麻油にて揚げ小口きりにして、出すべし。

隠元の鶏卵あへ

隠元の、ほそきやわらかきものをえらび、湯煮し置き鶏卵をゆでゝ、黄身ばかり、裏漉にて漉し、食塩味淋にて、能程に塩梅し、前に、ゆで置たる隠元をいれて、あへるなり。

あか貝の海膽あへ

あか貝の腸を去り、薄く能程につくり、能く洗ひ、

水氣を去り、海膽にてあへるなり。うにかたければ、酒にてのべるよし。



國文學講義

紫式部日記講義（十六）

井上頼文

十日の、まだ、ほの〴〵とするに、御しつらひかはる。

白き御帳に、うつらせたまふ。

殿よりはじめ奉りて、きんだち、四位、五位ども、たちさわぎて、御帳の、かたびらかけ、御ましども、もてちがふほど、いと、さわがし。

日ひとひ、いと、こゝろもとなげに、おきふしくらさせ給ひつ。

御ものゝけども、かりうつし、かぎりなく、さわぎのゝしる。

月ごろ、そこらさふらひつる、とのゝうちのそうをば、さらにもいはず、山々、寺々をたづねて、げんざといふかぎりは、のこりなくまゐりつどひ、三世の佛も、いかにか聞きたまふらんと、思ひやらる。

おんやうしとて、世にあるかぎりめしあつめて、やほよろづの神も、みゝふりたてぬはあらじと、見えきこゆ。

みずきやうのつかひ、さわぎくらし、その夜もあけぬ。

釋義

○ほの〴〵　薄明るきをいふ

○御しつらひ　一本、御しつらいに作る、今、諸本によりて改む。しつらいは、室禮なりと解きたる説もあれど、常ならぬ由、清水氏の釋にいはれたるが如し。されど、釋には、室禮と、壺井氏の傍註にわきゞけせるを、ひがことなり、と、いはれたるのみにて、その理由を辨せざれど、今、初學の、ひめたちのために、澤田氏の家屋雜考をひきて、室禮とせる説のあたらぬ理由を證明すべし。こと、ながけれど、日記、冊子など讀むにつきては、必用のことなれば、心をとめて、よく讀みたまへや。

家屋雜考に

補理

中古以來、もろ〳〵の記錄、草子どもに、諸家大禮など行はるゝ度々、必ず、補理といふ事あり。たとへば、寢殿の母屋に、一間をしつらふ。又は、廣廂の東に、二間をしつらふなどいふは、柱と、柱との間をかたどり、東向にも、西向にも座をまうけ、うしろをば、屏風をめぐらして、是を圍ひ、前へ翠簾をたるゝなり。其座をまうくるとは、いはゆる、上疊を、一枚も二枚もしき、女性なれば、几帳などをも設けおくなり。枕草子、泊瀬詣の事しるせるところに、日のくるゝにまうづるは、こもる人なめり。小法師ばらの、もたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退し、疊などはうとたておくとみれば、たゞ局いできて、狗ふせぎ、ますだれを、さら〳〵とかくるさまなどぞ、いみじくしつけたるは、やすげなり。」など見え、こは、女性の堂中に通夜せむとするゆゑ、小法師ばらの、頓に、其補理するさまをかけるなり。類聚雜要抄等に、補理の圖、さま〴〵見えたり。さて、

又、室町頃の代となりて、御所、及諸大名建にて、大禮等行はるゝ時は、主殿、會所等の内を、幾仕切にも仕切分て、其仕切の内、三坪あれば、三間の御座、四坪あれば、四間の御座敷などいひて、人數の多少を見計らひ、廣くも、狹くも、仕切わけて、補理する事故、兼て補理奉行といふ役義を命じおき、座毎の補理を司らしめられしなり。當時の文書に、失禮奉行とも書きたる事どもあるは、補理の二字をこゝろえ誤れる僻事なり。さて、また、其頃の補理は、中古以來、堂上家の補理と、聊づゝ異同あり。三好亭御成之記に、屏風は、必ず、松竹の金屏立つ云々と見ゆれど、そのかみは、かならず、しかありしとは見えず。又云ふ。屏風の下にかさなるやうに立つるなりなどみえ、是等は、客人大勢にて、幾仕切にも仕切る時のさまなり。

後世諸大名の家々、書院造といふものになりても、舞樂、申樂など、興行する時は、必ず、此形の補理なし。されど、敷詰の疊ある事ゆゑ、高位貴人を請待する折にあらざれば、上疊を設けず、又、翠簾を略せしが、今の世までの習俗とはなれるものなり。

と、あるは、うごくまじき説なりかし。

○白き御帳　白き帳臺なり。帳臺は、貴人の坐臥する爲の具なり。御産の時は、御産所の装飾より、奉仕の女房などまで、みな、白装束に改むるなり。

河海抄に

御産當日、上下着ニ白装束一、九代改ニ白装束一、復ニ尋常一也

九條右丞相記に

女房等、各着ニ白裳唐衣一（冷泉院降誕）

と、見え、なほ中宮御部類記など、おなじさまなり。

○きんだち　君等にて、此處は、道長公の御子息などをさせり。

○御帳のかたびら　御帳臺の、まはりに掛くる布帛なり。

○もてちがふほど　御帳臺の帷も、御茵も、いづれも、白きものと、取り替へんと、持ち步き居る程の意なり。

○いと、こゝろもとなげに　甚、不安心に、氣遣しさうなる、御樣子にての意なり。待遠しくおぼゆるを、こゝろもとなし、といへるとは、用法、いさゝか別なり。

○御ものゝけ　ものゝけは、物怪、または、物氣など書きて、恨ある人の、死靈、生靈などいふものゝ類なり。中古の迷信どして、病氣の時、または、御產の時などには、身體の弱りたる處へとり着きて、さま〴〵に惱まし、つひには、とり殺しなどするものと、信じたる故に、專ら此の、物怪の驅除法に力をつくしたり。作り物語なれど、源氏物語、葵の卷に

大殿（葵の上なり）には、御ものゝけ（物怪）めきて、いたくわづらひたまへば、たれも〳〵（左大臣、大宮など）おぼしなげくに、（中略）ことに（源氏の）思ひきこえたまへる人の、めづらしきこと（懷姙なり）さへそひたまへる、御なやみなれば、こゝろくるしう（源氏の）おぼしなげきて、みずほう（御修法）やなにやなど、我御かた（源氏の）にて、おほく（御祈禱）おこなはせたまふ。ものゝけ（物怪）いきすだま（窮鬼）など、いふもの、おほくいできて、さまざまの名のりする中に、人にも、さらにうつら

ず（みやす所の生靈が、よりましの人にもうつらぬなり）身づからの御身（葵の上の御身なり）に、つとそひたるさまにて、ことに、おどろ〳〵しう、わづらはしうきこゆることもなけれど、（しうねく）また、かた時はなるゝをりもなきもののひとつなり。いみじき、げんざ（修驗者）どもにもしたがはず、しうねき氣色、おぼろげ（おほかた）の物にあらずと見えたり。大將（源氏）の君の、御かよひどころ、こゝかしこと、おぼしなつるに、この（六條）みやす所、二條の君などばかりこそは、おしなべてのさまには（源氏の大切に）おぼしたらざめれば、恨のこゝろ（嫉妬心あり）も、ふかゝらめと、さゝめきて、物など、とはせたまへど、さして、きこえあつることもなし。もの〻けとても（よりましにつきたる物の怪とてもなり）わざと（さして）ふか

き（葵の上の）御かたきときこゆるもなし。（よりましにつきたる）すぎにける、御めのとだつ人（葵の上の乳母の死たりし靈）もしは、おや左大臣殿）の、御方につけつゝ（恨みをつみて）つたはりたるものゝ、（葵の上の御産にてなやみ給ふ）よわめにいできたるなど、むね〳〵し（しかとせぬなり）からず、みだれあらはる〻、（葵の上は）たゞ、つく〴〵と、ねをのみなきたまひて、をり〳〵は、むねをせきあげつゝ、いみじう、たへがたげに、まどふわざをしたまへば、（御命も）いかに（あやうく）おはすべきにかと、（左大臣、大宮など）ゆゝしう、かなしうおぼしたり（中略）まだ、さるべきほど（御産の事なり）にもあらずと、みな人も、たゆみ（油斷なり）たまへるに、俄に（御産の）御けしきありて、なやみたまへば、いとゞしき、御いのり（御

修法なり）のかずをつくしてせさせ給へれど、例の、しうねき御ものけひとつ、さらにうでかず、やんごとなきげんざも、めづらか（不思議の意）なりと、もてなやむ（もちあつかうなり）さすがに、いみじう、てうせられて（葵の上の身體につきたる生靈が）心ぐるしげになきわびて、すこしゆるべ給へや（源氏の）大將にきこゆべきことありと、のたまふ（下略）

など、あるにて、當時の狀態をさとるべし。

○かりうつし　病人、產婦などの代りに、よりましとて、その人々を定め、その人々に、生靈、死靈、窮鬼などの、寄り憑く樣にするなり。かりうつしゝとは、即ち、その怨恨ある靈どものありたけを駈て、本人より、よりましの人々に、移し憑しむる事なり。

○そこら　許多にて、數おほきことをいふ。

○げんざ　驗者なり。祈りて、效驗ある僧や、または、修驗者、山伏の類をいへり。

○おんやうし　陰陽師は、吉凶を卜ひ、地相を見たて、惡鬼の類を祓ひて、吉をもとむることなどを司どる者。

○やほよろづの神　八百萬の神と、數を定めていへるにはあらず、たゞ、多くの神々といふ意なり。

○みゝふりたてぬはあらじと　延喜式、六月晦日の大祓の詞に、

高天原ニ耳振立聞物ト、馬牽立テ云々、大祓ニ、祓給ヒ、清給事ヲ云々

と、あるを取りて書けるなり。即ち、八百萬神たちも、今、陰陽師が祈誓する事を、馬の耳を振立てゝ、物を聞くがごとく、聞き入れたまはぬ事はあらじ、との意なり。

○見えきこえ　見えは、祈禱の狀のあり。聞えは、その聲のあり。

釋　解

あくる、十日の朝、いまだ、全くは、あかるくあらぬ程に、中宮の御居間の裝飾は、みな、ことごとく、白きものとかはる。

中宮は、すなはち、白木の御帳臺の中に遷らせ給ふ。

殿（道長公）より始め奉りて、殿の御子息たち、四位、五位の侍臣ども、一度に、騒ぎ立ちて、御帳臺の帷を、白き色のに掛けかへ、御茵など、いづれも、白きものと取り替へんとて、いまゝで用ゐたるつねの品を持ち去る人と、しんきに、白き品を持ちきたる人と行きちがふ程、甚いそがはし、十日の、日は、一日、中宮の御產の、甚、氣づかはしく、起きたり、寢たりして暮させ給へり。

御物氣の、死靈、生靈など、うらみある靈どもを、ありたけかりたてゝ、よりましの人々に移し、限なく騒ぎのゝしる。

この月ごろ、數人伺候せる土御門殿に出入の僧は、いふまでもなく、諸々の寺々を尋ねて、法力ある驗者といふ驗者のありたけは、殘りなく參集し、一生懸命にありて祈り居るを、過去、現在、未來三世の佛も、如何に聞き入れ給ふらん、と、推し測らる。

陰陽師といひて、世間にありとあるかぎりは、悉く御殿に召し集めて、祈禱せしめらるゝにより、八百萬の神たちも、此の陰陽師どもが祈禱する狀を、馬の耳を振りたてゝ、物を聞くが如く、聞き入れ給はぬ事はあらじと、その、やうすの見えもし、また、聞えもす

また、諸所の寺々へ祈願のため、御誦經せしめん

とて、御誦經の使たちて、一日騷ぎ暮らしたれど、
つひに、その十日の夜も、御子生れ給はずして、
いつか明けはなれぬ。

漢文學講義

佐々木天游

記浪華節婦事　　頼山陽

浪華有二夫婦與居者一。夫罹二惡疾一。而妻事レ之甚謹。夫勸二其他適一。未レ肯也。一日覩レ於二屋後一。其壁腰蔽以二杉皮一。皮裡有二一蝘蜓一。貫レ於レ釘。猶蠢々然。怪レ之數就驗視。其雌往來哺レ之。故久而不レ死也。妻爲悽然。以告レ夫曰。蟲豸且護二其儷一。況人乎。良人未レ死。妾將何之。夫猶不二自安一。因計二速死一。聞二河豚殺レ人。買而食レ之。敗血數升。而其疾立愈。終身爲二夫妻一。

外史氏曰。是豈非レ天乎。妻之節。激レ於レ蟲而全。夫之疾。激レ於レ魚而愈。夫妻皆善人也。天與二善人一。猶信。

浪華に、夫婦與に居るものあり。夫惡疾に罹る。而して妻之に事ふる、甚だ謹しむ。夫其の他に適くを勸む。未だ肯ぜざるなり。一日屋後に覩る其の壁腰蔽ふに杉皮を以てす。皮裡に一蝘蜓あり。釘に貫かる。猶蠢々然たり。之を怪み、數々、就て驗視すれば、其の雌往來之に哺す。故に久うして、而して死せざるなり。妻爲に悽然たり。以て夫に告て曰く、蟲豸すら、且つ、其の儷を護す。況や人をや良人未だ死せず。妾將何くにか之んと。夫猶自ら安んぜず。因て速かに死せんことを計る。河豚の人を殺すを聞き。買うて而して之を食ふ。敗血數升。而して其の疾立ころに愈ゆ。終身夫妻となる。

外史氏曰く、是豈天に非ずや。妻の節、蟲に激

して而全く。夫の疾、魚に激して而愈ゆ。夫妻皆善人なり。天善人に與する。猶信なり。

浪華節婦の事を記す。記事は、矢張、文體諸式中の一式で、讀書作文譜に、紀事者記志之別名、而野史之流也とありまして、記又は志と、同じ文體であります。世の文人學士が、各其の見聞する所の者を。隨意に記錄致しましたものを名けて、記事と申たものであります。節は操也。ミサヲを貞うして、善く婦道を夫に盡すものを、節婦と申します。此の節婦は、浪華(大坂のこと)の人であります。其の人の貞節なことを記錄したものでありますから、記二浪華節婦事一で、是は、賴山陽先生の文であります。

偖浪華の大坂に、夫婦與に居りて、一所に棲止を致して居るものがありましたが、其の夫の方が、惡疾にかゝりて、癩病をわづらつて居ました。癩病と申ますと、最もイヤな病氣でありますから、大概な者は、夫婦の中でも、ツイ心得違をして、夫を麁末に取扱ふたり、又は、離別をしたりするものでありますが、今此の婦はサウデなくして夫が最も嫌ふべき惡疾あるにも拘らずして、サウシテ、夫に事へかしづくことが、甚だ謹んで、心から大切に、夫に事へて、貞節を盡し、またソコデ、夫も自分が惡疾あるにも關らず、親切を盡してくれるものでありますから、却りて、氣毒と思ふたものと見えまして、其の婦に自分と離別して他の別な人に適き嫁ぎて、自分には構はず、更に他人を擇らんで身の方付を定めんことを勸めまして是非に、他人に縁付てくれと申しますけれども未マダ肯んじウケガフて、夫の申しますことをハイと承知を致しませんのヂヤ。一日、或日のこと、其の婦が、自分の住でをります所の、家の後

の方をながめて居りました所が、壁の腰で、壁の下方を蔽ひカブスルに、杉の皮を以てして、即ち、杉の木の皮を以て。壁の下の方をカブセテありましたが、其の杉皮の裡に、一疋の守宮がありまして、(蝘蜓、古今注に、蝘蜓一名龍子一曰二守宮一となり。ヤモリのことなり。)釘に打貫ぬかれて居ながら、死もせずして、逡々然として動ひて居ります。(逡々は、蟲の動く貌なり。)ソコデ、釘に打付られて居れば、食物を喰ふことが出來ぬから死なねばならぬ筈であるのに、猶ヤッパリ、活きて動いて居るのは、合點がゆかぬと、之を怪み、不審に思ひまして、ドウシテ活て居るかしらんと、度度、守宮が打付られて居る所の場所に、就き行きまして、ドウシテ食物を喰るかしらんと、驗視シルシタメシテみました所が、釘付にされて居りました守宮は、雄の方でありまして、其の片々の雌の方の守宮が、餌を求食て、往たり來たり致しまして、釘付になりて居ます雄の守宮に、哺しタベサシテをりますので、故にサウイフワケアイデありますから 久しく永い間、釘付になりた儘で、死なんで居りますのヂヤ。(茲所の也字は、決語なり。)夫婦の情愛と申すものは、守宮の様なものに至る迄、こんなものであります。ソコデ、婦が餌を運んで、釘付の雄に、哺さしてをります守宮を見ましたが爲めに、悽然と悲しみ傷みまして、(悽然は、悲傷の貌なり。)其の事柄を以て、自分の夫に告げ語りて申しまするには、蟲豸のむしけらでさへ、(爾雅に、有レ足謂二之蟲一無レ足謂二之豸一とありまして、豸は、足を持ぬ蟲のことであります。)猶且其の自分の並び連添ふ所のものを、(儷は並なり。ナラブこと。夫婦のことを伉儷と云ふ伉儷も矢張、偶ぶことなり。)保護しまもりて、雄の守宮

が釘付におり居るから、雌が保護して、死なぬ樣に餌を運んで養ひ守りて居る蟲ですら、其の通りであるものを、況ヤマシテ、人間に於てをや。萬物の靈長たる人間に於ては、亦、格別の事デアラウゾ。良人あなたが、（儀禮の註に、婦人稱ㇾ夫曰ㇾ良とありまして、良人は、をつとゝ云ふことなり。）未だ死せずして、御存命でわらせらるゝのに良人を振棄て、妾私が、將マタ、何くにか、何處にか之きマセウに。守宮ですら、釘付の雄を棄ずして、養ひ護りて居ますものを。私が良人を振棄て、何處に行きマシヤウに。決して、氣に掛て御心配などなされるには、及びませぬと申しました。中々、貞節な婦であります。左樣に婦が申しましたけれども、夫も正直な善き人とみえまして猶矢張、自分から、心の中に。安からず思ひまして、婦の身上を、氣の毒と思ひまして、自分が、

一層、早く死んでシマッタならば、婦にも氣の毒な思をさせぬで濟と考へましたに因りて、速に早く死んでシマヰウト計り考へました。サウシテ、河豚と云ふ魚には、大變な毒がありて、人が喰ますと、毒に中りて死ぬと云ふことを聞きまして、河豚を食うて、毒に中られて死ふと思ひまして、買うてサウシテ河豚を喰べました所が、忽ち、毒に中りまして、敗血敗腐したるシツレヂを、二斗も三斗も吐きました。サウシテ不思議にも、其の癩病が、立どころにデキに愈へヨツナリまして、死ふと思うて。喰ました河豚が、却て、藥りになりまして、惡むべき病が、全快致しまして、一生涯夫婦とありまして、睦まじく暮しました。誠に不思議な幸福であります。茲所迄が、節婦に就ての紀事でありまして、外史氏曰以下は、作者の論であります。

借、外史氏曰で、(外は、内に對するの辭なり。史官の紀す內史に對して、外史氏と謂ふ。野史氏など、云ふも、亦同じ義と心得べし、)外史氏賴山陽が論じて申しまするのに、是の節婦夫妻のなしましたる事柄と云ふものは。豈にナニシニ、天道と謂ふものに非ざるデアラウカ。夫は、河豚の毒魚を喰うて却りて癩病が愈え、妻は、餌を運ぶ守宮をみて。其の節を全うして、終身夫妻となつたのは、天道と謂ふものデアラウゾ。妻の節操は、守宮の蟲に感激して、蟲けらすらも、其の雄を保護することを知るものを。況て、人に於てをやと謂うて。一生善く夫に事へて、貞女の節操を全うし、又夫の惡疾は、河豚の毒魚に感激して、河豚の毒に中られて、早く死して、妻に難題を掛けまいと致して、サウシテ、却りて、病氣が平愈して生涯良人となりて、夫婦睦じく暮した。是れ皆天道善は幸ひするの、然らしむる所デアラウ。夫も妻も皆兩人 ながら、善き人であるのヂヤ。ソコデ、天より幸を受けて、夫は、癩病が平愈し妻は、貞操を全うして、一生夫妻となりたと謂ふものヂヤ。ソレヨリシテ、考へてみるときには、昔時より申傳へ來りたる通り天道と謂ふものは、善人の、惡事をなさずして心術の正しき人に與し從うて、幸福を授けると謂ふことは、(史記の伯夷傳に、天道無親。常與善人とあるに本づく。)猶矢張、信實である。浪華の節婦夫妻が、蟲に感じて操を全うし、毒魚を喰うて、病氣が平愈したと謂ふものも、畢竟夫妻共に、善人であるから、天が兩人に幸福を降したもので、然らずんは、毒魚を喰うて、却りて、病氣がよくなりたと謂ふ樣な、不思議な幸福やら、釘付にありながら、雌の守宮に保護せられて、活て居る守宮をみて、貞操

を全うしたといふ様な、不思議な事柄もあるまいシテミルト天の善人に與すると謂ふ事は、矢張ホンマなことヂョと、婉曲に筆を結んだものであります。

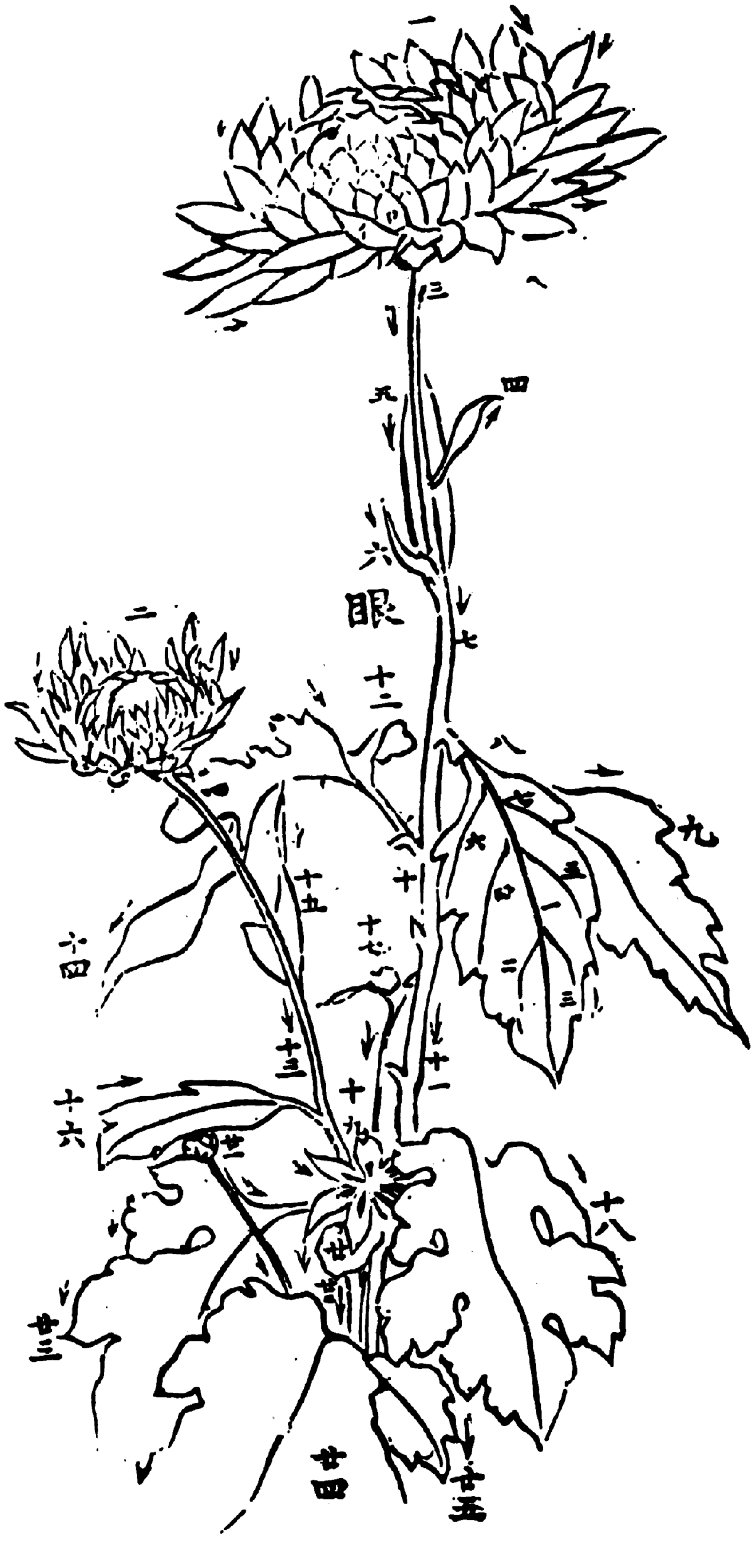
和畫通信講義（第十二回）

山崎彩峨

菊は、その種類、極めて多く、従ひて、花色花瓣も、様々なり。今こゝに寫生したるは、通常白色の菊にして、小なるは、黄菊なり。これを墨にて畫くには、淡墨にて、花瓣を畫き、花線を入れ次に、淡墨を狹墨となして、莖幹を挿き、夫より淡墨を含めし筆先へ、濃墨を附して、葉を畫き、後、黄菊を畫き入るゝなり。最も、通例の黄菊ならば、淡墨にて、直に、沒骨に畫くもよし。これは、黄菊にして、根に赭色あるものなれば、勾勒に畫きて、赭色の部分に、淡墨を入るゝか、淡墨にて沒骨に畫き乾きて後、赭色の部分へ濃墨を入るゝか、いづれかによるべきなり。

顔料にて畫かむとならば、薄き胡粉にて、沒骨に畫き、乾きて後、胡粉にて、花線を入るゝなり。最も、初より、直ちに、胡粉にて勾勒に畫き、花線を入るゝもよし、莖幹は、黄がちの青色に、岱赭を和して、畫く、若し、紅色を含めるときは、草色に浸せる筆先へ、胭脂を附して畫くなり。菊は、その葉、甚だ繁きものなれば、從ひて、葉色も、種々に別るゝなりされど、初歩の方にても、洋畫寫生の如く、光線によりて、色を施すにあらざれば、容易に、了解せらるゝなり。そは寫生のをりは、和畫にても、その實物の色に從ひて、施色するは勿論なれどその實物が、特に異なる部分

あらざれば、おのづから、意匠畫の施色法よく適するを以てなり。今參考に一班を說はむか、意匠畫の施色法といへども、その草木の種類によりて一樣ならず。たとへば、松竹枯おつる葉の如きは葉色細分せず、根梢大同小異なり。これに反して、柘榴の如きは、一定の施色法なきにあらざれども發芽の順によりて、漸次、色を別にし、一見初學者には解し難き色あるが如し、回を承ぎ、その物に依らざれば、大畧をも述ぶること難し。因りてこゝには、單に菊の葉のことのみを說ふべし。その最幼の葉は、赭黃に、藍少しばかりを和して、筆に含め、先へ臙脂を附して、畫く。次ぎは、岱赭の量、稍多き赭黃へ、藍を和したるもの、次ぎは、赭石を除きて、黃色の多量なる青、次は、靑色、次は、藍の稍多量なる青、次は、藍の多量なる青、次は、藍かもしくは、少量の墨を加へたるもの、次は、根際の地上に埋沒せる部分か、または、朽壞せる葉なれば、藍か、又は、少量の墨を和したるものを、筆に含め、先へ岱赭、或は赭墨を附して畫く。これ、普通薄彩色の順なり。ゆゑに、この心ありて見るときは、實物の葉色も容易く了解するを得べきなり。即ち、この、寫生畫に就きて說はゞ、葉端分裂せざる葉は、黃がちの青色、次の葉は、通常の青色、半沒せるものは深綠色なり。小菊は、黃色にて、沒骨に畫き、乾きて後、赭石點するか、輪廓をとりて、黃色を塗り、乾きて後、赭岱を入るゝもよし。その莖葉は、黃がちの青色にして、筆力、殊に、柔軟なるをよしとす。かくて、畫き終へたらば、例の如く花粉の部分に黃色を塗るか、または、黃色にてときたる胡粉にて、花粉を畫き、後、濃き墨か藍墨かにて、葉脈を入るゝなり。


一
二
四
六
眼
十二
八
九
十
十五
十四
十三
十一
十六
十九
十八
廿三
廿四
廿五

附言

初歩の方々は、多く通常なる菊の花瓣は、その端三角形をなすものゝ如く、記臆せらるゝならむ、然はあらで、筆意誠に婉曲せるものあり、たゞに稜形を積み重ねたらむには、そはそはしくなにの雅致あらむや。その種類によりて、花瓣の端分裂せるもの、または筒形をなすもの、糸状をなすものあり。こは一々誌上に掲げて、說き難ければ、實物に就きて究めたまふべし。猶數回を經て、復び、意匠畫の條に說くことあるべし。

磯部武者五郞氏の、家計簿記法講義は、都合により今回のみ休載せり。諸媛諒せよ。（記者）



曉月聞郭公　東久世通禧

宵のまは待せませてほとゝきす
あり明のつきにはつねなく也

禁苑新樹　高崎正風

昨日かも花にめされし御そのふは
おもかはりせりしける青葉に

海邊郭公　鍋島直大

さやかにも鳴聲すなりほとゝきす
荒いそなみのおとにまきれて

螢　津輕承昭

くるゝより草葉はなれて涼しくも
水田のうへをとふほたるかな

野梅雨　長谷信成

野川ゆく水もあふれてなつくさの
すゑのみゝゆるさみたれの比

窓前螢　宮地嚴夫

涼しくも吹くるかせにおくられて
ほたるは窓のうちにいりけり

夏鳥　北郷久政

吹風もおとせぬきしのあしはらに
こゑ涼しくもよしきりのなく

市中梅雨　小出粲

梅雨のひかすふるまにたけにけり
うれあまりたるいちの瓜なへ

瀬月　植松有經

山松の木のまをもれてたにかはの
はや瀬にやとる月のすゝしさ

夏山　坂正臣

ほとゝきすたつねていりし夏山は
蟬のなくまておりにけるかな

夏川　下田春興

聞きなれし庭のながれの音すらも
夏にあるせはさやけかりけり

山寺の子規　蜂須賀隨子

照月のたかのゝおくのやまてらに
あかつきかけて鳴ほとゝきす

深山瀧　近衛貞子

白雲のつねにをりゐるおくやまの
たきは音のみきこえけるかな

夏月　鍋島榮子

またれたる月もわすれて打むかふ
ひかり涼しきなつの夜のつき

田上螢　前田朗子

夜やふけし賤か門田にかすそひて

ひかりさひしく飛はたるかな

遠時鳥　　南郷柳子

ほとゝきすはるかになのる聲す也
今日のまとゐを聞えわくらん

朝梅雨　　柳原愛子

けさもまた朝けのけむり下はひて
はるへくみえぬさみたれの空

岡夏草　　小池道子

夏草のたかくしけりておかてゐの
みちは手かざもさゝれさり鳧

深夜蚊遣火　　松本健子

蚊遣火のうすきけむりにみしか夜の
ふけゆく空もしられぬるかな

海邊夏月　　佐藤艶子

磯山のまつのよあらしおとすみて
なつなほさむき月のかけかな

雨後夏月　　宮地小東洋子

雨はれし蓮のうき葉のつゆの上に
すゝしくやとるなつの夜の月

ほとゝぎす

小西甚之助

鵑聲高

まちわびてはしゐのまへにぬる夜半の
夢さませとかなくほとゝぎす

鵑聲幽

月影と共になく音を雲間より
かすかにもらすほとゝぎす哉

月前郭公

雲はれて月てる夜はのほとゝぎす
なきさえやらぬ聲になくらん

河邊郭公

いせきもる夕川水のさやかにも
　おとつれてなくほとゝぎす哉

深山郭公

春訪ひし深山さくらの木かくれに
　ひと聲にほふほとゝぎすかな

岡郭公

はるかなる峯をこえ來て郭公
　むかつ岡邊になくねさやけし

高山郭公

五百重山みねにぬる夜は郭公
　ふもとよりこそ聲はきこゆれ

谷郭公

光なき谷蔭なからほとゝぎす
　いまなく聲はさやけかりけり

野郭公

武藏野のはてなきわたるほとゝぎす

　ふじが根に入る月や呼ふらん

暮れはてゝ遠里小野のともし火の
　いとほのかにもなくほとゝぎす

原郭公

雨はれて郭公なく露ばらに
　もの思ひゆく袖はぬれつゝ

關郭公

啼きすてゝ過ぎんとはする時鳥
　しばしとゞめよ夜はの關もり

關路郭公

あれはてし不破の關路のほとゝぎす
　たれになのりて夜はにこゆらむ

郭公せきちこえゆく忍音を
　しのびてきかむ夜はふけぬとも

旅中郭公

夏艸をかりの旅寢の床として

岩根まくらにきくほとゝぎす

旅やかたひとり寝ざめてふるさとの
月おもひつゝきくほとゝぎす

浦郭公

千鳥なく冬にまさりて時鳥
浦邊のつきにきく夜かなしも

磯郭公

夕月夜うづきの磯にほとゝぎす
花さきぬとや波になくらむ

波上鵑

朝ひらきいづる帆影やおくるらん
波路をかけてなくほとゝぎす

泊郭公

ほとゝぎすなく夜悲しくわかすらむ
わかしの浦にとまる舟人

渡郭公

わたしまつ人と見るらんすみだ川
岸に待乳のやまほとゝぎす

橋邊郭公

加茂川の橋ゆく車おとなたてそ
夜ふけてなくときくほとゝぎす

市郭公

夏の日の夕ぐれなゐの塵つもる
市もへだてぬほとゝぎすかな

社頭郭公

神さぶる山田の原のほとゝぎす
なきてすぎ間の夜はのしづけさ

古寺郭公

ほとゝぎす老木並立ふる寺に
夜ふかくなのる聲をきくかな

閑居郭公

聲をのみ友としまつの下庵に

きくもうれしき山ほとゝぎす

森郭公

夜たゝなく生田の森のほとゝぎす
　いくたひ人の夢さますらむ

雨後郭公

むらさめの峯にはれゆく夕雲を
　送りてわたるほとゝぎすかな

鵑聲落水

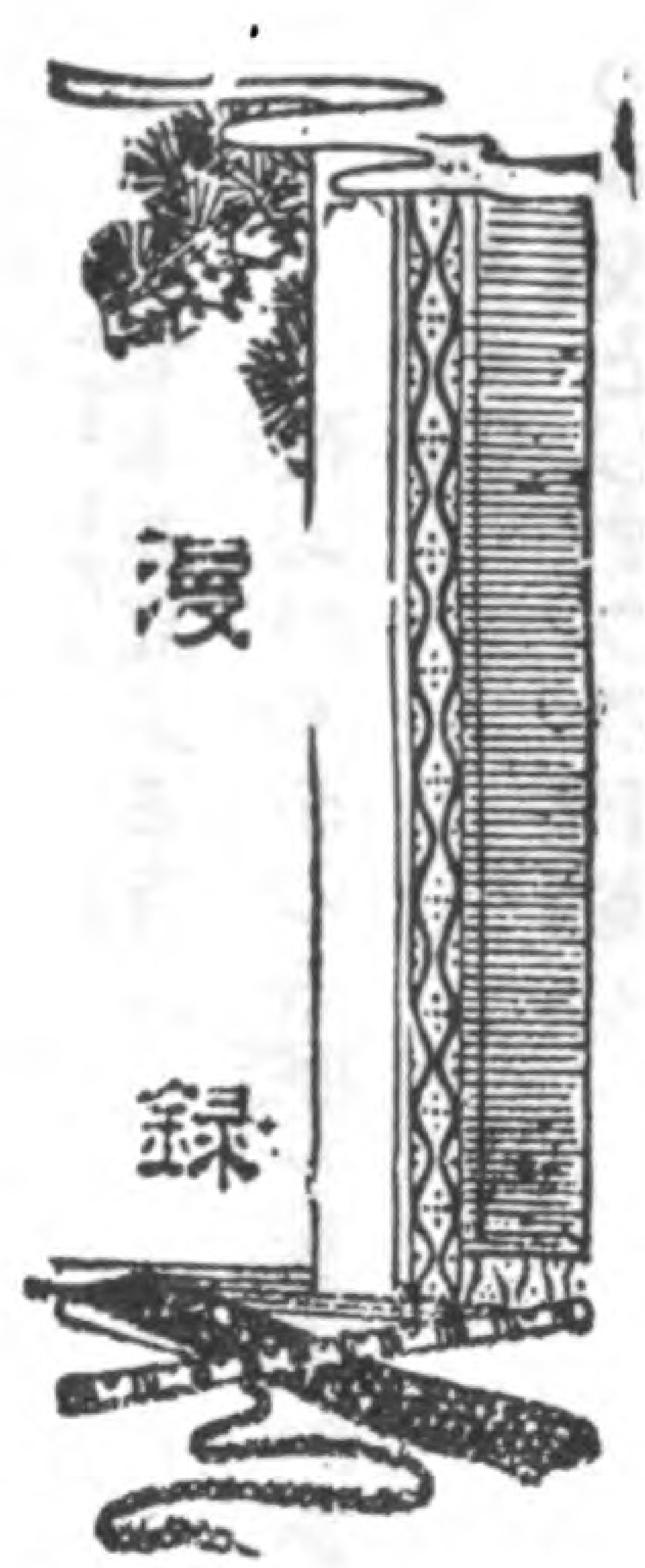
峯こえて啼くほとゝぎす浪さわく
　麓の川に聲そなかるゝ

鵑入琴聲

少女子かいまひとたびとひく琴に
　ひきかへりなくほとゝぎすかな

市中聞鵑

山遠く尋ねてし夜はなのらずて
　思はぬ市にきくほとゝぎす



女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

饗饌給はるべき様の事

一、物参るに、嫌ふ事あり。古るくより傳はりたる事にて、室町時代の御成飾りの記などにも、載せてあるなり。

汁の汁（本膳の汁を吸ひて、直に、二三の膳の汁を吸ふを云ふ。）

さいのさい（さいを食ひて、直に、外のさいを食ふを云ふ。）

膳こし（膳の向ふに居えたる物を取るとて、本膳を越して取るなり。）

箸なまり（一つ菜を、いつまでも食ひて、椀を以て、いつまでも、はてしなくなまけ、らちなかぬなり。）

もろおこし（椀と箸とを一度にとるなり。二度に取るべきなり。）めしの食ひはじめの時の事なり。もろとは諸ろ手なり。）

まどい箸（さいを食ふに、これをと思ひ定めずして、あれこれへはしをやりてまどひ、うろたへてさいを食ふ事なり。）

調伏の箸（食ひはてゝ、箸をおくに、はしをさかさにおく。）

袖摺の箸（右の方にすえならべたる菜汁を取るには箸を取直し、箸先を上へなして、菜汁を取る故、袖をすりて手をやるを云ふ。）

よこ箸（飯つぶ、又、菜などの箸にとりつきたるを、はしを横にして、ねぶりとるなり。）箸先は、一寸、しめすものなり。（箸を、ぬらさぬやうにするなり。）

已上、細註は、伊勢安齋翁の註なり。）

一、手掛けの臺出たらば、兩手をあふむけて、そと戴く様躰にすべし。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資て我が短を補ふべし。他の短を以て、反省の料となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせみるこの愚をなすべからず。

第三章　佛蘭西婦人

（其の四）　佛蘭西婦人の模範

（六）　ジヨセ・フイーン皇后

賢良貞實は、ジヨセフイーンの天禀にして、之れ能く那破崙一世の愛を受け、長に、佛人に忘れしむる能はざる所以ある乎。

父は、佛國砲兵中尉ジヨゼフ、タツセーと云ひ、ジヨセフイーンは、千七百六十三年西印度のマルチニーク島に生る。長じて、ボーアルネー子爵に嫁し、一男一女を擧ぐ。當時、子爵は、革命黨に抗せしため、空しく刑場の露となり、ジヨセフイーンも、共に、消ゆべかりし命も、革命黨の巨魁ロベスピール斃れしため、僅に、之を逋れて、母子三人、極めて、困難なる生活をなしゝが、騷亂鎭まりて後子爵家の財產の一部を受くるを得、少しく愁眉を伸べにき。

奈破崙は、當時、革命後の再亂鎭壓のため、巴理人民所有の兵器を、悉く沒收するの命を奉じて、ボーアルネー子爵の佩劍をも取上げたり。然るに遺子ユーゼンは、此の時十二歲なりしが、太く之を悲しみて、親しく拿破崙の許に抵り、淚と共に其の劍を返さんことを請ふ。ナポレオン、其の頑是なき躰と、父を思ふの切なる情を憐みて、之を返す。ユーゼーンは大に喜び、押戴きて之を受け急ぎ歸ッて母に示す。母、亦、深くナポレオンの情に感じ、其の翌日は、喪服の儘、ナポレオンに謁して之を謝す。其の擧動靜淑、容顏玉の如くなりしは、深くナポレオンに感動を與へぬ。次で、ナポレオンは、シヨセフイーンを訪ひ、爾來頗る密親の交際を結びしが、遂に戀愛の情は、兩者の間に高まりぬ。

斯くて、ジヨセフイーンは、親戚知已の勸に從ひ、ナポレオンの結婚申込に應じて式を擧ぐ。然るにジヨセフイーンの艷麗にして慧敏なる、能くナポ

レオンの長短を知りて、之に事へしかば、太く其鍾愛する所となり、二兒、亦、眞に我兒の如くに愛せられぬ、斯くて、ナポレオン佛國皇帝の位に陞るに及び、ジョセフィーン、又、女皇の位に即き、一國の視線は、悉く、この兩位の間に注がる。既にして、ナポレオンは、ジョセフィーンに子なきを恨み、遂に、愛を割きて之と離別し、墺地利の公主マリア、ルイサと結婚せり。

離婚後のジョセフィーンは、快々として過せるが中にも、敢て、之を以て憾みず。唯、ナポレオン帝が運命の盛衰消長を、己が喜憂とし、寸時も忘るゝことなかりき。然るに、帝は、露國に大敗後非常に誹難の聲を高め、次いで、オートルローの戰に、全く其の運命を絶ち、配流の身となる、當時、女皇マリア、ルイサは、共に配所に行くを欲せず、却て、敵軍に阿諛せり。之に反し、ジョセフィーンは、悲嘆措く能はず、幾たびか配所に趣きナポレオンを慰めんと欲せしも、女皇に憚りて遂ぐる能はず、懇切憂苦の書は、絶えず兩者の間に往復され、ナポレオン、亦、須臾も、ジョセフィーンを忘るゝ能はざりき。次いで、ナポレオンは、配所を遁れ、再び、覇旗を、飜しゝも、事は志と違ひ、復忽ち、流竄せらる。此に於てジョセフィーン紅涙遂に乾く時なく、ナポレオンの死に後るゝこと數十日にして、其の肖影を抱いて眠れり。

（七）詩聖ユーゴー夫人の母

伯爵ジョゼフ、レオポルド、ユーゴーは、奈破翁陛下の一名將にして、久しく、南戰北伐に從事し或秋は以太利に、或冬は西班牙に、居住定め難く、爲に、其の妻子も巴理に留まる能はず、各地に轉輾す。

ユーゴー夫人は、頗る、意志堅質にして、操行嚴正の人あり。而るに、夫人は、熱心あるブルボン黨にして、良人の、拿破翁崇拜説と大に衝突し、屡々、議論を鬪はせしが、之が爲にや、伉儷睦じからず、遂に、別居することゝなり、夫人は、他日の佛國詩聖ユーゴー兄弟を携へて、他に移りぬ是より先き、夫人の、良人に從ひて、東西に轉輾の際の如きは、其の子女に、十分の家庭教育も施す能はざりしが如く思はるも、夫人は、時と處の如何に拘はらず、家庭教育計は、極めて嚴重に施したりき。

夫人が、巴理の片田舍におりし時は、兵馬倥偬の際とて、萬事殊に意の如くあらず、而も天主教の僧侶ラリヴィエーを招き、日々に、ユーゴー兄弟に書を教へしめ、又、體育にも意を注ぎ、庭園の仕事など、日課の如くに課して、其の筋骨を鍛はしめ、又、暇あれば、諸種の問を發して、工夫を凝さしめて、日々、其の兒の智慧つくを樂しみぬ。

詩聖ユーゴーは斯る賢明なる夫人の膝下に長せしと共に、絶對靈妙の頭脳を有することゝて、學藝の進歩驚くべく、殊に、深く詩を好み、十五歳の時、佛國學士會院募集の詩に、衆を壓し、當時、佛國第一の文豪シャトオブリアンをして、其の神童たるを叫ばしめたりき。

左れば、夫人の愛も甚だしく、夫人が烱眼、早くも、斯兒の、詩を以て大に顯はるべきを察して、他事を強ひず、專ら、之を學ばしむ。而も、斯兒中々諸學科に亘り、成績、みな、優絶なりき。斯くて、夫人は、多年困難苦慮の餘にや。肺症に罹り、命、旦夕に逼る。而して、當時、ヘンリー四世の銅像設立に付懸賞の募詩あり。ユーゴーは、兄のユーゼンと共に、看護の傍ら、一夜、

暁に撤して、長篇の一詩を艸し、之を母に致して、其の涙痕を留め、募詩の所に送り、優等賞を得しが、母は、間もなく、此の詩聖兒が「ユーゴーの佛蘭西」を作るを見る能はずして瞑せり。而も、夫人の面目は、其の兒に由つて、千歳生くるが如きを覺ゆ。

女子要書解題（體之部）

三浦千畝

簾中舊記　一巻

伊勢貞丈の奥書に、「此の簾中舊記は、東山殿の御臺所、妙善院殿時の、女房衆の事どもを記せるもの也。此の書、作者は、伊勢守貞宗なりと申傳へたれども、貞宗にはあらず。いかにとなれば、此の書の中に、いせきんせんじといふ事あり。金仙寺は貞宗の法名也。しかれば、貞宗の記されしにはあらず。貞宗の息、貞陸の記し置れし物あるべし』とあり。さて東山殿とは足利八代將軍義政のことなれば、此の書は、應仁以前に成りたるものなるべし。當時、武家の女房の事をしるには、便よきもの也。（群書類従武家部）

歴世女裝考（編入）　四巻

岩瀬百樹の著にして、弘化四年の刊行なり。著者は、有名なる戯作者山東京傳の弟にして、初め、篠山侯に仕へしが、後ち辭して、兄の業を嗣ぎ、山東京山と號し、專ら、稗史小説を著作せり。安政五年歿す。年九十。

此の書は、京山の著書中、最も眞面目なるものにして、我國女裝の沿革を記せしもの、此の書をはなちては見るべきものなし。（生川春明の女

子風俗考、獨り、これにつぐ好著なれど、彼は特に近世のみを記せり。)實に、この書の如きは、單に、女装の一端を知るのみに止まらず、史家の參考書として、最も貴重すべきなり。著者自らこの書の發端に附言して曰く、

今弘化四年丁未より廿九年前、文政二年己卯の春、友人北川眞顔翁より、彩色の古畫なる女の圖の掛軸をもたせおこせる書翰に、此の繪に讃をたのまれつれど、遊女なるや常なみの女なるや見さだめがたくて、筆を下しがたし。說をきかせよといひおこせけり。中 略 さて圖にむかひておもふやう、近古の比及すら、女装の今と異る事かくの如し。猶むかしに追ひ遡ばいかにかあらんと。そののち古圖に遇ばかならず、臨し、古書を涉獵て、其のさまの考證をしるしつるに、遂には廿四五

葉ばかりの著述めく物になりぬ。中略 女装の沿革を商推て、古の質樸を擧て、時粧の侈靡を省棄させ、あるひは容飾具、其の物其の事の起原など、古書に徵て研究たる書なければ、おのれ淺學ながら、其の書を綴ば世教の萬一にもあらん。いでやとおもひおこして、まづ女装考といふ書名を儲しは、文政五年にぞありける。斯てのちは、事の閑あるに書を操る時、女装に係る事あれば、必、摘抄おくを、假に女装考料抄と名付物し、今既に廿五卷におよびぬ。中 略 おのれ今年古稀のうへ九つを重算ぬれば、かくては骨も料材と俱に朽なんとて、かのはかなきさうし拋棄おきて、此の書を綴るにいたれり。蓋おもひ企し始は、七八百年許の中昔を限りとしつれど、太古の女装にも追遡しゆゑ、書名に歷

世の二字を加ふ。
これによりて、此の書の成りし所由と、此の書の性質と著者が多年の苦心とをしるべし。さて目録の大要は、

第一巻 鏡の始原以下、鏡に關するもの十二條、櫛に關するもの三條、凡て十五條、

第二巻 象牙の櫛以下、櫛に關するもの十一條、首飾に關するもの十四條、髮に關するもの一條、凡て廿六條、

第三巻 剃刀を用ひざる事以下、髮に關するもの廿四條、

第四巻 勝山といふ髮の結風以下、髮かもじ、水油、元結、御歯黒等に關するもの廿一條、

以上通計八十一條、上は、記紀万葉和名抄の古書を始め、下は、繪巻、双紙物語類に至る迄、和漢の群籍數百部を引用して記述せり。所說いかゝと思はるゝふしおきにしもあらねど、先、大體に於ては、よくとゝのひたる好著と云ふべし。

烈婦傳 一巻

序に『甲辰歳七月、閲二明良洪範一。載二近古婦人賢烈者十數人一。偉行峻節、皆可三以勵レ頑興一レ懦、傳二之萬世一而不レ朽、但書中不レ無二繆誤一。然其概可レ觀、因姑從レ之、後之修二彤史一者正焉』とあり。即ち、明良洪範の中より、原文のまゝ抄出せしものあり。(明良洪範は眞田増譽の著にして、四十巻あり。明君良臣の傳紀を記しゝ書あり)その目録は、尾張侯夫人、加賀侯夫人、細川侯夫人、佐竹侯夫人、酒井侯夫人、眞田侯夫人、富田侯夫人、阿茶局、大婆、春日局、阿勝、幸田氏母、澤橋氏母、原氏母の十四人あり。

列女百人一首 一巻

著者は、綠亭川柳あり。綠亭は、川柳第五世にして通稱を水谷金藏といひし人なり。自序に『わが大御國の古より、貞女烈婦の世に聞た

る者歟しらぬ迄多かる中に、敷島の道に志ある輩を集てよと、あながちに、すゝむる人の有ければ云々。宮柱高き雲井の事は除き、唯、鄙の田廬の言の葉あさりする蜑のさへづり、或は、流に立る川竹の操正しく、松柏の時雨に色を替ざる類を集め、列女百首とは號く云々』とありて、我が國古今の女子百人を撰び、歌一首づゝ掲げ、上に畧傳を記せり。肖像畫は、一陽齋豐國の筆なり。その人に詠歌のなき分は、著者の作歌もて補へり。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

平忠度

ふるさとの花のにほひにかくしたる
名も千載にぞあらはれにける

かくしたる名とは、誰かかくしたるか。忠度は、自ら名をかくしたるにあらず。勅勘の身なればとて、讀人しらずと、俊成卿の、千載集に入たりといふことあり。そをいへるにや。されば、名は、千載にあらはれざるなり。此の歌は、「さざなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山櫻かな」。とよまれたるによれるなるべし。さるを、たゞ、ふるさとゝのみよまむも口をし。また、花のにほひにかくしたる名とは、語をなさず。四句文字たらはで、にぞといへるもつたなし。

小松内府

ありて世のはてをば見しと散にけむ
まかるおい木のはなを見すてゝ

有て世の中はてのうければ、とあるによられた

るなめれど、はてをはなといへる、いといやしげなり。はては見しとやなどいふべし。二句、はてをば見しと、結句、花を見すて丶、見文字二ッありてうるさし。さて、近頃の歌に、をはといふ詞多し、よき詞にもあらざるをや。そはとまれ、老木の花とはいへるからに、三句の、散にけむと活らかしたるなめれど、人の死ぬるを、散とはいふべからず。また、花といふこと、消息にはふさはしからず。此の歌は、内府の心中もしらざるなり。つたなきよみざまとこそいふべけれ。

二位尼

あら玉のまだまつ丶みてわたつみに
しづむころものうらめしきかな

初句、冠辭とも見えず。麁璞の眞玉といへる、こはよしなし。沈む衣も、あやしむべし。かくいひては、衣が玉を包みて海底に沈たるに聞えて、不束なり。衣もて玉を包むは、人なるべし。されば、沈む衣とは、いかでかいふべき。あさましき世の姿になり行たるは、誰かなしけむと、其のもとを思ひて、其の人をこそ恨むべけれ。たゞに、衣をうらみむには、衣なにとかいはむ。

五條三位

桐火桶あたりのはるののどけさに
きみが言葉の花咲きにけり

かくいひては、桐火桶のあた丶まりにて、三位のよき歌の出來たるやうなり。拙劣笑ふに堪ず。

能登守敎經

引しばるきみが矢さきにたちむかふ
あだはなみまのもくづなりけり

初句、引しばるとは俗なり。引放つとは、などいはざりけむ。あだは波間のもくづとは、あや

しむべし。かくいひては、もくづが化てわだとありたるにきこゆあり。わだは波間のもくづとあるらむ、などあるべきを、みだりならずや。

衢口漫言（一）

白松閑主人

○北の方

月卿雲客、大臣大將、等貴族の妻を稱して北の方といふ。古く北の政所といひしは、攝政關白の妻にして、近くは徳川將軍の細君を御簾中など、稱したりき。そのいはれは、男は陽にして、女は陰なり、陽は南、陰は北、表は陽、奥は陰、女子は常に奥深く籠り居て、内所の諸事を取りはからふ故に、北の方といふなりとぞ。

されば、此の頃奥様と稱するも、此の北の方の語を意譯したる者あり。出で、交際場裏にたち、奔走周旋の勢を取り、或は、教育に從事するとては、講堂の壇に登り、或は、視察研學のためにとては、海外萬里の天に、巡遊留學する等、何事に限らず、一歩半歩も踏み出さんとする今日にありては、引き込み思案の別稱たる、奥樣といふ尊稱は、時勢に適せぬ語ともいふべきか。さればとて、急に表樣外樣など、稱するわけには行くまじ。こゝ一番、言語改良論者先生たちの、考案を煩はす事とせんか。

○漱石枕流

世に、枕レ石漱レ流といふ語あり、然るに昔、晉の孫楚と云者、誤りて漱石枕流と云ひしかば、或人笑ひて之を咎めしかば、孫楚曰く、漱石は歯を磨くを云ひ、枕流は耳を洗ふを云ふなり、と答へしとぞ。是によりて、後世執拗にして、己の過

失を庇護する者の稱となす。それとこれとは、意たがひて面白き話あり。我天正十年、明智光秀誅せられし後、豊太閤、連歌師紹巴を召して曰く、去る五月中、光秀京都愛宕山に於て、連歌せし時、其の方

ときは今天が下知るさつき哉

と發句を出し丶由。光秀本姓土岐なれば、時はと云ふと一致し、五月雨ふると云ふ意を思はせて、天下を領るに應ぜしめたり。これ、明に、彼が叛逆を、豫てより知りたるによれるならむ。何をもて、之を告げざりしぞと、詰りとはれしに、紹巴承り、仰之趣恐れ入りぬ。但し、私は、天が下なると發句仕候、もし、疑はしく召召さば、その時の扁額、神前にこれあり候間、めしよせたまひて、御覽候へかし、と申して、歸途、直に、愛宕へ登山し、天が下知ると記し丶に、知の字を削り去りて、再び前の如く、知と認めおきしを、誰知る人もなかりけり。翌日大閤件の額をとりよせ、紹巴を呼び出して、それ見よかし。天が下知るとあるは、といひければ、紹巴つく〴〵と見て、大に驚き、是れは、必ず、私に遺恨ある者どものしはざならむ。筆意墨色よく似せて候、しかしながら、削りて手入せしあと鮮明に見え候。恐れながら、御賢察願ひ奉ると、申し開きして事濟みぬとぞ。太閤ほどの明智者が、紹巴の書き改めし位のことを、いかでか知らざらむ。されど世の常の者ならば、知るを削りて、成るに直しおくべきを、なは知ると書きおける度量大才、太閤の意に叶ひし者とおもはる。

○七步の才

魏の曹植、嘗て七步の間に煮レ豆燃二豆萁一豆在二釜中一泣本是生二内根一相煎何太急の吟をなし

て、大罪を逭れしより、相傳へて咄嗟敏速の好例となせり。急遽の際に處して、あわて騒がず、頓智風發して、機に應ずるは、度量あり、天才ある者に非ざれば、決して、能はざる所なり。我朝にて尤も名高き、曾呂利新左衛門の如きは、優に、此の流の博士なりき。文錄年中、朝鮮出征の時、豐太閤自身渡海の事を、度々觸れられしが、淺野長政の忠諫によりて、つひに、その事なかりき。堺の町人にて、鞘師を業とする、曾呂利新左衛門

大閤が一石米を買ひかねて
けふもごとかひ明日もごとかひ（五斗買）

といふ狂歌をよみたり。大閤之を聞きて、新左衛門を召され、汝が落首、よくよみ得たり。しかし、大閤がとは不敬に非ずや。申し開きあるかと尋ねられしに、曾呂利申す樣、千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで、と申す古歌に候が、初め五文字は何にて候ひしぞと申す。それは、君が代はにではなきかと申されし時、新左衛門さればにて候。一天萬乘の天子の御事さへ、君がと申候、太閤がと申しても、苦しかるまじくやと辨じぬ。此の頓才利口、太閤の意を得て、後遂に、名を殘すに至りぬ。また、大坂の役に、明石某の士澤原某と云ふ者、落城の時捕虜となりて、關東方の者に、其の主の行方をとはるゝに、知らずといふ。さらばとて拷問に及びけれども、更に云はず。あまりにきびしく責められて、落涙しければ、さらば、白狀するにこそとて、拷問を止めていかにと問ふ。澤原曰く、德川家の運つよきを、感じての事にこそ。士たる者、たとひ骨を刻まるとも、主君のゆくへを云ふ者あらむや。もし此の度の軍、大坂方の勝利に歸しなば、德川家御父子、落ち行き給ふべし。其の時御

邊たちを捕へて、今我を責めらるゝ如くに責めなば、主君の行方をも白状すべき心なればこそ、我をもかく責めらるゝならめ、と思ひて、覺えず涙の流れしなりといひければ、人々詞なかりけり。家康之を聞きて、たぐひなき節義の士なりとて、赦されけりとぞ。死に瀕して動かず、一言にして敵人を屈辱す。眞に丈夫の概ある者なり。

○望夫石

此の頃讀賣新聞に、中井錦城氏の、望夫石は漢土より傳へて附會せし説なりと云へり。此の説、今更に新しき説にあらず。大明一統志、述異記、五雜俎、幽明錄等に出でたる者ある事は、既にはやく曲亭馬琴が、小説松浦佐用媛石魂錄に考證せり。鎌倉龜谷、及び肥前巾領隧山に、望夫石ありなどいふは、皆支那傳説の轉せしなり。世説、神異經などに載する支那人の駄法螺、もとより信ずるに足らじ。

○掩レ耳盜レ鈴

虚堂錄の註に曰く、我が耳を掩ひて、他人の聞かざらむことを欲す。是れ鈍賊の謂也と。更に俗譯すれば、自分だけの氣ずましと云ふ意なり。耳を掩ひて、他聞を忌むところを見れば、たしかに、自ら行爲のよからぬ事を、熟知しながら、良心の制裁にうち勝つこと能はず。ヅウ〳〵しくも之を決行して顧みず、世人、亦、ゆるすに豪傑を以てすや。嗚呼何すれぞ、現今耳を掩うて、鈴を偸む者の多きぞや。政客者流は云はざるべし。廟堂諸公は説かざるべし。商工業者は議せざるべし。その敎育社會、學生社會に於て、此の暗潮の流れて止まずと云ふに至りては、豈痛歎極れる恨事に非ずや。未だ、耳を掩ふくらゐの時は、多少濟度の希望なきにはあらねど、聞く者の耳塞ひ、見る者の

眼盲ひたるを幸ひに、偸む者、今は、大手をふつて、耳を掩はざるのみならず、呼號して天下に横行す。國民の昏睡も、亦、甚しいかな。須く鳴レ鐘益レ鈴とでも、改むべきか。あゝ、

（つゞく）

修養餘錄

安藤晴晨

○心の平安を得るといふ事こそ、げにあらまほしけれ。如何なる境遇に陷りても、いかなる失意の地に處しても、心の平安を失はざらむこそ、あらまほしけれ。心だにおだやかならむには、外界の毀譽褒貶何かあらむ。心だに靜ならむには、暴風怒濤も、われにとりては毫も痛痒を感ぜざるものあらむ。されば、世上に對し、世人に對しての不平もやみ、圓滑に世に處するを得るに到るべきなり。

○人世蹉跌多し。人事概志と違ふ。一難超え來ればまた一難。苟も、一度、失望の淵にしづみなば、遂に、また、うかびいづべき期無からむ。失望する勿れ、落膽する勿れ。成敗利鈍は天にあり、我にあり。

○人は、其の性情を溫雅ならしめよ。溫雅の德は、實に、人をして、親愛の情を發せしむ。人は、亦、その意思を剛毅ならしめよ。剛毅の德は、人をして、畏敬の念を生ぜしむ。この二つは、須臾も離るべからざるもの。人、若、溫雅なるのみならむには、人は、たゞ、その狎る可きをのみ見む。人、若、剛毅なるのみならむには、人は、たゞ、その怖るべきをのみ見む。此の二德の調和したるものに於て、人は、始めて、圓滿なる品性をのぞみ得べし。

○汝の誠を行へ、誠をよそほふ勿れ。至誠は、竟に、天地をも貫くべし、鬼神をも感ぜしむべし。然も、至誠を行ふに當りて躊躇する勿れ。斷の一字は欠く可らず。斷じて行はゞ、鬼神も之を避くといへり。亦、至誠を行ひて憾む勿れ。己の至誠の、人に貫徹せざるあらば、罪を己に歸せよ。徒に、人の、己を知らざるを憾むは、小人の事のみ。己の德の、未、人を動かすに足らざるを讓め、深く顧みて、自己の修養を心がけよ。斯くの如くならば、其の德日にすゝみて、人は、自その感化をうくるに至らむ。桃李物言はねども、下自蹊を成す。

○宏量大度といへる事、頗、意を用ゐて之を解せずむ、過つ事多からむ。自己は、宏量大度たらむと欲して爲す事も、他より之を見ば、寧、笑ふべき事多からむ。宏量大度と放任無頓着とは、似而非者なり。前者の弊は後者なり。かくては、修養に志すとも、その甲斐あらじ。宏量大度たらむと欲せば、先、その心を確乎たらしめ、其の操守を嚴ならしめ、而して後、人を容れ、他をゆるす德を養へ。根本已に治りて、其の德已に備らば、其の行爲自芳ばしく、春風一度野をすぎて、堅氷こゝにとくるが如き趣あるべし。然らずして、徒に、之を摸せむとせば、たゞ、他の嘲笑をかひ、蔑視を蒙るにすぎざるべし。

○他に對するには、溫顏を以てせよ。猥りに、鋒鋩をあらはして、人に迫るは、寧、その心の淺薄を示すもの。見よ。仇浪のたつは淺き瀨にして、千尋二千尋、深く眞珠白珠を藏する蒼海の表は、却りて、浪平なるにはあらずや。我、若、溫顏を以て人に對せば、人、亦、常に、之と接するをよろこぶべし。櫻花先にこやかに笑みて人を迎へ

あば、憂愁の眉も自ら開けて、薫風の身に沁むを覺ゆるが如くなれば、人は、我に接するを快とすべし。實に、是、人生の一美德あり。

大和めぐり（承前）

井上頼文

畝火山東北の御陵

頼文いはく。延喜諸陵式に、畝傍山の東北の陵は、畝傍の橿原宮に御宇しろしめし、神武天皇、大和國、高市郡に在り。兆域東西一町、南北二町、守戸五烟、と見えて、延喜年中までは、年々の御まつりも、いと嚴かにましけんを、武臣權を弄し、皇室式微あるに及で、大陵は、愚昧野蠻ある、農夫がために鋤きかへされて、耕地の畑原となりはてけるこそかしこけれ。松下見林の前王廟陵記に、今按ずるに、畝傍山は、

今、奈良の西南六里、久米寺の北、俗に云ふ、慈明寺山、是なり。東北の陵、百年可以來、壊れて蔬田と爲す。民、其の田を呼で、神武田と字す。暴汚の爲す所、痛哭すべし。數步を餘して一封と爲す。農夫之に登て恬として怪と爲さず。之を觀るに及で寒心す。夫、神武天皇は、神代草昧の蹤を繼ぎ、東征して中州を平げ、四門を闢て、八方を朝せしむ。王道の興、治教の美、實に、此に創り。我國、君臣億兆、尊信を致すべき廟陵あり。澆季此に至る、噫哀哉と痛歎せり。日本臣民として、いやしくも志ある者、たれか、痛大息せざらんや。屋代弘賢翁の道の幸に（寛政四年十一月）廿五日、空はる、多武峯に行んとて、卯のをはりにたちてゆく。（中略）うねび山、里人は持明寺山といふ。こなたの畑の中に塚あり。松一本たてり。かけまくもかし

こき神武天皇の陵となん、心のうちにふしおがみつゝゆく。彦輔ぬし作詩。

神武陵

山陵幾間ニ里人ニ求　半死孤松一畝丘
不レ有ニ聖神開ニ帝道ー　誰教ニ品庶脱ニ夷流ー
麁王像設尋ニ金閣ー　藤相墳塋聳ニ玉樓ー
百代本支麗不レ億　此處何無レ培ニ一坏ー

常時神陵の荒廢を拝して、慨然として詩を賦したる柴野栗山翁の胸中察すべし。

ちなみにいふ。こゝに擧げたる詩は、専ら世にもてはやすものとは、いさゝかことなる所あり。按ずるに、甲は、とみの跡なるを、屋代翁が直に筆記せるもの、乙は他日推敲をへたるものなるべし。今參考のために、人口に膾炙する所の詩をこゝに附記し、圏點をほどこして、この異同を知らしむ。

遺陵幾向里民求　半死孤松數畝邱
非有聖神開帝統　誰教品庶脱夷流
麁王像設尋金閣　藤相墳塋層玉樓
百代本支麗不億　幾人來此一回頭

かしこくも　孝明天皇、御陵の壊廢をきこしめされ、深く叡慮を惱まし給ひ、御陵の遺跡を尋ねさせ賜ひけるに、山本村の耕地に、字ミサンサイ（ミサンサイは、みさゝぎの轉訛なり）といふ所ありて、村民は、こゝを、シンムトと云ひ、また、この、ミサンサイの坤の方なる櫻川の細流に架けたる橋をシンムトの橋といひ傳へたるなどによりて、すなはち、この地と定めさせ給ひ、安政年中、徳川幕府へ勅して、御陵造營せしめたまはんとして、奈良奉行、戸田能登守、こゝに出張せしめたまひ、又、文久三年、戸田和三郎、谷森外記に命じて實地を測量せしめたまひき。つぎて、徳大寺、萬里小路の兩卿調査ありて、東西九十六門、

南北百二十二間を兆域と定められ、戸田、谷森の兩氏土木を監督し周圍に封疆を築き、木柵を設け、内には湟渠を穿ち、堤上と外圍には松樹を植ゑ、飛鳥川なる石をもちて石垣をたゝみたりき。其の功によりて、戸田氏を大和守に、谷森氏を大和介になし給ひぬ。また、延喜の制に倣ひ、陵守戸五烟を置れたりき。また明治七年より、毎年四月三日を大祭日と定められ、勅使參向ありき。明治の十年紀元節には、　今上陛下　行幸ありて、御親祭あらせられき。明治十三年三月、堺縣令、税所篤、命を奉じて、周圍の木柵を廢し、新に美麗壯大なる石柵を築かれき。この壯麗なる石は小豆島より運搬せるものなりといふ。今、この結搆壯大なる御陵を拜すと共に誰か明治の聖代を仰がざらめや。

一夕話（承前）

大宮兵馬

斯くて、所司代の御館には、倶揃へなどなし、其の用意しつゝも、日は一日と、參内のことは延びにたれば、其の内々の有樣の、いかなりとも測りがたさに、正義の人々は、己れを嗾のかして、彼の親族へたより、其の御館に奉公ずみして、善からん折りには、相圖してよと言ひき。己れ、また、心惑ひて、自から定めがたかりしに、赤根武人言ひけらくは、若狹守は、朝敵にては侍れども、御身にとりて、先祖累代の主公に侍らずや。其の主公の討たるべき助し給はんは、德義上、梅田先生の御心にも侍らじをといへるに、己れも、實に、然なりと思ひ決し、其の奉公のことのみは、斷じて、諾はざりき。

さる程に、正義の人々は、やゝ〳〵、其の數加はりて、已れを訪ひ來るもの、日を追ひて、いよいよ、繁くなりしかば、大高いたく思ひ煩ひ、梅田先生の御姫にして、廣く、世に知られ給はんこと、いと憚り多きゆゑ、今よりは、暫し、身をも隱し給へといひしまゝに、已れも、然るべしとて、やがて、播州なる西村市太郎と大高との二人に伴はれて姫路をさして落ちゆきたり。

さて、其の途すがら、大坂にては、萩原先生を音なひて、其の家に留まること三日なりき。かくて、湊川を過ぎては、楠公の御墓に詣でゝ、更に、叔父君のことゞも思ひしのび、須磨の海邊を過ぐとては、平家の昔を悲しみぬ。此處に、路のほとりに知章卿の御墓あり。標の石は倒れ伏して、あたりは、牛馬蹈み荒らせり。

憐なり昔の跡を來て見れば
　手向くる袖の先づぞ露けき

と思ひ續けて、其の石起こし立てゝ打ち過ぎぬ。此のあたりは、いと波靜かにして、海面の清く澄みたるを見るにつけても、成り行く身の果ての世のみ、恨めしく悲し。

須磨の浦の清くも波のをさまりて
　御代は昔に立ち返らなん

と思へるも甲斐ぞなき。姫路に至り着きては、河井總兵衛、坪内岨次郎、西村などに、いと厚くもてなされて、一年ばかり留まりたり。其の折りの正月に、

思ひきや姫路の里に旅ねして
　都にまさる春に逢はんとは



皇孫殿下の御降誕を祝ひ奉りて

（日本女學校生徒）

皇御孫のうまれたまひしめてたさは
御代のさかゆるしるしなるらむ　松澤澤子

彦皇子のうまれたまひしめてたさを
いく千代かけていはひまつらむ　野口りん子

千代八千代かはらぬ御代に彦御子の
うまれたまひしけふそめてたき　田部井ふく子

さしのほる朝日さゝもにすめみまの
うまれたまひし今日のうれしさ　長谷川櫻子

こゝのへの空井にたかきわかたけは
いくよろつ代もさかえゆくらむ　欧田さよ子

すめみまのうまれ玉ひしめてたさを
よろつよかけていはふうれしさ　石井はつ子

彦皇子のうまれたまひしめてたさを
千代よろつ代にいはひまつらむ　永井あき子

青やまの御そのゝまつに千代かけて
まふひなつるのこゑのゝさけさ　石坂さし子

陵ふかくゝもゐのまつのわかみどり
さかゆく御代にあふそうれしき　太田さき子

千代八千代榮ゆるみよにひこみこの
うまれたまへるけふのうれしさ　岡田まち子

皇みまのあれましにきさをさな子も
きみか八千代をうたふけふかな　仁村きみ子

君か代はいくちよまてもひとすちに
みそのゝたけのさかえますらむ　森脇さゑ子

朝日さすくもゐにたかきおいまつに
千とせをうたふひなつるのこゑ　田川みさな子

彦御子のうまれたまひしめてたさを
よろつよまてもいはひまつらむ　正木たえ子

こゝのへの竹のそのふのわかみどり
いよゝさかゆくけふそたのしき　稲岡玉子

すめみまのあれましゝ日さ民くさの
よろつよかけていはふけふかな　大石まさ子

ひこみこのうまれ玉ひし今日の日を
いく千代かけていはひまつらむ　柴田ふじ子

さきはなるみそのゝ松にすこもれる
田鶴のよはひは千代に八千代に　瀧井すゑ子

かきりなく榮えむ御代にあれまし
すめらみこをあふくうれしさ　高山駒子

君か代にうまれたまひしひこみこを
いく千代かけていはふけふかな　倉持みい子

ひこみこの生れたまひしめてたさを
つるかめさへもいはふけふかな　毛利すみ子

さしのほる天津日つきの八千代まで
ひかりかゝやくうらやすのくに　鈴木のぶ子

榮ゆく御世のしるしさひこ御子の
あれませりけむけふのめてたさ　渡邉くに子

こゝのへの御苑におひしわかまつの
さかえをいはふ今日そうれしき　日比しげの子

彦御子のうまれそひにし今日よりは
たけのそのふもいとさかえなん　鶴岡利可子

彦御子のうまれたまひしめてたさを
千代に八千代にいはふけふかな　佐伯てい子

彦御子のうまれたまひしけふの日は
いく千代までもめでたかるらむ　清水千代子

ちとせまでかはらぬそのゝふたは松
いよゝさかゆるきみか御代かな　田口たき子

すめみまのうまれ玉ひしうれしさを
もろこしひともいはふけふかな　石井みち子

さし昇るあさ日とゝもにひこみこの
うまれたまひしけふそうれしき　西かをる子

みそのふの松にすこもるひなつるは
いくよひさしくさかえゆくらむ　木山田しづ子

ひこみこのうまれ玉ひしめてたさを
ことほきいはふけふのうれしさ　海老原ぬい子

こゝの重に生れたまひしひこみこは
さかゆく御世のしるしなるらむ　佐藤さよ子

こゝのへにうまれ玉ひしひこ御子の
千代のさかえをいはふけふかな　齋藤やゑ子

ひこみ子のうまれ玉ひしめてたさを
いく千代かけていはひまつらむ　稲羽きくの子

こゝのへのみかきの内のみさかえを
よろつよまてといのるたみくさ　松浦よし子

さかえゆくみそのゝ松もきみか代の
ちよにあはむとみとりそふらむ　松本しげ子

ひさかたの雲のうへなるよろこひを
きゝてはしづもいはゝさらめや　田村操子

大御代の根さしかためしけふとてや
くものうへにはひなつるそまふ　藤波千代子

おほ君の御まこの御よをすゑなかく
さかえいませとおもはぬそなき　岡本蘭子

さきは木に若葉をそふるめてたさは
たれしのひとかともにいはゝぬ　兵頭あやき子

かきりなく榮ゆる御代にひこ御子の
うまれましゝそいさゝめてたき　古作さと子

彦御子のうまれたまひしけふの日を
みなもろともにいはひまつらむ　中村しづ子

すめみまの生れましぬさきくまゝに
わかたみくさは千代よはふなり　奈良林雛子

さかえゆくみそのにおひしわか竹は
いく千代かけていやしけるらむ　多加谷てい子

彦御子のうまれたまいしめてたさを
いはふことはもかきりしられし　五木田りう子

すめくにの御よのあさつく彦御子は
千代よろつ代もさかえますらむ　渡邉あい子

はつまこの生れたまひしおほきみを　いくよろつよさいはふけふかな　一柳ふじの子

ひこみこの生れたまひしめてたさを　おもひおもひにいはふたみくさ　野村八重子

ひこ御子のうまれ玉ひしめてたさは　なにさたゝへんことのはもなし　金子はつ子

君かよにうまれたまひしひこ御子を　いつれのたみかいはゝさらめや　關口清香子

皇御孫のうまれたまひしけふよりは　くにのさかゐもいやまさるらむ　中山りう子

いく千代もさかへいまさむ皇御孫の　うまれたまひしけふそうれしき　平井はなの子

つるかめのよはひにあゐむ皇御孫の　うまれたまひしけふのうれしさ　柴田文子

さかゐゆく御代のしるしと仰き見ん　すめらみまこはあれましにけり　和田きよ子

すめみまのうまれ玉ひしめてたさに　わかひのもとのひかりそふらむ　浅見千代子

彦御子のうまれたまひしよき日をは　いくちよかけていはひまつらむ　岸田清子

みそのふのふたはの松のわかみとり　よろつよまてといはふけふかな　榎本なを子

ひなつるの千代よふ聲のゆかしるに　よろこひいさむよろつたみくさ　阿久津いく子

くもりなきあつまの空にのほる日は　さつくにまてもてりわたるらむ　富田眞子

ひこ御子のうまれ玉ひしめてたさを　西野きく子

彦御子のみあれことほくもろこゑは　つるかめさへもいはふけふかな　是永うれ子

かしこくもすめら御孫のやすらかに　あめつちにこそみちわたりけれ　あれましにきさきくかうれしさ　川端さく子

七月五日兼題

蓮露

天　本鄕區駒込西片町十番地　三浦とき子

はちす葉におきゐる露をそのはすの　いともてたまにぬくよしもかな

評に曰、朝日の影、夕月の光りにはゐて、蓮葉の露の白玉、さりくにうるはしう見ゆるものからわきて此歌はしも、蓮の糸のいさたくみにもよみはられたり。

地　肥後國熊本市東寺原町　田代艶子

村さめのすきしあとりをはちす葉に　とゝめてゆらくつゆのしらたま

評にいヽ、むらさめのなこりの露、ことに光さやけく見ゐていさめでたし。

人　大阪市東區平野町三丁目百十一番屋敷　栁田登子

風ふけはゆらくうちはのかたよりに
　こほれてすゝしはちすはのつゆ

評に曰、露ふく風のすゝしさ、身にしむはかりおほえて、此歌に選者の心もかたよりはべりぬ。

秀逸　甲斐　名取正代子

しらつゆのたまをかさして花よりも
　はちすは葉こそをかしかりけれ

○　三河　石川樂子

池のおものゆふかせすゝしはなはちす
　かをりとともにつゆもちりつゝ

○　肥前　日高かす子

かせわたるはちすの露にそほぬれて
　ころも手かをるあさぼらけかな

○　肥後　吉田季子

にこりにも泥にもしまぬはちす葉の
　つゆはさなからたまとみえつゝ

○　東京　加藤まさ子

にこり江にそまぬぞきよきはちす花
　つゆにはつきのかけもやとして

○　東京　中村いそ子

夕かせにたまとみだれてはちすはの
　うき葉にゆらくつゆそすゝしき

○　播磨　熊澤しづ子

さきにほふ池のはちすにおくつゆの
　たまとみたれてかせそよくなり

○　三河　服部正子

すみの江のすめるこゝろを蓮葉の
　にこりにしまぬつゆにみすらむ

○　東京　椎野薫子

露むすふいけのはちす葉かせすきて
　やとれるつきのかけそみたるゝ

（以下原稿到着順）

手にされは消へきものと知りなから
　たまと見まかふはすの葉のつゆ　林　環子

吹くかせに玉とみたれてうるはしく　岡山眞子

よゝ日にゝほふはちすはのつゆ
はなはちすならむさすれは露ちりて　岡山ゆき子
ころも手ぬるゝかなりゆかしし
はちす葉の浮はのつゆのゆふかせに　河田いし子
たまさみたれてちるそすゝしき
風ふけはたまさみたれてちるつゆの　松尾せい子
にほひもきよしいけのはちすは
白つゆのたまるもすゝしいけみつの　小田みち子
にこりにしまぬはちす葉の上に
ふく風におつるもあれさはすのはに　加茂はな子
つゆのたまらぬさきなかりけり
おく露もたまさみゆらめいけみつの　武藤いれ子
にこりにしまぬきよきはちすよ
朝かせにかなり床かしきはなはちす　横井幸子
葉におくつゆそたまさちりしく
さきにほふはちすにおけるしら露の　横井ふみ子
かせにちりしくいけのすゝしさ
さしのほる旭ひのかけにきらめきて　赤尾かす子
たまさらまかふはすの上のつゆ
こくおきて池のおもてなかむれは　丸城さなり子
はちすのはなに露そむすへる
わか池のいろめさましきはちすはに　秋岡れつ子
たまさもまかふつゆそおきたる
あさな〳〵はちす葉におくしら露は　杉山君代子
ひさのこゝろのかゝみなりけれ
いつしかさまちしはちすの花咲きぬ　小川つる子
葉におくつゆもかなるはかりに

もゝくさの花にそまさるにこりねの　小野はま子
ひちにれさしてさけるはちすは
池の面のみわたしさほく咲き出てゝ　正木たね子
つゆもいろあるはなはちすかな
香かやさの池のはちすはさかりなり　安藤ひさ子
さひもこよかしつゆのひぬまに
朝ほらけしのはすいけを見わたさは　森山みゑ子
はすのうきはにつゆむすひけり
いけの面につゆをふくめる花はちす　富田たね子
またひさしほのなかめなりけり
無き人をしのふなみたかいけの面の　林きみ子
はすのはすゑのつゆのしらたま
みさりなる蓮のうき葉のしらつゆを　今井たい子
たまさもなしてゝちすつきかな
みさりなる蓮の葉におくしらつゆに　清水てふ子
のほるあさひのひかりかゝやく
にこりより出つれさ清きはちす葉に　濱口ころく子
おくしらつゆはたまさみゆけり
朝かせもさもにかなりてしらつゆの　佐々小學子
おきあまりたるはすのはなかな
水きよきいけのはちすのはなの上に　佐々鄰有子
おきあまるつゆのひかりすゝしし
こゝろなくかせなちらしそさゝれ波　竹村竹煕子
たまゆりかくるはちすはのつゆ
はちす葉にたまさみたれてちる露の　戸狩鯖楢子
ひかりすゝしきいけのおもかな
ありあけの月のすさひかはちす葉に　高橋松江子

たまさまかひておけるしらつゆ

はちす葉にあさおく露はしろかれの　佐野きやう子
たまさやひさのめてはやすらむ

夕かせにみたれみたるゝはちすはに　徳永萬壽子
つゆのしらたまちりにちりしく

咲きに匂ふはちすの露のたまのこさ　徳永廣子
ひさのこゝろもさやけかるらむ

濁りにはしまぬはちすのこゝろより　野口信子
葉におくつゆのたまさみゆらん

はちす葉のおのかこゝろの潔けれは　野口靜子
つきもやされりはなのしらつゆ

朝かせにたち葉の露もみたれあひて　佐々値賀子
かなりもふかきはなはちすかな

風吹けはいさゝすゝしくおさたてゝ　森ふみ子
つゆのたまちるいけのはちす葉

ゆふたちのはれわたりたる池の面に　森はな子
つゆおもしろきはなはらすかな

はなはちす葉ことにつゆの玉なして　石川頼子
なかめすゝしきあさはらけかな

あさことに見れともあかぬ花はちす　石川なゑ子
つゆのしらたまひかりそひつゝ

しら露はだまさみたれでふきわたる　山根久子
あさかせすゝしいなのはぢす葉

玉と見てさらむとすれはしらつゆの　源たけ子
はすのうき葉にかなろゆかしさ

あさまたき池のみきはにたゝすめは　中部瑞子
はすのつゆふくかせそすゝしき

月かけにたともとみゐてはちすはの　伊勢村春子
葉ことにむすふつゆのさやけさ

いつはりの多き世なれははちすはに　安藤脩子
おしそふつゆのたまと見ゆらむ

おきいてゝいけなし見れは朝こちに　樋口孝子
つゆなちらしてはすのはな咲く

濁り江のにこりにしまぬはちす葉に　酒井こらく子
たまさもみゆてやさろつゆかな

ゆふ月のひかりそへけるはちすはの　永井さい子
つゆのしら玉さよくもあるかな

濁り江におひいてながらはちすはの　吹田たけ子
つゆのしらたまひかりさやけし

はちす葉におくしら露のこほれては　村瀬花子
かせさへかなろあさほらけかな

さくおきて池のおもてな見わたせは　長岡とみ子
はす葉の上につゆそやどれる

朝またきいけのおもてをながむれば　瀧本春子
はすの葉するのつゆそすゝしき

あめはれてはちす花さくいけ見れは　中野はな子
わかはのうへにつゆそきらめく

はすの葉にむすびし露もあさかせに　合田きのへ子
おつれはおたしいけのみつかな

蓮の葉にむすへるつゆのたまみつは　浦野こう子
にごらぬひさのこゝろとそ見ゆ

鵜あそふいけのはゝすにおくつゆは　櫻井方子
葉ことくにひかりそへけり

朝おきてにはゆはすいけなかむれは　横地かすみ子

秋の庭

はこさにつゆのたまそかされる

朝またきおき出て見れはみつきよき
いけのはちす葉つゆにぬれつゝ　馬渡まさご子

白つゆのたまをちらしてあさなく
さくやはちすのはなのさやけさ　山田稲子

花の香なをそひてわたるあさかせに
はすのうてなのつゆそこほるゝ　山田米子

おさめ子がすかたの池のはなはちす
つゆきよけにもかせにみたるゝ　青木たま子

ふもすからはすのうき葉に露おきて
かせなきあさもすゝしかりけり　荒野たに子

はちすはにむすへる露はぬまみつの
にこりにしまぬこゝろなりけり　鐵山増代子

濁りゐのにこりにしまぬはちすはに
しらたまなしてつゆそやされる　武田龜子

はちすはにやさがるつゆのしら玉な
きよきこゝろのさもさこそ見め　飯島いま子

夕されはゝすのうきはにおくつゆも
つきのひかりにたまさみねつゝ　栗田口のぶ子

あさかせにこほれて涼しいけのおもの
はすのうき葉のつゆのしらたま　篠原蓮子

にこりにもしまぬはちすの花の上に
やさるもすゝしつゆのしらたま　秋山きやう子

朝なくつゆのしらたまおきかへて
すゝしく見ゆるいけのはちす葉　中館やう子

朝日子のかけなゝうつしていけの面の
はちすのつゆそたまさかゝよふ　田代綾子

清らけく咲くやはちすのはなの上に
しはしやされる露のすゝしさ　北島松子

ふきわたる風にゆらきておもしろく
眞たまに似たるはちすはのつゆ　北島功子

忍はずのいけのはちすにおきわたす
つゆはかさしのたまさみねけり　北島操子

いけ水のうき葉におけるつゆみれは
はちすはたまのうてなゝりけり　呉かつ子

しのばすの池のおもてな見わたせは
ばすのうき葉につゆそかゝやく　阪田せい子

池の面に咲きてみたるゝはなはちす
うきはのうへにやさるつゆかな　阿久津たけ子

夕立の晴れてすゝしきいけのおもの
はちすにやさるつゆのしらたま　森田もさ子

池みつのにこりにしまぬはちす葉の
きよきこゝろはつゆにしられぬ　新井やま子

きねすあらは玉にもぬかむはなはちす
うきはのうへにむすふしらつゆ　岡井かれ子

わかめつる池のはちすのはなにはに
いさゝゆかしくつゆのむすへる　川井田草子

すゝしくも見ねわたるかなはちす葉の
うきはにやさるつゆのしらたま　谷崎まつも子

あさまたき白つゆきよきはちす葉は
この世のほかのものさこそ見れ　脇坂みね子

池みつのにこりにそまぬはなはちす
きよきうき葉にあさつゆそおく　中川さし子

はちすはにやされるつゆの玉よりも　天野みち子

もろきはひさのいのちなりけり

池みつのにこりにしまぬはちす葉の
うへにやされるつゆのしらたま　太田みつ子

あさぼらけそよふく風にしのはすの
いけのはちすのつゆそこほるゝ　岡崎なみ子

朝日さすいけのはちすをふくかせに
すゝしくゆらくつゆのしらたま　鎌田光寓子

ふすまきてはしぬ涼しきゆふくれに
つゆおもしろくおけるはちすは　石川こさ子

夕まくれいろもすゝしきはちすはの
かせにゆらきてつゆそこほるゝ　石川もさ子

池もせのはすのひろ葉におくつゆは
たまさまろへさこほれさりけり　川合ぬひ子

さくはなのにほひか清きはちす葉に
ひかりそへたりつゆのしらたま　三宅中枝子

にこりたる池のこゝろにゝぬものは
はなの香きよきはちすはのつゆ　服部萬子

玉さちるはちすのつゆもにほふらん
むらさめすきしなつのゆふくれ　推野秀子

みさりなるはすのわかはにおく露を
はらふもすゝしなつのゆふかせ　推野ぬき子

むらさめのなこりの露のたまちりて
ひかりすゝしきいけのはちす葉　推野清子

あさかせにはの池みつなみたちて
はすのうきはにつゆそみたるゝ　推野鋭子

ふくかせにちるも涼しきはちす葉の
うへにやされるつゆのしらたま　竹越こう子

はちすはにやされる露なさな子は
もてあそはんといひてけるかな　岡田柳子

吹く風にゆられながらもはちす葉に
やされるつゆはこほれさりけり　岡田春子

たもさふくあさかせ清きいけの面に
つゆもこほるゝはなはちすかな　大谷津紫子

はちすはの上におきゐるしら露の
かせにこほるゝあさけすゝしも　竹村貞子

朝風のかよへるこさにしらつゆの
たまさこほるゝいけのはちす葉　南里貞子

池のへのかせもかをりてはちす葉に
つゆおくあさのすゝしくもある　寺尾さかね子

はちすはの濁りにしまぬこゝろこそ
おくしらつゆのいろに見ねけれ　田村多豆子

ふくかせにみたるゝはすの露みれは
まつちるものはこゝろなりけり　村上操子

池みつのにこりにしまぬはちすはの
つゆなしひさのこゝろさもかな　上原のふ子

かせふけはいけのみきはの花はちす
ゆうくもすゝしつゆのしらたま　後藤のふ子

はなに葉にむすひしつゆのしら玉は
はちすのいさやぬきさゝめけむ　山本てふ子

こほれてはまたも玉なすはちす葉の
つゆおもしろきいけのおもかな　高石登代子

はちすはの浮葉にまろふしらつゆの
ひかりすゝしきなつのあさかな　大海原芳子

池みつのにこりにしまぬはちす葉に　服部倫子

すかすかしくもおけるしらつゆ　坂本豊子

朝かせのふくもすゝしきいけの面に
散りてはむすふはちす葉のつゆ　なにかし

しらはすにおさらぬ清きこゝろもて
なにかはつゆをたまさあさむく

評に曰、僧正遍昭の歌に、（蓮葉のにこりにしまぬこゝろもて何かは露を玉さあさむく）さありて、世の人のしる名高き歌なり。此の歌は下野の某より詠みこされしが、そが初二の句のかはれるのみなれはさらす。

七月五日兼題

轉地療養中の友に送る文

天　大阪市東區小野町三丁目百十一番屋敷　御田益子

若葉涼しき下蔭も、いつしかと、照りわたりける日影の暑けさ、いとたへかたうも侍るかな。まことや、過し日よりみ心すぐれさせ給はで、須磨なる御なり所に、物し給ふよし、承り侍りて、むねやすからず覺え侍りぬ。いかにかおはすらん。いみじうはわらせ給はぬにやと、いと心もとなくうしろめたうなん。しゝこらかしつる折は、うたてわるわざなりと、兼て承り侍れは、いかでうらみなきやう、能くかしつかせ給ひて、御かそいろにも、とく、み心はるけさせ給へらんことを、ひたすら、こひのみ申になん。偖、御住なし給ふ、御わたりのけしきも、さこそと、光る君の昔覺えて、いと忍はしうおしはかられ侍りぬ。さるをかしき海づらに、み心清く、いすゝき給ひなは、やかて、御いたつきも、すか〳〵しういえ給はんこと、鏡の海にかけても、見給ふる心地し侍りぬ。霧深き曉には、沖遠くいさりする海士のよぶ聲、空清きゆふべには、山のはに匂ふ桂の光に心をやり給ひて、濱のまさごの、うるはしく玉なす御言の葉もひろひ給ふらん。某の卿の、せきふきこゆるとの給ひけん浦浪も、夜はの枕に、ひとりねざめの床もたのもしう、はた都の友戀しう覺え給ふ折もありなん。さるふしには、雁の玉章、天の使ひにたくへ給らはいと嬉しうこそ。たゞとくおこたらせ給はん日をのみまち侍りぬ。あなかしこ。

しほぐもりはれてさやけし須磨の浦の
すが〳〵してふたよりをぞまつ

地　上總國鶴舞町　高石[illegible]代子

梅雨の空、いつしか晴れて、雲の峯立重なり、梢には、せみの聲、やう〳〵かしましく、御暑さも日に添へいみじうおぼえ候折から、心にもなう、御無沙汰に打過ぎ候事、何とぞ御ゆるし遊ばされ度願上候。偖とや、君には、先つ頃より、くすしの御さしづにて、其の地へ御移り、ひたすら、御療養遊ばし候よし。昨日、某の君より承りまゐらせ候へども、其の後は、如何に渡らせ給ふにか。伺ひ上候。あけくれ、わかぬ海山のけしきを御らんじつゝ、きよき水、新しき空氣の中に、静に、御起居遊ばし候御事なれば、日ならず、おこたらせ給はんことゝ、うれしう存じ候。はやく、例の御歌會にも御出席を願ひ、御高詠を承り度と、たのしみに致居候。就ては最近の女鑑、もしいまだ、御らんにも相ならず候はゞ、御つれ〳〵の御慰みにもやと、御目にかけ參らせ候。さだめし、御歌も澤山遊ばされ候御事と存じ候。何とぞ、御もらしのほど願上候。申上るまでにも候はねど、時節柄、一層、御身御大事切に御攝養遊ばされ度、ねがひ上候。先は、御伺ひかた〳〵、申上參らせ候。かしこ。

兵庫縣揖保郡越部村　石川元子

人

此頃の五月雨に、家の内もしめり勝にて　梅の實にてはわらねども、ほと〳〵うみ居候。まして御病氣の爲め、遠くはなれて御療養遊ばされ候御樣、定めし御心淋しからんと御察し申上候。御氣分は如何に候哉御出で遊され候てより、最早、三週間と相成候まゝ、今日か明日かと御歸りのみ待ち居候へども、御快方との御たよりはあれど、今に御かへりの御沙汰も無く、ふりつゞきのうつとうしさと、まちわびしさに、いよ〳〵、心もむすばれ候。近きところなれば、したしく御見舞にも參りて種々の御話も承り度候へども、何を申すも、遠方の事とて意に任せず、まことに殘念に候。いつぞや、御許樣より頂き候ばらのはな、今朝、たゞ一りん美しう〳〵さきいで候。御許樣とともに見ならば、一入たのしからんと、何につけても思ひだされ候。申すまでには候はねど、精々御養生の上、一日も早く御歸りの程、花とともに待ち居候。あら〳〵かしこ。

東京市本郷區弓町二ノ七古山方　堀内ふさ子

人

行春の名殘をとめし八重櫻も、そよふく風にさそはれて、木々の梢は、青葉とかはりて、いとすゞしくおぼえ候折から、如何暮させ給ふらむ。扶に、

御氣色伺ひまつるべき處、學びの業何かと茂くて、御音づれを怠りしこと、ゆるし給ひてよ。其の後は、御様子如何に候や。御妹君に伺ひまつるに日日、快方にむかはせられ候由。まことに、御目出度存候。當地御父母君始め、皆々様御變りなくいらせられ候まゝ、御心やすめ給ひてよ。

此の花の都すら、御許のいらせられぬに、いとゞ淋しく覺え候を。まして、田舍に入らせらるゝ御許様は、一しほと存せられ候。されど、田舍は、所も、いと廣らかにて、野山の景色うつくしく、ことに、空氣とても淸らかなれば、御病氣の爲めにはよろしき由に付、淋しさをしのばせられ、御養生專一に遊ばされ度候。申上ぐる迄も無之候へ共、御許様の御病氣は、御勉强の結果にて、頭を痛め候事故、野山の景色を友となし、學びの事などは御心にかけさせられず、御養生遊ばされなば、御全快も速なるべく候。來月の學校の運動會などには、ともにたのしく、御連れ立ち申度一日も早く、御全快の事、陰ながら祈り居候。

此品は、御目にかくる如きものには無御座候へども、御身にさはりなき品に付、御受取被下度、先は御伺ひまで申上候。私くしも、御病氣御全快の事、神かけ祈り居候。餘は、次の便りと申殘し候。

あなかしこ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

久しく、五月雨のつれ〳〵なりし空のけしきもうちはれて、六月の照日さかりさはなりぬ。轉地の御療の御館は、いかゞして朝夕をしのぎたまふやらん。さだめ、朝には、日奈久の温泉にさしかゝれろ、鵜山にのぼりて、遠北海を見はるかし、心をやりたまふなるべく、夕には、獨舟のこぎかへりくる濱邊に出たまひて、蜑の拾へる波の花貝、さくら貝を携かへりたまひて、酒の肴さなしたまひ、蚊軍を防禦なし、一夜を心よくあかして、病苦を治めたまふなるべし。かへすがへす、一日もはやく、轉地療養のしるしに、中垣ゆはぬ姿が意志をくみたまひて、歸館の吉報を指なりかぞへてまち入り侍るになん。あなかしこ。

向山まき子

やよひも、はや過ぎぬ。櫻の梢も、青さ茂りあひて、吹き來る風も、いさこゝちよく相成候處、あなた様には、さいつ頃より、御病氣の爲め、御母君様と御同道にて、海山遠き御地に御療養中の由。其の後容体如何に御坐候や。御地は、閑靜にて空氣も宜しき由に候へば、御身の上に取りては、御滿足如何ばかりと、影ながら御噂申上居候。殊に、鄙の事なれば、都とは様變りて、種々のおもしろき事がら、めづらしき虫の音など、御耳にし給ふなど、亦一きはならむと存じ居候。扨、此の雑誌、今日發行の分取よせ申候間御たいくつの折からの御なぐさみまでに、進じ參らせ候。猶々随分御療養の上一日もはやく御歸京ありて、御出校被遊候様念じ上まゐらせ候。かしこ。

飯塚まつ子

昨今は漸く、夏めきて、木々の梢の若葉も、一入色まさり候折から、御許様には其の後御障りもあらせられず、日々、御療養の御こと〻御察し申上候。私事も、恙なく通學致居候ま〻憚りながら、御心安く御思召下され度候。さて、御許様には名におへる勝地に御滯在遊され、さぞかし、御身もよろしき方に御向ひ遊され候御事と、かげながら嬉しく存じ居候。御地は、ことに、昔より、名所舊跡など多き處なれば、かれ〳〵、御たしなみの詠歌の料も、山々、これあるべく候ま〻、御氣すゝませられ候折には、二三首御もらし下され度候。最早、日ならず、御歸京のよし承り候へば其の節には、山なす御話承はり度、日々、待上まゐらせ候。猶、此の上にも、折角御加養遊され、一日も早く御歸京をまち上候。先は御歸京の折、萬々申上べく候。草々かしこ。

國府田　はる子

御轉地後、御病氣如何に候や。御地は、塵ふかき都とかはり、靜けさも、亦、一入と、かげながら存上まゐらせ候。御家皆々様も、妾事も事なうまかりあり候間、御心置なく御養生被遊、一日も早く御歸りあらむことを、ひたすらに念じ居り候。うき世はなれし仙境は日頃、御たしなみの歌も、御心のま〻にて、こよなう御慰みにもや候ふらむ。先は御伺迄。かしこ。

飯泉　秀子

久々にて一筆申上候。追々、夏衣したしき時節と相なり候折から、御許様には其の後の御容体如何に御座候や。花のあした、月のゆふべ、君やいかにと思ひやり參らぬ日はなけれど、學の道の事しげきま〻に、ふりはへても、御氣色伺はず。おこたりの罪は幾重にも御ゆるし下され度候。降て私事々なう暮し居候ま〻、御心安う思召下され度候。さても、去し日、御許様御出立の後は、日々學びやには通ひ居り候へども、いといたう、心さびしくて、堪へがたきまでに思はれ申候。此上は、學びの道には、いさ〻かも御懸念なう御療養遊され、一日も早う、御全快の上、御歸宅の程待上候。早々。

金田　さみ子

春も、やう〳〵くれて、若葉のころと相なり候折から、御許様には、御いたつき如何あらせられ候や。ひごろより、御地は、いと靜なるよし承り及び候ひぬ。さるよき土地にて、まなびやの事など、みこ〻ろにかけ給はず、御保養遊ばされ候はゞ、御いたつきも、日々にうすらぎゆきて、間もなく、御全快に相成ること〻御待申上居候ま〻、何卒、何卒ひと日もはやく、御全快遊ばされむ事、いのり入りまゐらせ候。次に、此方、みな〳〵、日々變りもなく相くらし居候ま〻、御心やすく御思召下され度候。先は、久久、御左右も御たづね致さず候御わびかた〴〵、御見舞申上度、かくの如くに候。早々かしこ。

林　きみ子

藤の花の咲きそめたるけふ此頃、君には、御いたづきいかゞに渡らせられさふらはむ。遠く隔たる此身には、心の内安からず、文もてうかゞひまゐらせ候。次に、此方一同、無事に暮し居候へば、御心安う御思召下され度候。御地、人里はなれたる片田舍のことなれば、さだめし、御つれ〴〵の事と察し上まゐらせ候。されど、それも、御身の爲めに候ま〻、早く、御すこやかの御身とならせられ、御歸宅あらむことをいのり居候。先は、御様子伺ひまであらあら。

杉山　君代子

花のさかりも、またゝく間にうつり失せて、木々の梢は、若葉おひ繁り、青葉のかげも、なつかしき折柄とは相成候。思へば、御出立の日よりは、はや、廿日あまりも過ぎ候ひしが、其の後は、い

かゞ渡らせ給ふらん。御いたつきの御様子、いかゞにおはし候や。さだめて、御地は、閑靜なる所故、新樹生ひ茂りたるみさりの山山或は山路に瀧の流れ落つるなどに、御心のなぐさむ事も多く、おのづから、御全快のほども近かるべしとは存じ居候も、心にかかり候まゝ、伺ひ上候。私事も、かはりなう通學いたし居候が、御許様御欠席後は、何やらむ物淋しう覺へ、御地のこと、心にうかばぬ日とてはこれなく、一日も早う、御歸京のほど、指をり數へて待ち居候。何とも、御療養專一に遊ばされ、學校のことは、御心づかひなきやう願上候。先は、御病氣御見舞まで。かしく。

小川つる子

御玉づさと承るより、うれしさに、いとあはたゞしう封なしひらけば、おもひきや、何々の御いたづきにて、御養生の爲、彼地に御うつり遊され候由。誠に、驚き入候。只今にては、御容体いかゞに候哉。定めし、御兩親様をはじめ、皆々様、御心痛の御事とひとへに、御案じ申上候。御地は、けしきもよろしく、空氣も新鮮にて候御事なれば、御病の爲には、よろしかるべくと存じ候へども、なれぬ御旅寐の事なれば、さぞ、御つれ〲にや候はむ。こなたにても、君のまさずなりてよりは、いともの足らぬ心地にて、恋しくゆかしくおもはれ候へば、何卒、御油斷なく、充分御養生の上、一日も早く御歸京あそばされ度、御待ち申上候。御地へ參り、御見舞申上ぐべき筈にては候へど、御存じの通り、まゝならぬ身にて候まゝ、失禮ながら、取あへず、手紙を以て御見舞申上候。此の品、御目にかくる程にも候はねども、御口なほしにもと存じまゐらせ候まゝ、御受取下され度候。草々かしこ。

矢作きく子

拙き筆もて示し上參らせ候。先日、御前様御病氣の爲めにて、熱海溫泉へ御湯治に參り候由、昨夜承り候間一寸御伺申上候。あなた様、熱海へ參りてより、快き方に趣き候こと、存居候。又、御前様は常平生、御養生なる御方に御座候へば、きゝめも一そうはげしう御座候はんと思ひ居り候。御前様御留守の内に、兼ねて御約束申置き候處の算術本は、最早末とも相成、誠にたのしく習ひ居り候間、御心安う御思召下され度候。又御からだを一そう御大切に遊ばさるべき候。私事も、早速御全快相成るやう心中、いさゝか祈り居り候。此の品、あまり粗末なる物には御座候へ共、昨日の日曜日に、先生方と散歩の爲めに山へ參り候て、取りたるきのこなれば、此きのこ少々なれども差上候間、御届き次第早速御あがり下され候へば、誠に嬉しく候。先は、御伺ひまで。あら〱かしく。

隅りう子

さいつころより、御足なやませ給ふときゝ、御案じ申居候處、此度、箱根なる底の湯に御出なされ候よし、うけたまはり、速に、御おこたりの事疑なかるべくと存じ、いとよろこび申居候。

底の湯にゆあみなしつゝ足のけな
おこたりはてゝとくかへらなん

御別れの後は、何もかはりたる事なく候へど、唯、行く時も歸る時もゝろともに通ひしを、まことにつれなき心地にて候へば、早く、御かへりあれかしとのみ待ち上候。國文の先生よりも、相替らず、日々學校のかへさに立ちより申候。共にきゝ侍りし更科日記の講義は、わづか五六枚のみ殘り居り候。此のころ課題に作りし文例、ふできに候へども、つれ〲の御笑艸の料にも御目にかけ候。御ゆあみ中、所につけたる御歌ども數多御よみの御事と存じ上候。のちのたよりに、少しもらさせ給へ。かしこ

黑田はま子

御入院後、あなた様御病氣の御容體如何と、朝な夕なに案じ煩ひ

居候處、昨日の御文のやうすにては、やう〳〵に、御快方のよし稍、安堵致し申候。醫師は、名も高き御人なれば、殊に頼母しく、たゞ、此上ながら、御大事は、御看護のみに候へば、御如才もあるまじけれども、御怠りなきやう願ひ入候。先は、御大切に遊ばさるべく、幾重にも、ねんじ上げ候。かしこ。

高山喜代子

昨日まで、梅よ櫻よと、あやかりしも、はや、みどりの樹陰さかはり、日にそへ暑さいやまし、すこやかなる身も、いとゞ苦しうおぼゆらるゝに、まして、御轉地、御療養せらる御許様には、如何御座しまし候や、御伺ひ申上候。生れし地にありてだに、親しき友に別るれば、いと心ぼそう覺ゆらるゝに、ひとり、異郷の床にありて、御療養あらせらるゝ御身は、如何ならんとおしはかられ候。さて、先日中、山形にて開かれし、奥羽六縣聯合共進會開會中に、ものせしうつし絵、數葉、御らんに入れ、せめて、御つれづれをなぐさむる、しるしにもとてさし上候。又御宅にても、御家内様いづれも、御すこやかに渡らせられ候まゝ、御心安うおぼし召さるべく、及ばずながら、私事も、時々御伺ひ申上げ、御兩方様、皆々様、の御心を御慰め参候へば、御心配なう、ゆる〳〵御養生の上御歸りをこそ待上候。かへす〳〵も、時節からとは云へ御身体御大切に、ゆめ御不養生なし給ひそ。あなかしこ。

清水じゅん子

拙き筆もて示し申上候。御許様御事、余ほどの御なやみにて、御枕も重げに見ゑて、某温泉へ御療養に御出遊されしよりは、一向思ひながら、御音づれも致さで打過ぎ候罪、惡からず御ゆるし下され度候。此頃の御容態如何に候や。定めて、宜しく相成候ふらんと存じ居り候。こゝもとには、皆々、御内の御家内様も一同、御機嫌うるはしく打過ぎ居り候まゝ、少しの御心配も御無用に御座候。又、御許様當地を御出立ち遊されしよりは、三四ヶ月の程なれど、恰も一二年も見ぬ心地して、早くも御壯健に、相成り、御歸郷の時は實に幾程のうれしさならんと、今より思ひ居候。日頃御壯健の御身体故、早く御なをり遊されんとは思ひつれど、追々、暑さいやまし候時節とあひなり候へば、御療養一層御注意の上、一日も早く御全快遊ばされ、御兩親様の御心をやすめさせ給ふやう、かげながら、祈り上まゐらせ候。あなかしこ。

松井りう子

先日より御許様御病氣の爲め、東京にて御療治遊ばしゝよし、先刻うけたまはり候。いかばかり御兩親様を御始め、御心配の御事と深く御察し申上候。しかし、御年寄などとは事ちがひ、よく〳〵御年若に御座候はゞ、藥功少しくきゝなば忽ち御本復致すべくまゝ、必ず〳〵、御氣もみなさらず、御心を大丈夫に御養生を遊すべく候。早速、御全快にて一日も早く故里へ御歸りの程、かげながらいのり上まゐらせ候。かしく。

平塚みどり子

御前様には、かねてその御持病相起り、去る日、彼の地へ御療治に參られ候よし。此頃如何に候や。御様子伺ひ参ろ。御前様、御身の爲とは申ながら、山川隔つる僻地に御出させられ候御事に候へば、何にかにつけて、さこそ御不自由の事と御察し申居り候。此間、東京なる誰様の許より、文おこせたれば、取る手おそき心地にて拜しまつり候處、本月何日より、試驗に取かゝり居候趣、御報知にあづかり申候。四五日を經、直に御歸國のよしに候へば御かへりを待、御同道御見舞に參るべきやうに御約束申居候間、親しき友と、たま〳〵相逢ふこそ樂しけれと指なり御待ち下さるべく候。御前様は、御兄弟多かめれば、最々大切なる御身の上に候。心しづかに御療治なされ、御全快目出度御歸宅なまれ候曉の

一日早からんことを神かけ祈り侍居参らせ候。暑さはいへど、不順の候、御身屑一層御自愛の程伏して願上候。先は此頃の御左右伺ひ旁、かくは。

中郁瑞子

みそらにかゝる雲もなく、術を渡る風もなき三伏の此の暑さには學びの道も、はこそたどられねば、いつものごとく、暑中休暇となり、昨日しも、暫しと歸り侍りしが、こそのくれより、はあはぬ友のいとなつかしさに、御身がりとぶらひしに、君にはさいつころより、御病氣をなやませ給ひ、くすしのすゝめにしたがはれ、二見にて御養生なし玉ふよし、御母君より承り、いとうおどろきはべりぬ。さても、昨日今日の、術衣もとかすばかりの暑さには、たゞ扇にうごくいさゝかの風を命とたのみつゝ、おぼつかなくも此の日をすごすを、まいて、いたづきに、なやませ給ふ君の、いかにわたらせ給ふらむ。いと心もとなきまゝに、ふりはへてこそ、訪ましものを、うしや、やみがたき用の湧き出でしに、ほいならずも、せうそこして、訪ひまつるになむ。なめはいかでゆるし給ひてよ。おしなべて、女子は、男子より脚氣に罹るもの少なくして、又軽く、夏の行くにつれて、ともにおこたるよしなれば、御心強うおはし、一日もとく、おこたらせ給はらむことを、ねぎ申すになむ。あなかしこ。

中尾せむ子

往にし月、降り續きたる故にか。近頃は、うつうつしきつゆも殘りなく晴れ渡り、心地よう覺ゆ候折柄、いといと恋はしき君の御玉章に、一しほうれしく、繰り返し幾度か拜し参らせ候。都の樣を見飽かれ給ひしも、御地へゆかれ候より、一月二月と時ふるまゝに、すゞろになつかしく思し給ひ、また、拙き姿が事、はた學び舍中事ども、おぼし起し給ふ事も繁くなりまさりてなむ、おはすとも、

情深き御言の葉、いつもながら、身に餘りうれしう存じ候。扨さや、御前樣には、さいつ頃よりは、御身の量も増し、御肉付もよろしく、御顔の色さへ赤みさし候由。誠によろこばしく、心よりの笑ひを漏らし申候。猶、御体御大切に遊ばし、一日も早く、御歸京の日をのみぞ待ちまひらせ候。先は、あらあら、ながら、一言聞え上げ侍り。あなかしこ。

福原蓮子

すぎにし日、君には、轉地御保養の爲め、須磨へおもむかせられしところ、其後の經過、至て、御よろしくとの御事、限りなく御よろこび申上げ侍り。殊に、御旅行先は、勝景に富み侍る所からなれば、海山の眺望めで度、浦和の御逍遙、いかに面白く、御氣の保養、いかばかりなるらん御轉地の申譯こそおはさめと、察し上侍り。御訪問かたく、一度まかり出づべき筈なりしも、兄の洋行に付き、何かと事のしげく、思ふに任せざるこそ、殘念千萬に侍り。尚又此佃煮鑵詰五個、通運にて、進上いたし侍れば。御笑味下され度、先づは御旅中御慰れまで。かしこ。

赤倉かね子

御出で立ち給ひし後は、御うとうとしく、扨、御病氣はいかゞに候や。御療養かなはせられ、もはや御本復とさつしあげ候。御別れ申し候のちは、何もかはりたる事なく候へども、たゞたゞ、日々、ゆく時も歸る時も、もろともに、學校にかよひしを、一人物するが心さびしく、早く御かへりあれかしとのみ、待ち上候をまして、御兩親樣の御心のほど、いかばかりに候らはん。君には、御乳母樣と御二人のみまします由。さぞさぞ、ものさびしく、ましますらむ。はやはや、御すこやかに、ならせ給ひて、一日も早く、元の林に、立ち歸らせ給ふやうに、祈りつゝ、かく申し上候。かしこ。

山口すみ子

思ひながら、其の後は、ゆくりなう事とひ待らざりしが、春は、いつしか夢の間に過ぎ去りて、花にうらみし風も、今は、青葉にまたるゝ夏と相成候事故、晝は、終日緑樹の影に文つゞり給ひ、夜はよもすがら月と共に時鳥の鳴音まちわび居給ふらんいとゞなつかしう存じ候ひつるに、思ひきや　御許様には、御心地すぐれ給はぬとて、御姉上様御とも〳〵、大洗の里に轉地御養生遊ばされ居候よし承り、夢かとばかり打驚き申候。さるにても、日頃御健康に渡らせられし御身の、如何なる物の障りにやと、心もとなく思ひわづらひしに、さまでともおはし給はぬよし。御母上様より承り、まづは、少しく心安うなむ。こは、必ず、日頃御勉強のみにて、御運動の足ざりし事ならんと、おしはかり侍れば、空氣も清く閑靜なる地にて、心靜かに御養生遊ばされなば、日ならずして御全快の御事と存じ奉候。かつは、御母上様の御心づくし又、御姉上様のみとりのしるしの、いかであらはれぬ事やはあると、ひたすら信じ申候。世には、己の心よりあらぬ病を引起す者も候へば、何事も思ひわづらひ給はで、濱の千鳥や磯吹く松風を友となしつゝ、御全快の期の、一日も早からん事をいのり申候。己をみなの身にしあらねば、直に、御伺ひまゐらすべきに、汽車のある世も儘ならぬ身は、なめげにも、拙き筆にかくは物して、雁のたよりもて伺ひ申候。あはれ、御心地すぐれさせ給ひし日に青海原眺めつゝ、御歌どもの胸に浮び候ひぬる折は、何卒、美はしき水莖のあとよせさせ給ひてよ。一人淋しく故山に物思ふ身には、こよなきたまものに候。大洗の里は、景色いとよき所と承りはべれば、日頃みやび心に富ませ給ふ御許様の御全快の曉には、いかに、風雅の料もたらしつゝ歸り給ふらんと、指屈りかぞへ御待ち申候。そはともあれ、返す〳〵も、御身体大切に、神かけ念じ上候。かしく。

岡崎なみ子

日々、御容体伺ひまつらまほしう存じながら、とやかく取りまぎれ、御不音にのみ打すぎ候處、其の後、おひ〳〵、御快き方に向はせられ候よし。此上なう嬉しう存候。嘸かし、住みなれぬ他郷の空にて、朝な夕なに、心ぼそく、おぼしめされ居候事と存候。さりながら、世はなれし山里の清らけき氣に、今しばし御保養遊され候はゞ、遠からず、御全癒は、必定と存じ、ひとへに樂み居候此方にても、御兩親様はじめ、御はらからたち、何れ様にも、いと御すこやかに、渡らせられ候まゝ、つゆ、御心にかけさせられまじく願上候。昨日は、さる所に用達いたし、道すがら御館にまゐのぼり、いろ〳〵御あしらひにあづかり、誠に恐れ入り候。花子の君には、此程は、いと淋しげに、姉君の御歸りを今日か明日かと待ちわびさせ給ひき。なほ、私宅にも、さしたるかはりもなく、日々、御うはさのみいたし、一日も早く御歸省あそばされくさ〴〵のめづらかなる、御物がたりとも聞かまほしう、御待ちうけ申居候。まづは、御見舞かた〴〵、一寸御伺ひ申上候。あら〳〵かしく。

岡田春子

先の日、大磯にものし給ひてよりは、ふつに御たよりも仕らず打すぎ候事、よきにゆるし給ひてよ。扨も、其の後は、如何に渡らせられ候哉。暑さは、とみに加はり侍れど、夏しらぬ濱邊に、涼しき風をうけつゝ、御療養せさせ給ふ事なれば、定めて、此頃は快き方に向はせられしことならんと、日々、學校にて御噂申居候さらぬだに、むつまじき御中らひの、入るにもいづるにも共になし、共に學びたりし君の、御地はものし給ひてよりは、いとさう〴〵しさやる方なくて、なつかしき師の君のみなしへも、好める

國文の御講義も、諸共ならではいと興うすく思はれ申候。君には、御病中とはいへ、重き御いたづきにも候はねば、夏しら浪のよする濱邊にうちいでさせ給ふ御言の葉の、いかに床しく候はん。御序の折に、御もらし下され度、待上候。猶、暑さに向ひ候折柄、充分、御保養遊ばし、御身健やかにせさせ給ひて、さく御歸京の程を祈り参らするになん。かしこ。

古川操子

隙行く駒の足早く、瀛館の窓に惜しき袂を分ち參らせしは、きのふの夢とさめ果てゝ、はやも、文月の半となり侍りぬ。打絶ゐて、文の音さもきこゐ參らせず、打過ぎ居り候處、其の後の御經過、如何に在はしまし候哉。定めて、砂白く松青きあたりを、そゞろあるきし給ひて、折々は、日頃好ませ給ふ道をもたどらせ給ふならむと、そゞろに御羨ましう、思ひ居り候へ共、何を申すも、いろ君の御もとをはなれて、遠き所に御加養遊ばさるゝ御心の内、如何ならむと、日々、思ひまゐらせぬ日とては御座なく候。妾事は、いつも、都のちりに埋れ居り候へ共、幸、暑さの障りもなく過し居り侍れば、何卒、御心休め給ひてよ。さても、同じ學の窓に、螢螢を集め侍りし頃より、如何なる宿世の誘にしにや、はらからも啻ならずむつび合ひて、よきにあしきに語らひしものを、いかに、御いたづきの故とは申せ、はや、ふた月も御姿を拜せねば御なつかしさ舊はしさは、なかなかに、描き姫の盡すべくもあらずなむ。この上は、一日も早く御本復ましまして歸り來まさむ樂しき日を待ちまゐらする事は、千秋の思ひにこそあなかしこ。



後樂園拜觀記（坤）

山岡螢雪

●大堰川

眺望もつとも佳絶なる涵德亭の前面、あだかも、青き毛氈を敷きめぐらしたらん如き芝生をへだてゝ、澄々たる碧水あり。これ山城の大堰川を摸したるところ、川、はなはだ廣からざれども、古木深々として兩岸をつゝみ、汀の蛇籠水を嚙んで吹き渡る松風に和し、水底清うして砂石數ふべく、塵外の趣あり。中央に大猷公家光が、嘗、腰うちかけたりと傳ふ腰掛石ありて、淋しげに獨り水

上に浮び、昔が偲ぶさまの床かしさ。
今はむかし慶長の頃とかや、當時の土木學者角倉了以諸所に遍遊し、一日、美作の國和計川に至り艚船を見て大に悟り嘆じて曰く、百川皆以て船を通ずべしと、仍ち周章嵯峨に歸り、直に大堰川を泝ぼり丹波の國保津に至り、撫然としておもへらく、凡そ、天下に一事業を成さんと欲する、決して容易に非ざるなり、古人が嘗誠めたる、虎穴に入らざれば虎兒を得ず。とは、實に千古不磨の金言なり。此の語以て、應用すべく、益々進て艱難とたゝかひ、辛苦とあらそひ、忍耐して止まざれば、如何に此の川、端石おほく水淺しといへども船を行るの理なからんやと、仍ち之れを官に請ふ。幕府其の志を嘉し許していはく、未だ曾て舟を通せざる所、今こゝに開通せんと欲す。これ流域一帶、民家の便なるのみならず、誠に國家の幸運なりと、了以大によろこび、玆に於て初めて工を起し、先づ水面にあらはるゝ處々の大石は、悉く轆轤索を以て牽き、其の水中に在るは浮樓を搆へて、鐵棒の鋭頭三尺、周三尺、柄の長二丈ばかりに繩をかけ、數十人をして挽て之れを投下せしめ、以て石を碎く、石若し水面に出れば、則ち烈火にて燒き碎き、或は河廣くして水淺き所は石を積て河を狹ばめ、又瀑流ある所は上と下流とこれを平準にせしなど、百方苦計をめぐらし、遂に工を成就し以て、丹波の國世喜村より嵯峨に至る舟行始めて通じ、玆に五穀、野菜、食鹽、其の他鐵石、雜貨など何くれとなく載漕し、大に其の便を計りたりし了以が功績を賞する餘り、遊樂の間にもなほ且つ彼が公益に盡しゝ勞を顧んとて、將軍家光の特に、こゝに摸したるなりと云ふ。

●西湖堤

大堰川に隣りて、溶々たる蓮池あり。されど己れ拝観したるは、去にし早月の中ばごろにて、汀につどふ初蛙の鳴き聲まだ愛らしく、一つ二つの巻葉やうやくこゝかしこの水面に浮べるのみありしが、今や世は夏の盛りともなれば、所得顔に生ふる蓮の葉のいと青やかに、くだけては結ぶ白露の玉かとばかりきら〳〵と見え渡る其が間より、或は眞白に或はうす紅く、花の咲き匂ふ池の涼しき今日このごろ、香り床しき朝風に、葉末の露をふみわけて、蜿蜒長蛇の如く池の眞中に横たはれる此の西湖堤上に逍遥ば、心もおのづから澄み渡り頓に仙境中の人たらん心地こそせめ。嘗、權中納言源綱條卿一首を賦して曰く、

吹起新涼七月天。出泥花淨更嬋娟。
一莖蓮帶朱顔美。淡女爭妍池上蓮。

抑、此の堤は、彼の有名なる支那の西湖を、明人舜水の摸しゝ者にて、切石をもてたゝみ、往復わづかに七拾有餘歩の小堤なれど、さすがに、雅味津々として饒かなり。

●渡月橋

右に大堰川を控へ、左に西湖堤を眺めつゝ歩を進めば、いと小さき土橋あり。これ渡月橋なり。あはれ此の邊の風致、瀟洒として床かしく、望めば雑魚の樂しげに浮つしづみつ三々五々群れ居る樣の愛らしさ、坐ろに、渭水のほとりに直鈎を垂れし翁のそのかみも、思ひいだされて興味いはれん方ぞなき、若し夫れ、四隣寂として草木眠り、水流靜かに音なく、星影おちて一天拭ふが如く、皎々たる月、雪の如く光ひやゝかに爽え渡る三更の眞夜中、ひとり明月を友として此の橋を渡りたらんには、如何ばかり神の下し賜ひし自然美の粹を感受し、知らず、俗腸を洗ひ去らるべきかは。

かくて此の橋を渡れば、池畔のかなたに、崔嵬たる岩石屹立として、さながら屏風の如く、其の上より蛟龍の、今や風雲を叱呼して、まさに大堰川を呑まんとする樣の老松一樹あり。幹甚だ大ならざれども、古色蒼然として人目を奪ふ。これ即ち大猷公家光が、こゝに遊びたるをり、手づから手巾を打ちかけたりし、御手拭掛けの松なりと。

●富士山

夫れより、山の小徑をたどる事わづかにして、一つの高丘に着きぬ。これ即ち富士見臺なり。日朗かに風靜かなる節、仰げば、遠く富士の秀嶺、眼裡に映じて麗はしく、嘗、詩仙丈山が、白扇倒懸東海天と詠じたるも、さこそと思ひ出されぬ。俯せば、脚下に咲き匂ふ花のいと白き、琉球躑躅もて富嶽を摸したる樣、まことに眞に逼る。嗚呼人工の妙又驚くべきかな。

こゝを又一つに、琉球山といふも、之の白躑躅の在るが故なりとぞ。

●觀音堂

琉球山を過ぎれば、左に千幾百余年の星霜を經たらん松の老樹につゞきて、幾多の喬木鬱蒼として生ひ茂り、晝なほ暗く、吹きすさむ風ひやゝかに梢に叫ぶ茅蜩の聲あはれに、潺湲たる溪流に和して寂しく、恰も、深山幽邃の如し。こゝにいと赤けに塗りたるさゝやかなる堂あり。之れ即ち清水觀音にして、彼の有名なる京の清水を摸したるものなれば、舞臺も在りて眺望最も佳く、前に吐月橋をながめ、後に舞臺瀧の響をきく、恰も京の音羽の瀧の如し。

此の地元より觀音堂のありし所にして、開園後に至り、特に京の清水を摸したるなりと云ふ。

●通天橋

清水觀音を下れば通天橋あり。これ大堰川の上流に架せられたる處、橋のほとりに紅葉最も多く茂り、若楓の凉しげなる影、的歴として逆にうつり、水底の小鱗さながら樹葉に戯れつゝある如く其の樣のをかしさ。

こゝ暫し日數を積みて、桐の一葉の庭に落ち秋風やうやく寒き晩秋の頃ともなれば、唐紅に紅葉して、如何ばかりか麗はしからんを。義公光圀これを詠じて曰く、

夾岸霜楓水底匂。　微風綏動碧紅鮮。
山頭秋晩物皆醉。　笑殺獨醒千歳人。

●得仁堂

通天橋を渡り行くことわづかにして、得仁堂に至る。これ義公光圀が、年十八歳の秋の頃初めて、彼の首陽山に餓死したる義人、伯夷叔齊兄弟の傳を讀み、深く感嘆する處あり。夫れより身を終るまで日夜その德行を欽慕しておかず、仍て時の拔藝家前田助十郎をして、その像を彫刻せしめ、以てこゝに安置したるなりと、今は、八幡宮と稱する由、堂内は讃岐瓦をもて甃とし、茅葺にして風雅に、而して、堂の軒にかゝげたる額に得仁堂の三字ありて、源治寶書と記されたり。(未完)

母の粧飾

宮本みつ子

あゝ世の人よ世の人よ
自然の神の造られし
美觀は汝の爲ならで
神が自身の樂みと
このよの美觀は造られぬ

木ずゑをつたふ鶯は
汝が朝目のさめやらで
ゆめのなか路をたどるとき
神の御爲と聲たてゝ
淸くゆかしく歌ふなり

見よや美麗の千ぐさ花
汝が朝眼の覺めやらで
星の光の淡きとき
神の御爲と色添へて
野にも庭にも開くなり

知らずや野邊にすむ蝶は
汝が見ざる時も舞ひ
眞珠の深き海のそこ
寶の玉はやまの奥
人にもしれずうづもるゝ

知るや小兒よあゝ小兒
汝を此の世にうみませる
母は自然の神にして
此の世の汝は『人』なるを
知るや小兒よあゝ小兒

やよや汝の眉目には
富豊の美觀みつとても
秀麗の氣宇溢るとも
是れや汝の爲ならず
母の粧飾ぞ樂みぞ

* * * * * * *

去年の今夜

(四)

彦峯生

未亡人は、遂々、斑痘の病氣になつて、翌朝は、朝飯も食べない。靜子は、泣明した眼を、そむけがちにして、やう／＼に押しかくし、御母樣の看護を、なにくれといたしましたが、どうも、自分が、斯樣なに病氣にさせ申したかと、非常くすまぬと思ふ心の中にも、猶、口惜しさ、恥しさに、折々、身をふるはせて居ります。熱は少々あるが、なに例の御病氣ですと、醫師は、至極手輕に言うて、歸つたが、さて翌日も其の翌日も、一週間も、はや二週間になつても、快復どころか、病勢ますます募りゆくばかりである。少年ながらも、一家の杖とも柱とも頼まれて居る武男さんは、丁度、習志野へ行軍とやらでしばらく、歸つて來ない筈である。靜子は、御母樣の看護、次郎さんの御相手、お鍋どんへの注意等すべて、身ひとつに引受けて居るだから、この頃は、最早、物思にしづむべき時間がないやうである。

しかしながら、それは、表面のことで、學校の開校の日の近くに隨うて、心の中の煩悶は、中々ひととほりではない。

御母樣の、折角の思召で學校に入れて戴いたけれど、斯樣、落第などして、却つて、御心配をかけては。

わたくしのためばかりでもないだらうが、今度の御病氣も、急には、全快せないらしいし。一層學校の方を全く止めてしまうて、御母樣の手助をして行かうか知らん。

さうすれば、何にも、落第のために、學校を止めて、仕舞ふのではないから母のために、といへば、立派な理由になるわ。何か、一道をでもみとめたかの樣に、自然と愉快の顔色になつて來たが、其も、ほんの瞬間で、心は、再、暗黑に向つて駈けこんだ。御友達の前はそれで濟むとしても、何時か、御母樣に知れいとも限らぬ。さうしたら、何と思召すだらう。伯父樣があれほどに御止なさつたのを、無理のやうにして入校て下さつたのに。

それはそれとしても、御母樣には、何というて退校のことを御願申したらよからう。御許のないのに、自儘に退校も出來ないし。思うて見れば、自分の不勉强から退校せねばならぬやうになつて、それを、御母樣の御介抱のためにというては濟まない。御友達だつても、まさか其樣とも思ふまい、勿體ないことでもあり一種の罪惡でもあり、ます／＼、わが耻辱を大くするやうなものだ。

それとも、まだ、學校へ登校たものだらうか。



如何しても恥かしうて往かれぬ。とつおひつ、思案の中に、Hは、いよ〳〵、明後日から新學年を開始するといふ日までに進むで來た。

未亡人は、勿論、まだ登校させるつもりらしい。別に、學校にいつての話は打出さぬが、折々、重くるしげな、頭をあげては、課業の復習をすゝめて居られた。靜子の昨今を知らぬではないが、たゞ、しづかに、自分で反省する期の來るのを待たしておく心算であらう。

其のひるすぎ、武男さんも、行軍から歸つて、おはいそぎで、御母樣の御見舞に來た。軍人氣質に言葉がかど〳〵しいところがある、のみならず、舉動が、規律正しく嚴正なので、さすがの次郎さんさへも、十分、あまへる中にも、いくらか遠慮するところがあるくらゐ。年よりは、たしかに、大人びて居る人である。

日頃の信切にせらるゝことはわすれて、靜子は、たゞ、

　何と言しやるだらう。

と、また、新しき恥辱にでも遭はねばならぬかの樣に、御母樣の病状を聞いて居る兄樣を守つて居つた。

（まだある）



谷子爵夫人

田島生

おひたしにおはぎ

何事にも健忘性なる世の人は、近き北清事件こそ

ともかくもあれ。四五年昔時の日清戰役の事だに今は、語るもの稀なり、思へば、西南戰爭より、今年までに、はや、幾年をかすごしけむ。二十と四五年。即ち、二昔半の古となりぬ。あはれ、幾人か、よく、その折を記臆し、追懷するものある。

當時、子爵夫人が物せし、おひたし、おはぎの御馳走は、今に至りても、猶、樺山將軍大迫將軍等をして、訪づるゝごとに、先づ、その御禮をいはしむるばかりありきといふ。さすがに、世の人も、かたり傳へて忘れざるは、そのもの丶、味よりも、眞情のたぐひなかりければならんかし。まことに、其の心ありとも見えざれど、世に其の名を知らるゝほどの婦人は、大方、何々會の幹事にかねて何の評議員、何の贊成員、何の發起人など、さても、如何なる折にか、わが家庭に於ける責務について、考へ行ふ時間を得らむとあやぶまるゝまでに、肩書の多きを榮とせらるゝに、「それも、よき人は、自ら求めて其の多きを貪るものはあらざめれど、」子爵夫人は、猶、つとめて、然る繋累を避けらるゝが如し。

『百姓そだちで、當節のことは、よく知りませぬから』

とは、あまりに、謙遜せらるゝものかな。實際はさるかたに心を碎かるべき時間を有せざるを喞たるゝならむ。五人の令孫愛子の教養を、手一つにしかも、ひとかたならぬいつくしみは、秋の長夜も春の日も、たゞ短しとのみ思ざるべきに、子爵婦人の、夜に日に、せらるゝ事は、この他にもいと多かり。

報知新聞に

報知記者、嘗つて、婦人の素顔と題せる中に、子爵夫人を記して、

雑巾掛け(わたしがするよ)いつも、夜わけぬ前に起き出で、家人の目さめぬ様にと、いと雨戸をくり、女中などの、なほ、いぎたなう眠り居る間に、火など焚きつくるなり。子爵の書斎居間などは、手づから掃除し、雑巾がけまでも、決して、下婢を煩すことなし。夜は、初更まで働の手をやすめず、良人の歸邸遅き時など、深更まで、夜なべして待つなり。

一寸でも仕事(女の情)かくて、夫人は、少しの間をも惜みて、食事の外は、朝から晩まで、襷をはなすことなし。定めの朝支度のかたつきて、なほ朝餐に、少しの間ありと見れば、急ぎ其の日の仕事に取り掛る。日々の御仕事と申せば、裁ぬひ機織るわざにて、朝飯前に、一匹の機を經あげらるゝことさへあり、夏の夜など、涼風通ふあたりに一家まどゐして、たのしく語らふ折にも、夫人の手には、編物など必ずあり。旅行の汽車中にも、大きやかなる編物の袋を携へ疎かには過さじと見えたり。いかに、羨しき心ならずや。ならはまほしき行動ならずや。

父母の恩

おひたし、おはぎの製方はおろか、およそ、婦人の心得べきこと、何としておろそかなるはあらじと聞えたり。子爵夫人は、これを父母の恩といへり。

わたくしは十一二、姉は十四五の時に、親は、わたくしどものために、下女を皆解雇してくれました。それからは、姉と二人で、庖厨のこと裁縫のこと、なにやかや致しましたので、いろ〳〵なこと、少しばかり覺えてをります。これも、皆、父

母の恩で御座ります。

その子のために、下女を解雇せし眞誠ある親の慈悲は、生の寡聞、いまだ、世にかゝる例ありしとも聞かず。夫人の令名、まことに所由ありけること、今更に、感嘆に堪へざりき。

これにつけても、たゞ、眼前の愛に溺れて、その子その孫の、行末の幸福を尠うする、世の人の親の心にぞ、いといとほしけれ。

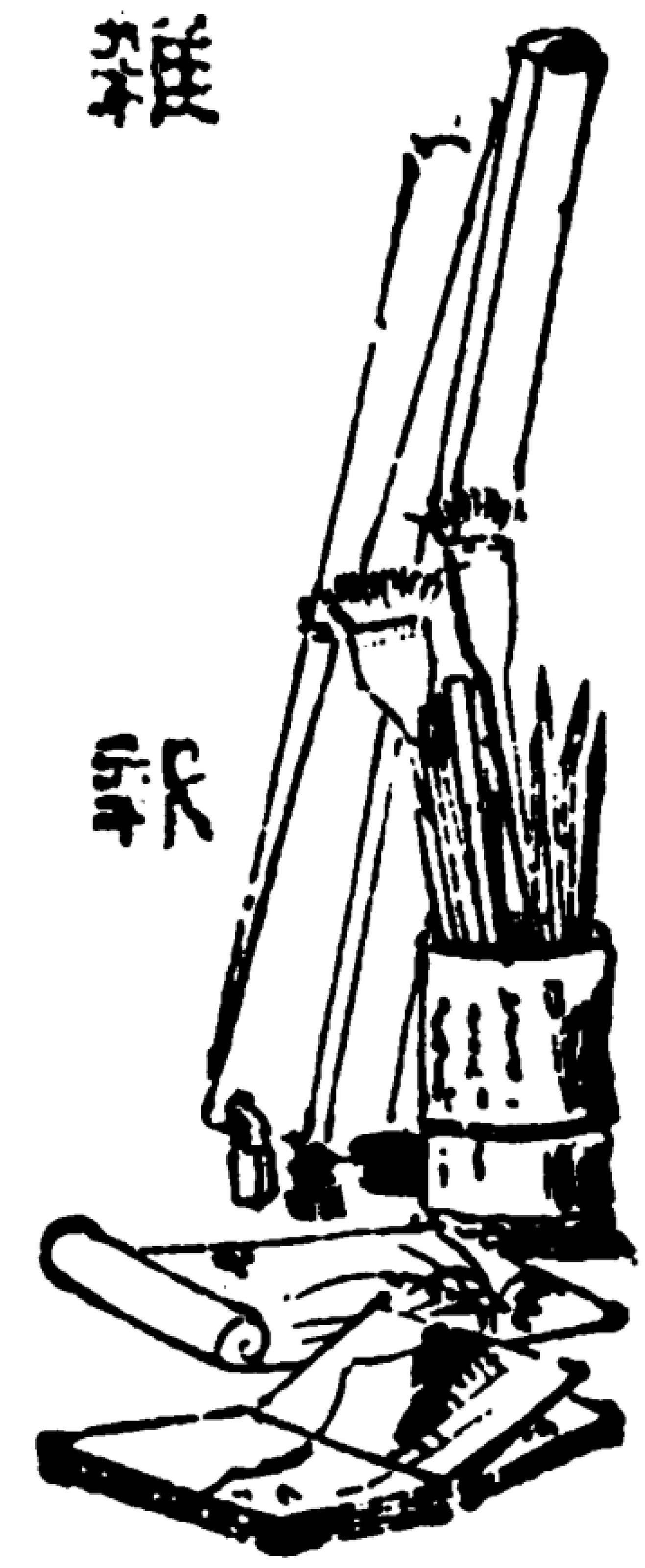
家庭教育

家庭の教育について御話をと切に乞ひたれど、いろはのいの字も知らぬものが、教育などゝいふことを、何で知りませう、家の子孫にもなにも、申しもしませぬ、いたしもしませぬ。そのなりゆきにまかしてをります。たゞ、聞及んで居られるかも知れませぬが、灸をすえさせることは、おこたらず、やつてをります。灸も、一がいにすてたものではありませぬなど、うちいはるゝも、例のみこゝろあるに、强ひて乞はむも詮なからむとてやみぬ。

されど、讀者諸嬢は、さいつころ、谷子爵の令孃が、うつくしき帶を買はずに、其の代を慈善のことに用ゐむことを請ひてゆるされたる美談を忘れざるべし。この一事、優に、子爵夫人の、平素の用心を察せらるべきを信ずるなり。

おもふに、夫人は、言葉を以つて訓戒さるゝことをせず、專ら、實行を以つて導かるゝものにして、朝夕の行動、やがて、家庭教育の唯一の道とせらるゝが如し。千百の議論も、一の實行を缺かば、少しも益するところなかるべし。況んや、彼の空言を弄して、いたづらに、婦人の將來を誤らしむる人々(もしあらば)之を聞きて慚死せざるを得ば幸なり。

(なはり)



雜錄

○宮廷錄事

●●●●●●●皇后陛下及東宮殿下行啓●●●●●●●

畏くも、皇后陛下には、去にし日上野公園内ある日本美術協會の展覽會へ行啓あらせられたり。御陪乘は高倉典侍、供奉は香川大夫、山内亮、桂侍醫、小倉權典侍、六角權掌侍、堀川命婦等にして北島權掌侍、樹下權命婦御先着なりき。是より先き美術協會にては、玄關御車寄に紫幕を打廻し、館内の御道筋には白布を敷き詰め、御休憩所ある床の間には、雪舟筆蘆雁の双幅を掛け、百合花、菖蒲を挿したる花瓶、及光琳作秋草蒔繪料紙硯箱を置き、床脇違棚には、蒔繪十種香箱、香盒、香爐等を備へ、書院前には、蒔繪、卓上に具慶筆の伊勢物語一卷を飾付くる等、奉迎の準備到らぬ限もなく、軈て陛下には、御順路を經て午前十一時十分御着あらせられ、細川副會頭の御先導にて、直ちに御休憩所へ入御、同所に於て副會頭以下金子審査總長、各幹事榎本子爵等へ拜謁仰付られ、副會頭より奉呈したる掛役員人名錄を御一覽あり。夫より副會頭御先導にて南館へ御通の節客室廊下に於て、有位有爵者へ拜謁仰付られ、本會委員及會員は中庭に整列して、南館より西館へ通御の節拜し奉りたり、而して、陛下には副會頭の御説明にて、東西南北館等隈なく御巡覽の上、御休憩所に於て御晝餐を召させられ、御休憩中、小蘋、玉章、寛畝等數十名の揮毫に係る扇面を獻上し、再たび本館へ御案内申上げ奉る折柄、東宮職より、東宮殿下

俄かに行啓あらせらるゝ旨電話にて達し、次で、殿下には有栖川威仁親王殿下御同車、供奉は村木武官長、高辻侍從長、清水谷武官、多久侍從、池邊侍醫等にて、午後二時十五分御着、御休憩の上、有栖川宮殿下と共に各館の御巡覧を終り、御休憩所に於て、皇后陛下に御對顔あらせられ、午後三時より同所に於て、餘興の吉備樂を御覧ありたり、演奏者は吉備樂家元岸本芳雄、及、小笠原子爵夫人愛子、同姉晴子、同弘子嬢外數名にして、君が代、平壌の曲、櫻井驛曲正成父子訣別、常盤國、小楠公曲下枠弓、以上五番の舞曲終りて、陛下并に殿下には、次の如く御買上げの上、御土産金として、陛下より金二百圓、東宮殿下よりも、若干園御下賜ありて、四時過ぐるころ御發駕、同公園内なる、第十一回撰書展覧會へ行啓あらせられ、金井之恭氏御先導、山腰會幹御説明申上げ、親しく

御巡覧の後、左の生徒の席書を御覧に供したりと。

山腰明將、北村靜衛、内田シゲ、込山貞、山腰貞文、内田嘉兵衛

右席書は、悉く御持歸りとありたるが、尙同會へも、陛下及び、殿下よりも若干圓の御下賜金ありて、還啓あらせられたるは、夕日のまさに山の端に入るころなりしとぞ。尙當日御買上の品々は次の如くに承はりぬ。

○皇后宮御買上品

	代價
水晶の零宮	八十五圓
笹の繪花瓶	同 二十八圓
銅の七寳竹の繪花瓶	同 八十五圓
青花虎溪三笑圖の花瓶	同 五百圓
十八金の時計鎖	同 三十五圓
象牙置物	同 二百七十五圓
純銀製卷煙草入	同 百四十圓
蹴鞠雛の圖	同 二十圓
秋園遊猫の圖	同 三十五圓
秋草山水の圖	同 五十圓
秋草圖	同 五十圓

春園の圖　代價　五十圓
黑地淚掛の蒔繪の硯箱　同　二百二十圓
花瓶　淺黄の色　同　三百三十八圓
（東宮殿下御買上品）
宇治川戰陣の圖　代價　十五圓
（以上）

●東宮御所御祝宴　去にし廿五日は、皇太子妃殿下御誕辰に當らせらるゝを以て兩殿下には午前八時より參賀を受けさせられ、十一時卅分よりは、有栖川宮、同妃、山階宮各殿下を始め宮相夫人、川口次官、同夫人、中山大夫、高辻侍從長、同夫人、村木武官長、九條、鷹司兩公、其の他東宮職及宮内省高等官等數名を召され、午餐を賜はりたりと、尙承はる所によれば、高輪御殿なる常宮、周宮兩内親王殿下、麻布御殿なる富美宮、泰宮兩内親王殿下には、何れも御養育主任を御使として、皇太子妃殿下御誕辰を參賀せしめられ、又、中山從一位、柳原權典侍、園御用掛等の方々も、青山御所に參向して、御祝詞を申上げられたる由なるが、京都なる賀陽宮殿下を始め本願寺新法主夫人、舊女官滋井外數名よりも當日祝電を奉送仕れりとぞ。

●迪宮殿下御移轉期　東宮妃殿下には、御離床遊ばされてより少しの御障もあらせられず、殊の外御健康に渡せられ、日增御盛に成らせ玉ふ迪宮殿下の、いとも愛らしき玉顏をみそなはしては、御喜悅なゝめならずましますと、承はるこそ目出度けれ。さて又漏うけ玉はる所によれば、六月二十八九日頃より、河村伯爵邸に御移轉の筈なりしが、御乳人御選擇の爲め、少しく御延引となりたるも、多分七月五六日ごろ、御移轉遊さるゝ御豫定なりとぞ。（六月廿五日拜記）

○表彰錄

●孝行事　本誌前々號より掲載し來りたる、高崎彰善會長の談話にして、遠山いね子女史が筆記せしつゞきあり。いはく、

明日からは、川崎の大師、池上の本門寺などに參詣して、夫れから横濱邊を見物して、藤澤に往く、其の歸りに横須賀に往きたいと云ふから、私から横須賀の鎮守府の司令長官井上男爵に向けて紹介をして遣つた。

夫れから今一つ感ずべきは、萬世館の主人辻井仁四郎である、其譯は此善行を悦んで、宿料を取らずして、孝子母子を宿めて置くと云ふ事であるから、一所に招んだのである。所が正直な人で殆ど頭も得上ず始終落涙して居た。茲に一つの奇談があるが、前述の樣な次第で此の宿屋へ孝子を尋ねて來るものが、種々ある其内に青木某と云ふものがあつて、鈴木の宿つて居る所の居間の床に美濃の養老の孝子の畫の掛物が掛つて居つたのをみて、これは卿のか、或は宿屋のかと聞いた所が、宿屋のであると云つた。夫れから宿の主人を呼んで如何云ふ譯で此の幅を懸けたかと云ふと、別に何も譯があるのでは無いが以前から掛けてあつたのであると云つた、之れは其の主人も養老の何たる事を知らず、只々内に有つた掛け物をかけておいたので、勿論故事の有無などは知らぬとの事であつた。で此の幅の故事を云つて聞かせて、實に此の幅が茲に掛けてあると云ふのは、偶然甚だ不思議であると云つて、話した所が此の事を聞いて、孝子も主人も大に感じたと云ふ事であるが、之れは餘程面白い話であると思ふ。

(をはり)

○教の栞

●四恩瓜生會　では、去にし二十日午後一時から、東京市養育院會堂内で例會を開かれました、當日の重なる出席者は、堀尾大僧正、磯部武者五郎氏、大谷尊子刀自、安藤子爵母堂及び令夫人、其の他岩佐、原、河野、大倉諸氏の令夫人などで、豫定の通、養育院創立以來の死亡者七千余名の爲に、堀尾淨土宗大本山法主が導師となつて、法要を營まれました。夫れから同師の法話と、磯部足立二氏の演說がありまして、散會になりましたのは、夕日の西に傾いた頃でした。

●全國各女學校卒業生　第五回

●東京府第二高等女學校　に於ては、去にし三月廿九日卒業證書授與式を行はれたり。其の人名は、左の如し。

●補習科卒業生

青森縣平民	櫻水いよ	明治十三年三月生
東京府平民	横山須磨	仝十三年六月生
東京府士族	北村初女	仝十四年三月生
千葉縣士族	岩崎ゆき	仝十四年五月生
千葉縣士族	松山清	仝十四年五月生
東京府平民	日山ゆき	仝十四年九月生
東京府平民	小川まへ	仝十四年十月生
神奈川士族	羽生田錫	仝十四年十二月生
東京府士族	深瀬カツ	仝十五年二月生
茨城縣士族	柴田なつ	仝十五年六月生
東京府士族	柳川久	仝十五年七月生
長野縣平民	吉村みね	仝十五年八月生
東京府士族	宍戸みち	仝十五年九月生
東京府平民	田路綱子	仝十五年九月生
千葉縣平民	佐藤シゲ	仝十五年九月生
栃木縣平民	菅井テイ	仝十五年十月生
東京府平民	佐藤操	仝十五年十一月生
山梨縣平民	長田かいの	仝十五年十二月生
東京府士族	春山雪	仝十六年一月生
群馬縣士族	山崎みつ	仝十六年一月生

東京府平民　横尾たみ　明治十六年二月生
三重縣士族　桑原はる　仝十六年三月生
茨城縣平民　土井璧　仝十六年三月生
東京府平民　山下しげ子　仝十六年五月生
愛媛縣士族　酒井ミツ　仝十六年六月生
東京府平民　加藤米　仝十六年六月生
靜岡縣平民　小橋三四　仝十六年八月生
東京府士族　酒井きく　仝十六年九月生
神奈川平民　小島ハマ　仝十六年十一月生
埼玉縣平民　竹越こう　仝十六年十一月生
東京府士族　小林顯子　仝十六年十二月生
神奈川士族　木野村加代　仝十六年十二月生
千葉縣平民　鈴木たい　仝十六年十二月生
大阪府士族　宮崎鉄　仝十七年二月生
東京府士族　長澤彌代　仝十七年三月生
東京府平民　山口さし　仝十七年九月生
東京府士族　武井綱枝　仝十八年一月生
東京府士族　峰尾萬　仝十八年一月生

●本科卒業生

東京府士族　淺田はる　東京府平民　平野みね
東京府平民　森ふみ　熊本縣士族　小堀くま
京都府士族　關田りつ　北海道士族　平田らん

神奈川士族　荒木はる
神奈川平民　田中みゆき
大分縣士族　緒方せつ
大分縣士族　吉田ゑい
茨城縣平民　小田さく
茨城縣平民　輕部せつ
東京府士族　片倉いち
茨城縣平民　長谷川滴
京都府士族　戀川しやう
東京府平民　寺田あい
群馬縣士族　松本久代
鹿兒島士族　市來笑
東京府士族　石原つゆ
埼玉縣平民　石井かく
東京府士族　須藤はな
宮城縣平民　小野寺つぎ
長野縣平民　小林よし
福岡縣士族　木庭まさ
茨城縣平民　根本千代
茨城縣平民　櫻村まさ
福島縣士族　伊東らさ
廣島縣士族　香川あき
千葉縣士族　千田こき
千葉縣平民　小野れつ
和歌山士族　松本資登枝
東京府士族　深谷さい
京都府士族　安村久江
東京府士族　横川ちか
東京府平民　片桐たつな
北海道士族　佐藤みき
群馬縣士族　芝崎まつ
東京府士族　加藤さよ
東京府士族　飯島茂
靜岡縣士族　市川八重
東京府士族　鈴木うた
東京府士族　齋藤百世
東京府士族　野口その
北海道平民　立見しず
東京府平民　秋山けい
東京府平民　井上たみ

（以上）

〇池塘芳草

●東邦之雄鎮　ワルデルゼー元帥の東京着以來は我陸軍其の他都門百般の風物を視察して、其の進化の豫想外なるに感じ、各所の招待會に於て、頻に之を稱揚したるが、特に獨逸公使館に催はせる午餐會に於ては、我山縣元帥に對し、最も懇篤なる言辭を以て、日本帝國が維新以來僅々三十餘年間に於ける、文武制度の進運は、外人の深く感ずる所、中にも、陸軍の紀律嚴肅、秩序整備し居るは、北清に於ても、已に實見したる所なるが、東京着以來親しく實見を重ねて、一層其の進歩に驚きたり。日本帝國は、實に東邦の雄鎮として、其名聲を世界に傳ふるに足るとの意を陳べ、山縣元帥は、過稱の辭却て慚愧に堪へずと答へ、兩元帥の間、互に、一種の感に打たれし如くありしと聞けり。

因に前號華伯肖像として此の欄内に收めたるは、實に獨の陸軍々醫監ドクトル、キユーレマン氏なり、氏は、前軍醫正ドクトル、スカルケ氏と共に、獨乙赤十字中社の篤志擔架夫敎科書の著述に從事し、スカルケ氏中途に死せし後は氏一人にて、遂に出版し大いに、斯道の爲めに盡したる人なり。然るに本誌印刷所目下改築中にて、華伯の肖像を失し、とりまぎれてキユーマン氏の像を挿みたり。依てこゝに訂正し併て其の罪を謝す。

●あやまり　誤てあらたむるに、はゞかる事はないと申しますが、まア、過失ほど厭ふべきことは御座りません。とは云つても聖人何ぞ過なからんやで、すぎ去てからは、どうも致し方がありませんから、玆に御詫をしますが、本誌訪問欄は漫録欄の次に置きますのが、遂にとり紛れて樂園欄の了になりまして、体裁の一致を缺きましたのは、記者の大に謝する處で御座ります。

○口繪につきて

●涼味● 破簾漏る月、いと古びたる蚊子にさし入りては、風雅男ならねど流石寐かねて、おゝよき月よ、麗るはしの夏の夜やと、團扇片手に庭にいづれば、吹き渡る夕風涼しく、久方の雲はれつくして、空一面の星影、さながら金剛石を鏤めたらん如く、當落んばかりの夏の夜、さやけき月の光を蹈つゝ、過ぎ行く雁の一行うちながめて、神が玉ひし自然の涼味を甘る心地よさ。あはれ松亭子や、御身の筆の涼しさ、其の譜の眞に逼る、諸媛いかに。

●山陽の手翰● こは、豫告の如く近世の一大史家山陽外史の手翰にて、本社長が秘藏の品なり。山陽外史は、安藝の人名は襄、字は子成、久太郎は其の通稱、號を三十六峰といふ、京師の儒者なり。幼にして鋭敏嶄然頭角を見はし、長ずるに及びて、益々天禀の詩才史筆を揮ひ、忠君愛國の大義を講じ、以て人を利し、世を益したる功績の偉なることは、已に諸媛の知る處なれば、こゝに云はず、天保三年九月二十三日、歲五十三病て逝く、著書少なからず、皆世に行はる。卷頭の手翰、能く山陽其の人のひとゝなりを知るに足る。（超舟漁史）

○新刊批評

○源氏讀本（桐壺の卷） 大和田建樹校訂

跡見女學校の藏版なり。卷首に、源氏物語につきての梗概をのべ本文の上欄には、古歌なひき、卷尾に、簡畧なる語釋を附せり。書物の体裁は、わるからねど、文字の間隔接近にすぎて、讀みよからず。本年四月上原書店發行、定價金十八錢なり。

○人民讀本 全 竹越與三郎著

現今、我が國の普通教育に、我が國家、人民、政務に關する教材

の十分ならざるを慨し、少年子弟をして、國政上の辨識を得しめんさて編述せるなり。

叙事、理論にはしらずして、其の質地を、主さして、簡易に説明したるは、まこさに宜し。公明正大なる國民の養成に資せんさつさめたるは、更に宜し。實に、當時の急に應じたるものさいふべし。

然れども、缺點も、亦、少からず。全篇通じて、語法に、破格多く、語句、叙述等に、妥當を失したる所、少からず。讀本さしては、一大缺點なり。

又、我が國体の粹、我が國家成立の根元さもいふべき君臣の關係を説きて、要領を得ざるは、大に惜むべし。ここに、自主の主張を缺かんさして、却りて、民主々義を主張するが如くに聞きなさるゝ語句の、往々に見ゆるは、著者の反省を要すべき點なるべし。たとへば「日本は、一の大なる家族にして、我等は、皆な、此の家を導く主人たり」さいひ、又「今や、日本人民は、立憲國なる新しき建物を築造したり。然れども、之が主人たる人民にして、云々」さいへるが如きは、無垢なる少年の腦裏に、如何に感ずべきか。こゝ、大に注意すべき要點なり。

以上、大に、改定修正を加ふるにあらずば、よし、小學校科外教授の料に用ゐるさしても、斷じて、適當のものさはいふべからざるなり。五月開拓社發行、定價金三十五錢なり。（五十園主人）

○あけぼの　第一號　あけぼの會

甚しいかな、流行の騷々たる、一度新派和歌なる聲、文壇の一隅に響き渡るや、名利を重ずる青年輩を驅り集め、こゝにかしこに小雜誌を發刊し以て、純粹精美なる敷島の歌道をみださんさするあり、あけぼのも、即、其の一には非ざるか。予素より、從來の死句贋句を麗々しく引用して、得々たる歌人には、組する能はざれども、今日云ふ處の新派歌人なる者が、殊更に三十一文字以上さして、不規則に漢語さいはず、俗語さいはず、出放題を稱して以て、詩的さか、美的さかさ、得意がる所謂詩人には、大に反するものなり。

此の雜誌、初號ながら体裁わろきにあらざれど紙數僅に十八頁、記事、又、見るべき者なきは遺憾なり。六月一日東京姫百合社發行、定價金六錢なり。

○學生倶樂部　第一卷第三號　石川榮司

學生の爲に發行せらるゝ雜誌、實に其の數尠少にあらざるなり。されど大概、學術的に走りて、精神的修養に乏しかりしは、吾人の常に遺憾させし處なりき。石川榮司君も、又、予さ説を同ふし、奮勵一番、學生倶樂部なる月刊雜誌を發行し、大に學生の爲に盡す處あらんさす。其の趣旨に曰く、上略「今の所謂青年學生雜誌は、餘りに學科的教材に富んで、學生をして精神的修養を爲さしむる所以に於て缺くる所なきか、餘りに、纖巧浮靡の浮辭に富んで、學生をして深沈渾厚の氣魄を養はしむる所以に於て缺くる所

なきか、餘りに瑣屑繁苛の理窟に富んで、學生をして宏遠雄大の規模を立てしむる所以に於て缺くる所なきか、（下略、若し夫れ此の心を以て孜々怠る事なくんば、豈只青年學生を益するのみならず、やがて國家を益する事大ならん乎。

本誌、概ね、第一應接室、講堂、談話室、文藝室、圖書室、休憩室、運動場、第二應接室等の數項に頒ち、其の配置の如き秩序的にして、中々面白く、又、見るべき好文字に富む。六月三日東京育成會發行、定價金拾錢なり。

○愛知縣名古屋高等女學校卒業生同窓會　報告書　第二號

開卷先づ職員及び卒業生の寫眞揭さ、本居豐穎氏作の校歌、即、

こがれの館はあめつちに　ぬれていよ／＼輝やけり
操のまつは縮ゆきに　あひてます／＼色ふかし
年つきかされ學びねむ　のち世に己が立たむ身の
光りはさちにきほふべし　みさをは松にならふべし

に、奥好義氏の作曲せしものを附し、而して、會に關する昨年三月五日より仝十月十日に至る出來事を、悉く記載せし二百五十餘頁の册子にして、內、高津、松本二文學士、金子男爵の演説、志水大佐の講話、甫守校長の講義等、最有益の記事あり。其の他能く整頓し、表紙都ての体裁も惡しからず、之れ即、報告書としては、先づ／＼上々なるものとこふべし。五月廿七日名古屋永東書店發行、非賣品なり。

（以上、螢雪軒主人）

○次號豫告

題字　細川男爵

記者、一日、男爵閣下細川先生の邸に參り、特に、本誌の爲めに請ひ受けたる揮毫あり。先生が特得の筆を染められし其の語の如何に、諸媛が座右の銘として、婦道を全ふすべき秘訣あるかは、今こゝに言はず、請ふ次號をまて。

函嶺の溪流　高橋松亭

來れり。來れり。避暑の時は來れり。嗚呼是の時に當り、遠く塵寰を出でゝ、步を幽遠の地にうつし、水車にむせぶ流水の邊に至れば、溪氣津々夏なほ寒し。這般の消息能く松亭子の雅筆に上りて清涼掬すべし。

日本女訓　川崎重陽

女子教育の盛なるは、吾人の大に喜ぶ處なれども、弊害百出、婦道漸く誤らんとす。先生深く之を憂ひ、以て據るべきの大義を講ずる諄々、章を積み編を重ぬる三、悉く肺肝より出でゝ、字句最も親切、今回特に請ふて次號より精華欄に收むる事としたれば諸媛それ刮目してまて。

其の他、例に依りて記事豐富なり。

女鑑歌文月次兼題

七月廿日分
　歌　松下泉
　文　水邊納涼の記
右七月九日〆切

八月五日分
　歌　閑居萩
　文　暑中見舞の文
右七月廿四日〆切

八月廿日分
　歌　曉虫
　文　蓮
右八月九日〆切

九月五日分
　歌　川霧
　文　歸省中の感を記す
右八月二十四日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題　住所　姓名

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

題　住所　姓名

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

大林弘一郎先生著

中等國文學史

全一冊　洋裝美本

定價金六拾錢　郵稅金八錢

○從來國文學史の教科書として出版せらるゝものを見るに多くは評論の高尙に過ぎて授業者には其の要を知るに難からしむるものあり又或は引例の歌文も奇古にして解し難きものあり或は其の材料の非常に煩多にして文部省規定の時間内に教授し了ること能はざるものあり此等の事項は教科書としては其の教授上に少からざる不便と困難とを感ずる所にして實際之が任に當る各學校教員諸氏の均しく遺憾とせらるゝ所なり本書は著者が多年の研究より得たる考案を本とし之を實地の教授に徵し時間の配當材料の難易多少等には充分の調査を加へ且記述の體裁に至りては最簡明を主とし議論の高尙に失せざらんことを務め語調の流暢にして誦讀に便ならんとをはかり大に注意を加へたるものなれば中等諸學校に於ての教科書として適當なるは固より言を待たず。

「本書の特色」殊に附錄として一の年表を附し之れによりて時代文學の發達沿革其の他を一目の下に見ることを得しめ又國文學に關係最深き漢文學の發達を知らしめん爲特に歷代の漢詩文を蒐集して附錄の第二としたるは本書の特色とする所あり國語教育の任に當らるゝ諸彥に一讀を煩らし本書の其眞價を認められば乞ふ教科書として採定の榮を賜らんことを

發行所　東京市築地貳丁目廿一番地　國光社
特電話新橋八十八番

總　裁　小松宮大妃殿下
副總裁　鍋島侯爵夫人

大日本女學會發行（東京麹町土手三番町二八）

をんな

第六號發兌

第一號第二號再版出來せり

定價金拾五錢全國無遞送料
東京神田表神保町三

大賣捌　東京堂

（前附）三輪田眞佐子筆歌かるた（論説）女子の職業に就いて法學博士添田壽一●吾等の良友安井哲子●新女大學評論德富猪一郎（學藝）心理學大意島村瀧太郎●作歌批評大口鯛二●作文批評今泉定介●構文上の一用意五十嵐力（修身）經驗の効佐方鎭子（齊家）病者の居室後閑菊野子●改良女服仕立方渡邊辰五郎（世務）法制談岡戸法學士●經濟談伊藤秋南●鑛山石談井相洋●各地產業の概況（史傳）英國女皇傳下田歌子●十九世紀の婦人櫻井鷗村●國史上の婦人津田黄昏（譚叢）暗流水谷不倒●生捕られ熊湖山人（詞藻）皇長孫の降誕を賀し奉る歌●みやび會員詞藻（雜錄）東海道汽車の旅喜田文學士●岡山孤兒院の歴史炭谷小梅子●圖案武村千佐子●片輪車の摸樣について片野四郎（時事）不景氣の回復期●新内閣（彙報）兩陛下御仁惠其他數件

家事衛生

醫學博士三宅秀先生著
大日本女學會發行

總クロース綴金文字入り
定價金六十錢郵税金六錢

大賣捌　東京神田一ッ橋通町七　有斐閣

此書は醫學の泰斗たる元醫科大學長醫學博士三宅秀先生が文部省の囑託に由り各府縣師範學校高等女學校の女教員方を集め夏期講習會を開きて講義されたるものを此度大日本女學會より發行せられたるなり書中衣服●飲食物●住居●育兒●看病の五篇に別ち細密に衛生法を示し我國一般の民度に應じて實行し易き樣に説明せられたり家政を主る人々に取りて此上なき有益の良書たるは勿論教育の任に當る人々にも缺くべからざる參考書なり

豪吟集

寸珍美本　定價金八錢　郵税金二錢

新刊之披露

本集は千葉縣師範學校長弘田正郎氏が現今學生の薄志弱行を歎じプラトン以來の教育風に倣ひ本邦詩歌の中にて萃中の萃を拔いて編著せしものなり今の青年社會勉學の餘暇一本を坐右に置き時に豪吟せば豈ドヽ一ストライキ節を唱ふるに勝る萬々なるを疑ず

發行所　東京市京橋區築地貳丁目　株式會社　國光社
（特電話新橋八十八番）

新刊之披露

明治三十四年七月五日發行

女鑑

第貳百參拾貳號　毎月二回五日廿日發行

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷部印刷